

悠遊

第十六号



企業OBペンクラブ

表紙の絵 「プロヴァンスの黄金の秋」

山縣 正靖

プロヴァンスの秋は黄金に輝く。

この地の北部、ローヌ地方には銘酒 Cotes du Rhone の葡萄畑が広がり、収穫の秋には黄金色に染まるのである。

やがて冬にはローヌアルプスからの季節風、ミストラルが吹き荒れ、人々は強風に耐えながら、花咲くプロヴァンスの春の訪れを待つ。

企業OBペンクラブ同人誌

Ⅱ創立二十周年記念Ⅱ

《第十六号》

目 次

◇巻頭言……………名誉会長 深田 祐介 4

Ⅱ特集・創立二十周年記念

私と企業OBペンクラブⅡ

◇私の心の支え……………石川 正達 6
 ◇企業OBペンクラブと私……………大野ただし 8
 ◇私と企業OBペンクラブ……………都甲 昌利 10
 ◇私とペンクラブ……………大泉 潤 12
 ◇私とペンクラブ……………水原重矢子 15

Ⅱ特集・七十年代を生きるⅡ

◇アンチエージング……………阿部 洋己 20
 ◇七十歳を生きる、ミュンヘンにて……………安藤 晃二 22
 ◇七十歳から宇宙開発を顧みる……………稲宮 健一 24
 ◇私のセブンティーズ……………岩崎洋一郎 26
 ◇「七十歳をいきる」&「私とペンクラブ」……………上田 信隆 28
 ◇七十代のぼくへの六か条……………大西 宏 30
 ◇七十歳代を生きて……………大庭 定男 32
 ◇年金生活者……………金京 法一 34

◇悠憂の記……………児玉 忠雄 36

◇「退職老人モード」のとまどい……………垂水 健一 38

◇七十五歳のたわごと……………中村 爽 40

◇七十歳を生きる……………中村 将陸 42

◇七十歳を生きる……………西川 武彦 44

◇七十歳の言葉あそび……………野瀬 隆平 46

◇七十歳（古希）代を生きる……………森田 茂 48

◇七十歳からどう生きるか……………渡里 清 50

Ⅱ自由テーマⅡ

◇時間収入を増やす……………上原 利夫 54
 ◇実記を片手にリギ山へ……………鵜飼 直哉 56
 ◇南アフリカを訪ねて……………西川 知世 59
 ◇「国宝薬師寺展」を観る……………遠藤 俊也 60
 ◇続 海外駐在員のひとりごと……………大塚 滋 62
 ◇菅江真澄の津軽紀行……………大月 和彦 64
 ◇闘い取っていない権利と自由……………大平 忠 66
 ◇あなたならどうする……………木下 洋介 68
 ◇近所のこと……………釘澤 淑郎 70
 ◇会社での恩人……………佐久間直正 72
 ◇信用ということについて……………倉藤 金助 75

◇旧東海道歩き……………	清水	勝	76
◇袖摺りあった三人の中国人……………	莊司	忠志	78
◇理科支援特別講師を体験して……………	杉浦	右蔵	80
◇百二十回忌……………	高橋	孝蔵	82
◇ベイカー・ストリート二二一B……………	田谷	英浩	84
◇戦後教育の問題点……………	玉山	和夫	86
◇参議院制度の改革を望む……………	鳥海	博	88
◇「昭和二十年」……………	中川路	明	92
◇十一月 さむらいの月に……………	橋本	政彦	94
◇遠い夏の日……………	濱田	優	96
◇近代化と経済発展……………	浜田	道雄	98
◇ロココ劇場のとんだオペラ……………	平尾	富男	100
◇イスタンブールで逢ったある老人の話……………	福島	弘毅	102
◇ハナの生涯……………	古川さちを		104
◇モンマルトル・ジャンゴ・外人部隊・犬……………	細谷	博	106
◇太極拳教室を……………	松谷	隆	108
◇旅の愉しみ……………	三宅	劭	110
◇B29を二機も墜とした話……………	山縣	正靖	112
◇水辺旅行（〇八年）……………	吉壽	清巳	114
◇サプライズ……………	吉田	邦彦	116
◇仏教徒にあらずとも……………	三	春	118

Ⅱ 創作短編Ⅱ

◇アダージョ……………	山崎	礼子	122
◇民族自壊―お年寄りのための童話……………	新山章一郎		126

Ⅱ 分科会活動Ⅱ

◇ベン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………			129
◇二〇〇八年『ペン川柳』勉強会の成果……………			132
◇英語を読もう会……………			135
◇ナムコトラベル……………			136
◇掌編小説勉強会のこの一年……………			137
◇何でも書こう会……………			138
◇サロン21……………			140
◇ベストライフオンライン……………			142
◇追悼 関谷裕彦さん ―昭和江戸談話の宝庫を忍ぶ―……………	中川路	明	144
◇企業OBペンクラブのあゆみ(年表・年史)……………			147
◇執筆者名簿……………			154
◇編集後記……………			156
表紙制作……………	野瀬	隆平	
表紙の絵……………	山縣	正靖	
カット……………	児玉	忠雄・山縣	正靖
	吉田	邦彦・野瀬	隆平

▽母親失踪の恐怖

私は、「泣き虫」の気の弱い少年だったから幼い頃は絶えず母親の後、具体的には母親の袂にまつわりついて、母親の姿が見えないとすぐにベソベソ泣き出すありさまだった。この泣き癖がついた最大の理由は、母親に連れられて行く日本橋三越にあった。地下鉄が通じて、私一家の住む番町から一気に日本橋は行きやすくなった。ＪＲ市ヶ谷から新橋へ出てあとは地下へ降り地下鉄利用で簡単にライオンが玄関におかれた三越本店に辿りつけるのである。

母親はまず五階の呉服売場へ私を連れて行き、和服を着た番頭に「この子お願いね」と預けてどこかへ消えてしまう。それからが長かった。母親はいつまでも経っても戻ってこないのだ。「奥様はまだまだお座敷に出られるのにねえ」というお手伝いたちの怪しい眩き、父方とあまりに異なる母方の実家の雰囲気、あの方は新橋五人組と呼ばれた芸者のひとりだったという、これまたお手伝いの囁きなどが頭の中で入り乱れて「もはや母親は帰ってこないのではないか」という

理由なき恐怖が私の胸に拡がっていく。

▽オイテケボリ代は不二アイス

そこで畳敷きの呉服部でベソベソ泣き出すのだが、泣き出すと初めて和服の番頭が動き出し、どこかに店内電話を入れる。するとあつという間に母親が「ごめん、ごめん」と現われ、私は不二アイスへ連れて行つて貰いウエハースつきのアイスクリームにありつく、という次第なのであった。

▽ライオンは健在か

この母親失踪にまつわる私の悩みは後年、母の義妹たちの発言でやっと解消するまで続いたが、真相はごく簡単な話だった。私の母親は学校卒業後、三越本店一階のネクタイ売場で働いていた。そこで父親に見初められて結婚したのだが、友人恋しき、下町恋しきを抑えられなくなると、私の手をひいて日本橋のライオンの店へ出かけたのであった。

ところで三越のシンボル、あの二匹のライオンは今でも健在なのであろうか。

台湾の台北の三越へ行き、あのライオンに再会したときは、私の幼年時代が懐かしさと一緒に噴き出したものだった。

特集・創立二十周年記念 私とOBペンクラブ



吉田 邦彦

私の心の支え

石川 正達

企業OBペンクラブは、私の心の支えとなっている。このペンクラブは、平成元年（1989年）にサラリーマン作家として売り出して、参議院議員も経験した三菱商事出身の八木大介さんが企業OBたちに呼びかけて作った。初会合に参加したのは20人にも満たなかった。それがいま、会員は60人前後にまで膨らんでいる。

このクラブへの入会のきっかけは、北田純一さんと知り合いになってからだ。私が毎日新聞を定年後、日本新聞協会で働いていたころ、京都大学ラグビー六十年史をつくることになり、通史編の執筆を担当させられた。この時、京大ラグビー関東OB部会の役員であった北田さんが、通史を書く場所として、水道橋近くのマンションの一室を探して、資料用の本箱まで準備してくれた。

それからしばらくして、彼から企業OBペンクラブへの入会を勧められた。平成3年（1991年）四月のこ

とである。ペンクラブ創立時の話は悠遊第11号の座談会に詳述されている。

この年の2月に企業OBペンクラブとしての最初の本「知らぬは日本人ばかりなり」が出版されたばかりのときであった。会長の八木大介さんに紹介されて初めて会ったとき言われた言葉は「みんなの文章を見てほしい」だった。古い文語調の文章があったり、『テニオハ』の誤りや表現の仕方が古くさいので、人に読ませる文章の指導をしてほしい、という注文である。

会員のかたがたの原稿を読ませてもらうと、商社や製作会社で書かれていた業界の連絡文の調子が抜け切れず、固い。また年齢でもあるが、「・・・であらう」など旧文語調もある。八木さんの注文によって、私が「文章教室」を四回ばかり開いている。私は新聞社にはいつて、駆け出しの支局での取材記者時代を除いて、主に編集、整理、校閲の部門に長く暮らし、日本新聞協会の審査委員となつて新聞製作から離れた。だから文章を現代風にアレンジすることには自信をもっている。だが、ことばの勉強を怠っているの、あやしくなつてき

た。

企業OBペンクラブの出版活動は、この次の年、平成4年（1992年）ごろ、華々しく活躍する時代を迎えたのではなからうか。

「知らぬは日本人ばかりなり」の評判がよくて、雑誌「スクエア21」「国際開発ジャーナル」などへの掲載が相次ぎ、私も日本経営者同友会の日本経営者新聞に「ゴマスリ作法」などの連載をさせてもらっている。

平成6年（1994年）の1～2月には横浜市勤労福祉財団主催の「40歳からのマイライフプラン講座」が開かれて、クラブのメンバーが講師として招かれ、同年、「国際マナー常識事典」「最近テクノロジ―不思議？なるほど！」などの出版、私の仕事のふる里でもある毎日新聞社関係のアジア調査会で出している雑誌『アジア時報』の「はなしの広場」にも書いてもらって、いくらか稿料を得たこともあった。このアジア調査会の出版物をつくっている書苑新社から企業OBペン編として「ゆったり暮らす法則」なる本を出版したことも思い出す。

クラブはいま、さまざまな分野で活動している。私の接している分野では「何でも書こう会」の賑やかな活動が心に響いている。この会は、原稿用紙（400字詰め）2枚に一文を纏める習練の場。多分、亡くなった浅野正春さんの提言で始まったように記憶している。私もことし、何回か書かせてもらった。これからも出来るだけ参加したい、と思っている。

私はこの2009年6月には満88歳を迎える。長い文章を書くのは、少ししんどくなった。5・7・5のことはですむ俳句を学ぶことに力を入れることにする。平間真木子先生の教えを受けていたが、他界された。いまは、そのお弟子さんであった西川知世先生に指導してもらっている。「極月や悠遊原稿書き急ぐ」と言ったところか。やはり私にとって、企業OBペンクラブは心の支えとなっている。



企業OBペンクラブと私

大野 ただし

入会のきつかけ

調べれば分かることですが、生来の物臭で、すべてアバウトな話をさせて頂きます。

私が企業OBペンクラブの組織と関係をもったのは、まだセコムに勤めていたときで、通産省の外郭団体の「ニュービジネス協議会」の主催する講演会で、石川正達先生からペンクラブの活動についてのお話を伺ったときからでした。ただ、このクラブができたときから会社の先輩が参加していたので、いろいろとお話は聞いていました。また、この会の創立者である八木大介先生ともそれ以前にお会いする機会がありました。

講演会の後で、石川先生に「まだ勤めているのでウイークデイに参加できない」と話すと、「土曜日に新聞記者クラブで有志が集まる会があり、八木先生も出席されている」と教えてくださいました。

この会は八木先生、石川先生を中心に、三菱商事OBの北田さん、石山さん（共に故人）、中野さん等錚々たるメンバーが揃っていました。三井物産の先輩では三枝さんが居られました。私個人としては、この集まりに満足で、企業OBペンクラブに入ろうなどとは考えもしませんでした。

ところがここで事件が起きました。企業OBペンクラブの会長に理事の互選で北田さんが就任されたのです。

八木先生から「皆で北田さんを応援しよう」という提案があつて、中野さんと私が新たにペンクラブに入会することになりました。

入会してから中川路さんから言われたことですが、我々の勉強会は鳴澤会長時代の分派行動グループだったようです。また、その中川路さんも含めて、北田、亀井、藤岡と京都大学のラグビー部のOBが理事に四名もいて、なーのの会長選挙とも言われました。しかし、北田会長の就任によって、この会が大いに活性化したことは認めてよいでしょう。

ただ八木会長時代のように本の注文が次々に来る時代

は終わっていました。

クラブの実態と私の希望

この会に入る人は普通なら出版の機会はないか、と思つて入会したはずです。

私の損得勘定をいうと、皆さんの後について川柳の本に一句だけ出させていただきました。このときは児玉進さんの紹介で、『ポケット図解 ドイツ連邦のことがよくわかる本』を執筆中で、川柳にさく時間がありました。

私はこのクラブに入る前には、本も二冊出し、「東洋経済」や「月間宝石」にも寄稿していましたので、執筆活動には入会後何のプラスもないとか、むしろマイナスだったかも知れません。新聞記者クラブでの勉強会の時代には、石川先生のご紹介で、あちこちに書かせていただいたことを覚えています。

変な言い方ですが、今から振り返つて見ると、このクラブに入ったことで活動がダウンしたように思われます。

勿論このクラブだけが低調だったわけではありません。

「日本旅行作家協会」でも同じ悲哀を味わいました。こ

の会にも出版社からの依頼はほとんどなくなりました。

そういう状況がここ十年以上も続いています。その中で一時このクラブにも入られた児玉進さんの「東京ライターズバンク」の活躍は特筆すべき事柄と思います。

「出版については希望なし」、として「では、このクラブに何を望むのか」

私は、「企業OB」という言葉を二つに分けて考えた際に、「企業」よりも「OB」の方に錘が傾いた運営を期待します。このクラブで気になるのは、「企業」の延長線上で物事を判断される方が多いように感じることです。

企業での上司は「査定」という武器をもっているの、嫌々でも従わざるを得ないケースがまま起こりました。しかし、この組織では誰からも給料を貰っているわけではありません。組織から離れた人間が勝手なことをやってよいはずはです。

つまり、「OB」に力点を置いたクラブにならないものか、という願いです。企業、会社での生活は三、四十年に及びますが、今や定年後の生活もそれに匹敵するか、それ以上の時代を迎えているのです。発想の転換ですね。

私と企業OBペンクラブ

都 甲 昌 利

私が入会したのはクラブ設立5年目の1995年の1月である。きっかけは、朝日新聞の「投書欄」に私の書いた記事をたまたま読んだ大学同窓生の村田孝四郎君（退会）が「書くことに興味があるなら、定年退職者の物書き集団があるよ」と誘いを受けたのが始まりである。顔見世のため運営委員会に連れて行かれ、並み居る先輩会員諸氏の賛同を受けて入会を許された。4月にはいきなり運営委員に選ばれて各種のプロジェクトに参加させられた。最近でも新入会員が入会早々運営委員に抜擢されることがあるが、昔も変わらなかった。これがこのクラブの良いところで新入会員でも斬新のアイデアがあり、プロジェクトとして実行可能ならばどしどし推進する。

この会の設立者の一人である三菱商事OBで元参議院議員の八木大介氏が、仲間と企業小説を書いてみよう

集まったのが始まりと聞いている。「ペンクラブであるからには、小説を書くことが中心であらねばならない」が持論だった。毎日新聞OBの石川さんのお世話で、内幸町の日本プレスクラブで開かれる「小説研究会」に私も毎月参加をして、八木さんらに指導を受けた。八木さんはこのほか、企業小説数冊の本を書かれて書店にも並び、セミプロの作家であった。この研究会からは更に三菱商事OBの中野隆夫さんが光文社の懸賞推理小説に入選された。私も八木さんの指導を受けて、中国4千年の不思議な幻のお茶『獅竜茶』を日本企業が開発するという小説を書いた。更に、朝日新聞が懸賞小説を募集していたので挑戦することになった。甲子園高校野球名門の柳川高校野球部の才気煥発、美人の女性部長をモデルにした『天は二物を与えず』という小説を書いて応募したが惜しくも落選した。私はこの二作で小説を書くことを止めた。小説を書くには並外れた想像力が必要だ。私にはそれが無いことを悟ったからだ。現在、小説研究会は短編小説（掌編小説）を書く集まりとして女性を交えて存続している。いざれこの中から世の脚光を浴びる会員

が出ることを期待している。

私が入会した時の会長は鳴澤宏英氏（東京銀行ＯＢ）だった。国際金融の権威で「サロン２１」の前身である「内外情勢研究会」での時事解説は鋭いものがあった。銀行は不良債権問題を抱え大手は将来３、４に収斂すると言った予言はそのとおりになった。また広い人脈を持ち、月例会の外部講師には、藤原作弥（時事通信解説委員長）、市岡揚一郎（日経新聞論説主幹）ら当時第一線で活躍している人々を招いた。

同人誌『悠遊』創刊号が発刊されたのは１９９４年。私は第２号から毎年今日に至るまで書かせてもらっている。長年にわたる企業活動を通して多面的な知識、経験、ノウハウを身に着けた会員が著述する文章は、他の書き物集団には見られない独特な個性を持っていると思う。会員以外にも読んで貰いたいと思い、村田孝四郎君と二人で銀座や丸の内の小さな書店に売り込みに行ったこともよき思い出である。数冊しか売れなかったが。創刊号から第１３号まで長きに渡り編集世話人として活躍された石川正達さんには頭の下がる想いだ。今は大平忠

さん、浜田道雄さんの名コンビに引き継がれている。この会が存続する限り『悠遊』は死なない。

現在、最も人気のある「何でも書こう会」は浅野正春さん（日立ＯＢ）の発案で文章修練として始まり、現在は野瀬隆平さんに引き継がれて１３年間も続いている。元松竹社長の奥山融さんが何度か出席され、寅さん映画やラストエンペラーの裏話などを書かれて、貴重な文章に触れることが出来たのもこの会のおかげである。

この２０年間で最も変化したのは、クラブのＩＴ化であろう。２００１年に政府の肝いりで「インターネット博覧会」に参加したのがきっかけで、ベストライフオンラインの投稿などが始まった。当時、私は運営委員長をしていたが、パソコン不適應症候群で、後任として松谷隆さんに無理を言ってお願した。彼が中心となりＩＴ勉強会が開かれ、私は必死に勉強した。平尾事務局長が事務合理化に取り組んだのもこの頃であった。

クラブ会員は皆、個性のある教養人である。こうした仲間達と、これからも人間を学びあって行きたいと思う。

私とペンクラブ

大 泉 潤

一九九六年企業OBペンクラブ北田会長から電話を頂いた。会社生活が終わったら楽しいクラブがあるから参加しないかとお誘いであった。まさに、毎日規則的時間の余裕の無い会社生活を終わった定年直後で、開放感に包まれていたときである。同時にこれから何ができるのか、どんなふうに社会と関わるのか、また趣味を広げ楽しむことはないかと自問自答していた時でもある。

それにしても、北田さんのご明察と、こちらの年令までご承知の行き届いたご配慮に感謝した。北田さんとの出会いは昭和三十五年にさかのぼる。三菱油化に入社し、大阪営業所に勤務することとなった私は、週末は三菱商事のラグビー部に加わり、練習や試合に参加して過ごすようになった。北田さんは名門京都大学出身のスタンドオフで、華麗な球捌きで、センターをとめた小生をよくリードしてくださった。オール三菱でも主将を務

め、当時の社会人トップの三菱自工京都、水島の選手をまとめて強いチームであった。そのAチームに抜擢されたのも光栄な思い出である。それ以来の長い交遊である。

当時のOBペンクラブは例会と俳句、書こう会、出版の部会が活発であった。例会では当時の金融界の泰斗から経済情勢、金融界の状況を詳細、明解に解説があり、目からうろこの思いを重ねた。例会といっても、参加者は少数で、まるでゼミナールのような雰囲気で、時事問題の勉強に励む状況であった。金融ビッグバンなどの説明を詳細に聞いたのも懐かしい思い出である。

出版にも積極的で、当時の森田事務局長がプロマネとなり、ICS国際文化教育センターが編集し、大修館書店から「オーストラリア暮らし入門」を九八年七月に発刊した。クラブで十二人が分担執筆した。その取材に、シドニー、ブリスベン、メルボルンに取材旅行をした。初の自費気まま海外旅行で、友人宅に泊めてもらった。ブリスベンでは客が無く、たった一人の市内バス観光を楽しんだりなど南半球を満喫した。会員である三井

物産出身の櫻井清治さんのご紹介でメルボルン支店の方から現地情勢を教わり、またタスマニアの海産名物をご馳走になり思わぬ歓待をいただいた。

その後日本ラグビー協会から招聘され、約六年のブランクを経てペンクラブに復帰した。クラブは大きく進化発展していた。会場も丸ノ内の地下仮設会議室から、代々木の新日鉄の素晴らしい会場に変わり、会員数も大会議室に溢れるほど多くなり、分科会も数多く、活発な活動を繰り広げ、驚嘆した。

月例会 月に一度の会合は事務局長、運営委員長が全会員のために、有意義な会合をプロモートし、会員動向、行事、特に文化の深化とIT化に取り組んでいる。特に毎月 の定例である、広い分野からの講師を招いての講演会はこの会の特徴である。

多くの分科会活動があるが、私は次の分科会活動に参加している。

ベストライフオンライン ヘルスネットワーク社が運営し、会員数三万を擁するメールマガジンである。毎月二編会員の作品を掲載する。小生がプロマネを務め、会員

のお得意な項目に出来るだけ多くの方に寄稿願うよう進めている。また、同社のスポンサー企業にアドバイザーとしての参加を求められることもあり、会員諸兄のよい刺激となっている。

俳句 俳句は、一年間を五つの季節に分け、季語を配し、森羅万象の写生と感情を十七文字に表現する文学である。句作の過程では、言葉の選択と含意に頭脳を搾り出すような作業を伴う。毎日身辺から題材を選び、五七五に置き換える練習を積んでおく、あるいは新聞、TVに発表される上位句を読むと、良い句が理解できる。そして月に一度の句会では、作品発表と評価、研鑽の場である。含意のある言葉、人口に膾炙した表現が高得点を獲る。日本語特に俳句用語、季語に堪能なメンバーに教えられることが多い。

そして作句が一年分くらい貯まったところで読み返す。するとその時の情景が鮮明に思い浮かべられる。将来作品をためて句集の発刊を夢見ている。

何でも書こう会 八百字にオビニオン、紀行、趣味、随筆を書く会である。約二十人の筆者が思い思いに発表

し、参加者が推敲する。文章上達の極意を学ぶ。プロマ
ネの進行で、参加者全員が自分の作品二十三枚を机上に
重ねる。そして順番に右に送り、参加者全員の作品が目
の前に並ぶ。美しい写真や挿絵があると思わず手が止ま
り感嘆の声が上がる。平均十七の作品を四時間かけて組上
にのせるので、一作品の論評にかけるのは凡そ十五分に
過ぎない。先ず作者の朗読から始まる。聞いていると、
作者の健康状態、気合、気分が伝わってくる。八百字を
二、三分で読み終わると、文章の意図内容に対する質
問、意見の相違、言葉使い、文法などに活発な開陳があ
る。参加者それぞれの生活と意見が良くわかる瞬間で、
もつとも質の高い時間である。参加者の気分が若返り、
血が奔流するようである。顔面紅潮し、活発になる時間
である。

英語を読むもう会 英語力の維持のため、トピックスに
挑戦する。海外の生の情報が、会員の豊富な知識で解説
され、頭脳が新鮮になる。題材は、時事問題、文学、
経済、脚本など多岐にわたり、担当者の経験、知識、含
蓄が披露される。普段気のつかないような情報の断片か

ら、世界情勢の変化に繋がる出来事を見出すこともあ
る。昔の語彙をリフレッシュし、更新する得がたい勉強
会である。

このように、月に数度の会合は刺激に満ち健全な心身
の維持、社会参加、活発な討論と高齢者にとって素晴ら
しいサークルである。会員は基礎の確実な会社、転職
することなく終身勤め、無事定年を迎えた方が多い。勤
勉、健康、家族に恵まれ、悠悠自適、の余裕ある生活を
エンジョイしている。加えて会社生活時代から国際的接
触が豊富な業務に携わっている。おおむね価値観が平均
的なグループである。従って、ペン活動の作品も、多岐
にわたるが、共通の尺度で議論の対象になる。環境も明
治神宮、代々木公園に隣接し、緑豊である。往復の散歩
を含め、体力維持にも欠かせない。私にとっては、ペン
クラブは今や生活の一部となっている。今後も企業OB
ペンクラブに参加し、会員の皆さんとの交流を続けられ
ることを念願している。

私とペンクラブ

水原 亜矢子

「水原の女に美人はいない」これは我が家に伝わるかなり知られた文言である。でその美人のいない水原の家の長女と父はなぜ結婚をしたのだろうか……。その前に代々、水原の家は、医者であり、先は徳川家の御典医であつたそうだ。母の父つまり私の祖父水原滋、その兄水原豊（秋桜子）の兄弟は当然、父親に医者と言うより當時神田にあつた水原病院を継ぐべく教育された。この病院というが、実は産婦人科である。今は少子化で産婦人科も減少しているようだが明治時代である。先代の生真面目であつたこともあつて、産婆学校もあり、かなり盛んだつたようだ。一説には兄豊（秋桜子）は女性（と言つても患者であり、妊婦だが）の相手をしすぎて（なにせ十月十日はある）すっかり女性が苦手になり、……自然——山——俳句に走つたとも、一族ではまことしやかに言われている。……と言うわけであまり熱心に家業の産

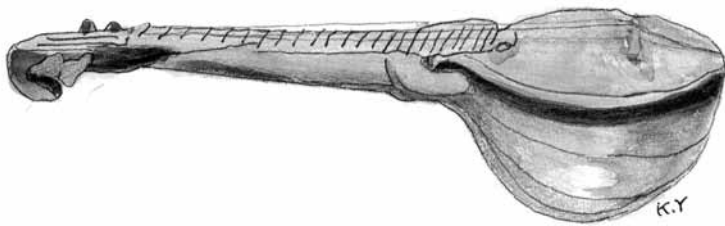
婦人科をやらず、俳句にのめりこんでいるので、弟である私の祖父、水原滋の方がかなり病院を支えていた。この時点でも、むろん、水原の家に美人はからきしいない……。ただ例外が一人だけいるにはいたようだ。私の祖母であり滋の妻「綾子」が大層、美しい人だつたと聞く。残念ながら私は会う事は出来なかつた。若くして母が二十才にならんとする頃、結核で亡くなっている。でもこの人は外からの人で水原の血筋ではない。祖父はその後結婚はしないで独身を通したが、その代わり実に私を可愛がつてくれた。小学生になると、自分の養女にしたぐらいである。私はこの祖父であり、養父である父から、また中学生になつてからの俳句の師であつた伯父、秋桜子から多くの話を聞いた。水原病院が盛んであつた戦争前の良き時代、古典や文学書を読み、歌舞伎を楽しみ、落語を聞き、短歌を習得しながら、秋桜子が自分の美的世界を創り上げていく過程と、その芸術的な美と自然の美を自分の内に調合していき、それが秋桜子俳句の完成となつたようだ。私はその頃の時代を想像してみる。実に優雅で、余裕のある時間が流れている豊かな刻

である。俳句に没頭していた秋桜子は、戦争で病院が焼け、結局勤務医となった時（祖父でもある）、良かった、これで気が軽くなった、俳句をもっと深める事が出来るよと言っていたようだ。私の母とえば、自分の母親を亡くし、戦争中は、甲府に疎開をし、慣れない田舎暮らしの中で祖父の面倒を見るといふ、苦勞をしながら、青春時代を送った。大変であつたであろうが、日本が貧しく、苦しい時でもあつたろう。やがて東京の文京区に戻りいよいよ私の父との出会いである。慶応大学の学生だった父と母が最初どこで会つたかどうも二人とも覚えていないようだが、母の弟が慶応の医学部の学生だったので、共通の友人を通じて父は文京区の家に入り浸りになつたらしい。ここまでは普通である。普通でないのは、父が母より五才も若かつたこととハンサムであつたことだ。私は父が生きていた頃、大真面目に父に聞いたことがある。「当時、五才年上のママと結婚するのって、大変だったんじゃない。あんまり無いんじゃない」父「まあな」私「何で、ママと結婚したの？どこが良かったの？全然キレイじゃないんじゃない」水原の

女に美人はいない……。父答えて「あーだまされたんだな。でも料理が上手で特に洋食、ものすごく美味なんだよ」と言う具合である。この種明かしは、祖母は美人で料理が上手という天は二物を与えた人でその代わり早く亡くなったのだが、自分の娘（私の母）に美味しい料理を食べさせて教えていたようだ。それが生きたのである。父は慶応大学の法学部の学生でまったく文学にも古典にも芸術にもならぬ興味もセンスも無い、皆無である。ただ父が好きなのは英語である。大学ではESS（英語会）に入り、英語劇などをやり、早くに通訳の免状もとつた。おまけに英語の生かせる会社で船が好きと言う理由で日本郵船に勤務した。今から五十年ほど前である。日本が未曾有の発展を遂げる前だが、サラリーマン生活を、とに角、夜討ち朝駆けで働きづくめであつたようだ。東京、名古屋、大阪と港のある所に転勤をくり返し、最後は地球の裏側のブエノスアイレスに駐在までした。毎日、営業の仕事に神経をとがらしながらも規則正しい生活を送っていた。多分日本中のサラリーマン男性がそういった生活を送っていた時代であつたろう。私

はと言えば成蹊中学校へ入学した事で、文京区からより近い吉祥寺へと転居をし、当時西荻に住んでいた秋桜子の元に通って俳句を見てもらっていた。こうして私は、情緒と感性を軸として俳句を詠むという資質と、与えられた時間を大切に、組織の中で益を得るというサラリーマンの資質を、同時に側で見、また体験した時代だった。

秋桜子は、私が成蹊大学の時「良い俳人になれるよ。ばんばりなさい」という言葉を残して亡くなり、父は現役で亡くなったが、死ぬまでサラリーマンの仕事に忠実で、どこか律儀な雰囲気を持ち続けていた。豊かな個性も好きで大きく影響されたが、父の持っていたサラリーマンの雰囲気も大変好きで、憧れてもいた。その懐かしい雰囲気は今再び、この企業OBペンクラブで、家業の俳句を楽しみながら、感じているのである。これは父を失いすでに十年を過ぎようとしている私にとって真に幸福と言えよう。



企業OBペンクラブとは（会員以外の読者にために）

企業OBペンクラブは、平成元年に「世の中にも申したい」民間企業のサラリーマンOBが中心になって設立されました。その多くは海外勤務を経験した人たちでした。その後、クラブの発展とともに、海外経験は出張や旅行だけというOBやOG、さらには官庁や政府機関のOBなど、また「世の中にも申したい」人だけでなく、自分の人生や職業経験から何かを書きたくなった人、俳句や川柳をひねりたい人、世界の動きなどを同年輩の仲間と一緒に議論したい人など、独身女性や主婦を含む多士済々の人々が参加して、活躍しています。

●どんなことをしているか、その一端を以下にご紹介。

- ①同人誌『悠遊』の発行——一九九四年に第一号を刊行、それ以降年一回発行を続けています。
- ②月例会と講演会——猛暑の八月を除いて、毎月定例会では、会員あるいは外部からの講師による講演会を開催し、会員の知識欲を満たしています。

③何でも書こう会——会員の書く一編八〇〇字の短編（エッセイ、随想、コント等何でもよい）に対し、出席者が自由に感想、意見を出し合う肩のこらない楽しい会合で、文章力の向上を目指しています。

④掌編小説勉強会——二〇〇七年一月に原稿用紙十、二十枚程度の掌編小説を書くことを目標として発足しました。隔月にメンバーの作品の合評会を開催しています。

⑤ペン俳句会——月一回開催、句会ばかりではなく、年二、三回の吟行もしています。

⑥英語を読もう会——英米の一流新聞・雑誌に掲載された最新の政治・経済・文化に関する記事、更には短編小説を購読して楽しんでいます。

⑦サロン21——現代への理解は物書きには必修との認識から、特に国際政治・経済問題を中心に、歴史的、地政学的観点からの分析を自由討論形式で行っています。

⑧ペン川柳会——「川柳は小説の筋書き作りには最適」との意気込みで、楽しく詠んでいます。二〇〇六年四月『卒サラ川柳・不良老人たちの溜息』（青蛙房）を出版しました。

特集・七十代を生きる



野瀬 隆平

アンチエージング

阿部 洋己

老人への褒め言葉は「お若いですね」これに限る。言われて怒る人は先ずいない。特に女性には効果絶大である。若い頃は老けて見られた方が良いと思っていた。特に学生時代はその思いが強かった。それがいつの頃から若く見られる方が良くなったのだろうか。最近のような気もするのである。逆にこれが年を取った証拠だろうか。先が見えて来たから故に未だ若いと思いたいとの思いがそうさせているのかも分からない。長生きして元気で楽しい人生を送りたいとの思いは万人共通だ。年配者が集まると決まって健康談議に花が咲く。しかし果たしてそれに即した生活をしているかとなると疑問符が付く。

今年の初めからアンチエージングのクリニックに通い始めた。というのは久しぶりに会った友人夫婦が別人の如く澆刺として元氣になっていた。百聞は一見に如かず、見学に行ったらもう後には戻れない。ところが始め

て十か月今まで何年も飲み続けていた降圧剤が要らなくなった。通い始めた頃の血管年齢が明らかに改善されて若返った。治療法はクレイションとサブリメントを主体にした食生活の改善である。健康保険が使えないので、まさに健康を金で買うとはこのことか。

よく言われる予防医学と聞くとなんだか守りに入るようであまり魅力的に感じないが、同じ予防の意味でも「歳をとらない」「若返る」と言われるとエネルギーで明るく前向きな強さを感じる。とにかく「歳をとらない」という、今まで人類の永遠の夢とされていた願いが伝承としてではなく、実際にアカデミックに医療分野に導入され始めたということになるだろう。小生の通うクリニックの院長もアメリカの抗加齢医学会の専門医試験に合格した日本人の一人である。これからは日本でもこの分野が脚光を浴びることになるのではなからうかと思う。

高齢者が元氣でいるか、介護施設の世話になっているかでは国家経済的に正反対である。金がかかる方と使ってくれるのでは、プラスマイナス大変な違いだ。これからは我々が元氣で内需型熟年マーケットを築き経済回復の一翼

を担わなければならない。自分が身を置いた清涼飲料業界においても、かつては若年層の消費量が多かったが、今は高齢層の消費が伸びている。健康志向を反映して水、お茶などの無糖系が飲まれているのが、その一因である。どの業界も熟年向けのマーケティングの重要性に目を向け始めた。高齢化社会を迎え当然のことである。

人生は青春、朱夏、白秋、玄冬（玄は黒の意とのこと）と四季であらわされる。春の時代は植物でも芽吹きの時、これからの長い人生に対して研鑽を積み備えをする時代、勉学に励む時である。夏の時代は学業を終え、社会人となって社会のために働き、家庭を築いて子孫を後世に残す繁栄の時代である。秋は実りの秋、収穫の時であり、社会人に一区切りを付けた六十歳から九十歳くらいまでがその対象になるだろうか。人生の最も楽しい充実した時代である。冬はお釣りの人生と考え、静かに余生を楽しむ時代とのことだ。この最も充実した今を有意義に過ごしたいものだ。そのためにはまず健康第一。アンチエイジングは身体だけでなく精神的にも若いことが重要だと思っている。肉体年齢は争えないが、精神年齢は二十歳くらい

戻すのが適當ではないだろうか。今の白秋時代を社会への恩返しと思い、頼まれたことは先ず引き受けることにしている。いつまでたっても忙しい所以である。

所属するゴルフクラブから「とし男」の新年エッセイを頼まれた。なんと干支の暦が六廻りもしたかと改めて自分に感動した。精神的に若くいる秘訣は、感動する気持ちを持ち続けることだそう。母のことを考えたらまだまだ年を取ってられない。

九十五歳になる母は今でも週に三回友人と昼食に出かける。十軒ほどの決めた店を順に回り、食後は喫茶店で話し込み、夕方四時くらいに解散して自宅まで歩いて帰る。ジムの体操教室に通い、その宣伝ポスターにもなっている。その他俳句の会などで知り合った同類と、よく話のネタが尽きないものだとお互いに言いながら楽しくやっている。曰く、友達が段々いなくなるので、自分よりかなり年下の友人を作るのがコツだと。

楽しいかな企業OBペンクラブ。友人の輪を広げ、人生の蘊蓄を語り合えるなど、これ以上の至福はそうそうあるまい。

七十歳を生きる、ミュンヘンにて

安藤 晃二

その人が語るバッハは、僕のこの作曲家に対する思いと、僕が傾倒するその音楽を不思議な力で躍動させ、どこまでも引きずりこんでゆく説得力に満ちていた。ミュンヘンで行きつけの日本レストランでのことである。

ドイツ在住のある有名な日本人青年バイオリニストを応援しているという、その店の親方と僕との自然な会話に、その人が加わったのである。あの高名なドイツのオーケストラの日本人バイオリン奏者で、既に三十年以上この地に住んでおられる方である。プロの音楽家としてヨーロッパで教育を受け、長年この土地に根付いてしまふと、もう決して日本の音楽界にもどることなど考えられない、音楽そのものが違う、生涯をかけてその道を追求している人の言葉には真実を語る重みがあった。

僕もその「違い」についてはアマチュアオーケストラ楽員ながら、常々大きな関心があったので、興味深く傾聴

して、我意を得たりというか、胸躍る気持ちであった。

その人はグレン・グールドのバッハの演奏について語った。一九三二年生まれで、八二年に若くして世を去った天才ピアニストである。その話には一瞬にしてグレン・グールドが何か素晴らしいものを僕に示してくれるに違いない、と予感させるものがあつた。「聴いて御覧なさい」などとは一言も言わない、僕と同世代であるその人の話しぶりも魅力的で、その爽やかな表情に余韻が残った。

忙しさをやり過ごして、三ヶ月もしてからレコード店に行つて見た。これ程華々しくグレン・グールドのジャケツトが飾られていたことに先ず驚かされた。トロント生まれのこの演奏家がカラヤン、ロストロポービッチをはじめ世界中の大家達の度肝をぬいたと言われる五年のワシントンでのデビュー曲目であるバッハの「ゴルドベルク変奏曲」、そのデジタル再生版が派手に人気を誇っている。再生版故に音に味がない、云々と批評家諸

氏のご高説を尻目に、ヘッドホーンを付けた途端に感動に襲われ、圧倒された。演奏の完璧さという意味合い、その素晴らしさをこれ程如実に伝えている演奏はない。テンポの変化が心に迫る叙情性を創造し、聴く人の心をかぎりなくバツハに近づける、初めて耳にしたグレン・グールドであった。その後、僕は文献によりこの演奏家が晩年の八一年にゴールドベルク変奏曲の演奏を発表し直していることを知った。迷わず買い求めた。今度は真正正銘のデジタル録音で、明らかに演奏の趣が変化し、緩やかさ、深みのある素晴らしいものであった。その変化にも拘わらず、紛れもないグレン・グールドがそこに居た。芸術家の個性が、恐らく本質も変わることなく、何十年来の友人がそこにいる様である。人生を熟成させる。僕はそんな情景を目撃しているような感慨を覚えたのである。

「七十歳を生きる」私にとっては、直ぐそこに來ている十年を思うことである。「七十而從心所欲 不踰矩」偽善的とさえ思える向上心志向の生き方に支配されてき

た人生であつた事を思いながら、心の欲する所が何処かに閉じ込められ、いったい何を求めているのかさえ未だ解らない自分がある。積み残され欠落している何かがある。それは自らの魂に関係しているものに違いない、時間の限りそれを探さなければ、そんな思いが沸々として湧いて来るのである。そんな自分の人生に思いを馳せるとき、何故か、余りにも多くのものを完成させて早世した天才演奏家に引き合わされた不思議な偶然が思われてならない。



七十歳から宇宙開発を顧みる

稲宮 健 一

横浜開港百五十年、黒船来航など遙か昔と思っていたが、七十歳はこの半分弱に達する。かつて経験した中で、我々の負の因習に影響されつつも、克服したことがある。

長い間、企業の立場で宇宙開発に携わった。科学目的の開発は進んでいたが、六九年頃、将来の実利用に供するロケット、衛星を実現するため、米国の技術を導入して、大型の宇宙開発を展開することに成った。

私の担当は宇宙開発事業団から飛翔中のロケットの外部への安全確保に使う技術パッケージの受注である。射点から宇宙空間へ飛び出す高精度で複雑な機構を有する誘導ロケットは、頭や体が狂うような故障が原因で、あらゆる方向に迷走したり、爆発したりする。また、爆発した破片が他国に落下したら、国際紛争に関わる恐れもある。このような故障が発生しても、人的な被害を含め危険度を最小にする措置が求められる。そのため、計画段

階で技術パッケージを使い、コンピュータの中であらゆる異常を模擬的に発生させ、被害を算出して、危険最小の打ち上げ計画を策定しなければならない。しかし、この提案に対して、日本側は今までの日本のロケットは海に向かって斜めに打ち上げているので、爆発しても海に落下して安全であり、提案の技術パッケージは予算化できないと主張し、数回説明しても返事は変わらなかった。

提携先のTRW社は、斜めに打ち上げるから安全という理論は成立ないので、米国のロケットの爆発の現場を映像で示すことにした。早速、会議室に大型のスクリーンを用意して、多数の技術者が視察に来た。ロケットの爆発は壮烈で、飛び散る紅蓮の炎、火花と轟音。射点は炸裂する火と煙に包まれ、やがて、焼け落ちるようにロケットが消えて行った。このデモは強烈な印象を与えた。

次の日に、この関連の契約を結ぶ意向が伝えられ、ここで行われた研究成果に基づき、この分野は現在ロケット部門の重要な一部として確立された。強烈なインパクトがないと、一度確立した既成事実を変えない習性は、後の「ガイアツ」を思わせるし、考察より権威を妄信す

る様は戦前から変わらないのか。

次は七五年頃で、今回フォード・エアロスペース社と一緒に日本初の静止衛星を実現する仕事である。この頃、「おすすめ」が成功して、世界で四番目の衛星保有国と成った後、長い期間をかけて、純国産開発「電離層観測衛星」の仕上げの段階で、日本の技術者集団は衛星に対する触感を既に持っていた。しかし、静止衛星は難しさが違う。遥か彼方の三万六千キロ上空の衛星が投入される軌道の位置と時刻の厳格な要求精度、この為に大規模なマシンとソフトを使った高速な軌道計算、衛星を常に地球に向かせる姿勢の制御、この初体験の超難題に取り組むため、様々な整備後の頂点として、衛星がロケットから切離されてから、軌道投入のため四日程の昼夜兼行の密度の高い技術活動が必要である。各担当部門は自分なりに責任範囲を自覚して、着々と準備を行った。

打ち上げの一年程前、部分、部分は良く仕上がった状態だが、高度な専門家が百人以上、一つ目的のために秒を争う一糸乱れぬ組織的な活動を寸刻厳守し、針の穴程の誤りも許されない本番が出来るか、との疑問が浮上し

た。フォードも同様な感触に気がつき始めたが、この件に関する日本側の意識は薄かった。特に、過去の国産に参加した経験者は、当日の火事場の力持ち的な頑張りで何とか乗り切れると言う利根的な思考を消せなかった。

関係者を一同に集めた会議で、米国側が山程の文書、詳細な手順を示す図形、表を示すと、漸く感じ始めた。熟慮し、その意味を理解した後の行動は早かった。文書、連絡書、指令書、組織間の連絡のためのインタコムの作成、軌道投入に適した運用室の大幅な変更など、矢継ぎ早に実行された。さて、仕上りを検証するため、三か月程前に、実際に活動して見るリハーサルを催してみたが、結果は惨憺たるもので、ここかしこでぼろが出て、これでは失敗するぞと落ち込んだ。それを反省し、修正し、訓練し、訓練し、仕上げて、遂に七七年二月二七日、日本初の静止衛星「きく2号」を誕生させたのである。

匠の技を誇る日本も、世界のリーダーへの期待は薄い。戦前、兵は精鋭だが、将は無能と外国で評されたことが再現されたように感じた。二十一世紀では国際的に広い視野を持つ指導力がある人材が多教育することを期待する。

私のセブンティーズ

岩崎 洋一郎

ここに採りあげるのは、一九七〇年代ではなく、私の七十歳の十年間のことである。六十歳時代と大きく変わった部分と、ほとんど変わらなかった部分とに別れる。

大きい変化の中でも最大のものは、満七十歳で、都内の一戸建ての家を売って、夫婦で千葉県の田園環境にあるケア・マンションに移ったことである。年齢的にまだ早すぎると言われたが、思い切って決断した。その理由や考え方に関しては、既に「悠遊」その他に幾度か記している、ここでは触れない。現役時代は、都心に住んでいないと、十分な仕事ができない性質の職種であった。大きい変化と納得していただけるであろう。

逆に、ほとんど六十歳時代と変わらなかったのは、体力と知力である。体力については、マンションに付属するジムやプールで運動したため、体重も五キロぐらいを約四カ月で落とし、動きやすい体形になった。大きい病

気とも縁がなかった。

六十四歳の定年後に始めたコンサルタント業も順調で、適度に頭を使う環境にあった。事務所を都心に開設し、毎日通勤し、生活リズムもサラリーマン時代と大差ないのであった。仕事の内容は、アメリカのベンチャーと日本企業を結び付ける戦略的提携の仲介が中心であった。繊維や化学・樹脂のなじみの業種以外に、非鉄金属や電池など異業種にも携わり、大いに勉強する機会を得た。

更に、日本ライセンス協会の理事になり、数々の研究グループに参加し、英文広報誌の編集にも携わり、知財関係の勉強をさせてもらった。二〇〇二年の世界大会が大阪で開かれた時には、総合司会とワークショップのチェアとなったりして積極的に参加した。

また、七十歳のとき、「交渉の英語」なる本を書くように依頼された。同時に三巻を一挙に出すかなり大規模な計画で、さらに交渉の模様を実演したCDも同時に制作・発売した。一般の人にはなかなか手が出ない高価格であったが、外務省や商社がかなりの数量を購入して出先に配布したと聞く。

しかし、アメリカのドットコム・バブル崩壊と共に、コンサルタント業も閑散となった。このコンサルタント時代に感じたのは、アメリカ・ベンチャーの旺盛な発明意欲と行動力であり、日本大企業の慎重すぎる姿勢であった。例をあげると、電池界では、日本はリチウム・イオンで大成功し、次の電池への意欲が当時は十分見られず、残念至極の感を抱いた。

ちょうどその頃、不思議な縁で、日本大学大学院からグローバル・ビジネス研究科講師の話をいただいた。七十歳代の後半は、この講座が一つの中心となった。受講者は若い社会人であるが、日本人のほかに中国人・韓国人そしてフランス人の留学生もおり、結構面白い刺激のある時間を過ごすことができた。しかし、この講師の職にも、八〇歳という定年があり、今が最後の学期となる。

そして八十歳になることは、七十歳代とはまったく異なると思われられるようなことが、七十八歳ぐらいから起きた。マンションにある室内温水プールの存廃問題がきっかけである。組合理事長が、「金食い虫」であるとの理由で強引に廃止にもってゆこうとし、それに反発

して健康維持と資産価値維持のために反対運動がおこった。問題を検討するための委員会が結成され、私はその委員長に推された。現状を細かく具体的に分析し、経費節減策および設備更新計画などを立案し答申するため、かなりの注力をした。気がつくやうに、答申を出すころから重い帯状疱疹になり、往生した。この発症の原因も、精神も体力も消耗し、ストレスが溜まったせいであった。その後も、めったにひかない風邪をひき、落ち込んだ。

これはまさに、人生の最終章に入つたと、体が警告を発している現象である。頭では分かっている心算でも、身体がいうと重みがある。もう、第一線に立つて、社会にお役に立つようなことから、退くようにと宣告されているのである。認めたくないが、現実には厳しい。

七十歳代半ば過ぎまで、好きなことを、自由奔放にやってきたので、悔いは残らないが、やはり一抹の寂しさを否定しきれない。名曲「マイ・ウェイ」ではないが、「今や、最後の時を迎え、終わりの幕が下りようとしている」。余生という言葉の意味を、改めて重く厳しく噛みしめている。

「七十歳を生きる」&「私とペンクラブ」

上田 信隆

この原稿を投じようと思っていたところ私の元に計報が入ってきた。私より二年先輩の方だが、検査入院中に七十歳を前にあつてなくこの世を去ってしまった。まだまだ活躍を期待できただけにさぞ無念であつたことだと思ふ。六十代の死は若い故、なぜか人に動揺を与える。私の父も齢（よわい）六十三歳の若死にであつた。それ故父の齢（よわい）を超えた現在、私の今の生き方は一種「おまけ」の感がある。「おまけ」と思えば思い切りこれからの人生を楽しもうと思ふ。

今後の七十代の生活は、私にとっては未知への遭遇になるわけであるが、健康とつがなき人生の保証のない不安な要素が常につきまとう。よほどの心構えを持つか、開き直つてなるようになれと思ふかの選択になる。

そこで大切なことは、毎日を平穏な心をもって過ごせたらと思ふ。平穏を保つにもそれなりの準備が必要にな

る。平穏を保つにはどんな工夫が必要かを考えたとき私は次の二点を思い浮かべる。参考の一つとして「おめでとう」を素直に言えればということが有る。私は六十歳を前にしてある人の昇進人事を聞かされた。その時どういうわけか心から「おめでとう」の言葉が出た。実に不可思議な気分であつた。「おめでとう」がこんなにも相手にも自分にも効果があるのか知つた気がする。

人の幸せを喜ぶことがすばらしいことであることを知つた時から人生が開かれてきた気がする。人の努力を喜ぶことは自分の努力も大切にすることに他ならない。

もう一つの平穏を得る方法として「人の長所をみてうごせ」ということである。これは私の父の教えでもある。父は随分お人よしでもあつた気がする。子供心に利用されやすかつたとも思えることが多々あつた。しかし人から恨まれたりはしないのだからある面立派なことともいえる。すなわち人の長所を認めることは平穏を保つもう一つのツールともいえる。

年金生活もままならぬ世であれば、中野孝次の清貧の思想にたつて考えても健康に気をつけ出来るだけ平穏を

保ちたい。一方逆説的に言えば平穩を考える余裕がないほどの、なにか夢中になるものがあればそれも生きがいにもなろう。人間誰でも人よりは少しましな特技は各人持ち合わせているものだ。それがなんであれ自分が納得できれば猛烈にアタックすればと思う。そのうちに自分への理解者は必ずやあらわれるものである。無論それを期待するとしつぺ返しにあうことになるが、継続は力ということになれば必ず成就できると思われる。一時的でも物事に夢中になれば、その後そのときを振り返れば充実した平穩の日々を過ごしたことになるうか。

今年私は「ペン俳句」に席を置いた。当初たぶんに員数あわせの感があったと思われるが、参加をしていくうちに俳句の面白さが徐徐にはあるが解りつつある。句会と吟行が俳句のエネルギ―源であることも理解できた。

よく三つ子の魂百までと言われる。小さな頃の言動が自分の将来を暗示している。子供といっても小学生五年のころ私はどういふわけか芭蕉の「菊の香や奈良には古き仏たち」という句が気になった。古都奈良のイメージをふくらませて仏像が鎮座まします様を想像していた。

中学の教科書で、山口誓子の句で「夏草の汽罐車の車輪来て止まる」という句を見たとき衝撃がはしった。大きな車輪と小さな夏草のコントラストに迫力を感じた。その後はあつという間に俳句とはご無沙汰して近年にいたっている。

ペン俳句に席をおいた最近 村上鬼城の「今朝秋や鏡の中の親の顔」をみて、ご先祖様のことを考えるようになった。俳句は写生ともいわれることがあるが、自分の日々を実に映し出すことがある。内面の精神状態を反映するわけだから、日々の精進が要求されるのかも知れない。いくつになっても勉強怠りなくとはよく言ったものだ。昔、高校の恩師にはよく言われたものだ。

ペン俳句を宣伝するわけではないが、会員のレベルの高さに驚かされ、ひとときわ主宰していただいている女性の先生のアドバイスがすばらしい。自分の添削していただいた句がまったくよみがえるのを大変ありがたく思う。

全ての人生が健康の維持と強運に頼るとしたら、まちがいはなく私はペンクラブの俳句の会の参加を強運と思っている。

七十代のぼくへの六か条

大西 宏

■前文

六十代は戦争を知らない。八十代は銃を取った。

七十代から男女共学だった。戦後の復興から、高度成長くバブル崩壊く低成長くすべて経験したのは七十代。

六十代のときは、まだ雇ってくれた。七十代となると、自由人で働く以外にない。(別に報酬はなくても)

六十代よりも余命が短い。

■一条 死について

やっぱり死ぬのはいやだ。理由は「怖い」「淋しい」からだ。

最近、この問題につけようとしたおりあいは次のとおりだ。

人間の死亡率は一〇〇%。だったら、怖くても淋しくても死ぬことを我慢する以外ない。最近相次いで死んだ兄・従兄弟・親友ができたことが、自分にできないこと

はない。仮に我慢できなくなつて、死なねばならぬし死ぬことはできるのだ。

■二条 自由について

「死ぬことができる」ことが決まったら、あとはそれまで生きたいように生きることだけだ。老人は、自由人であることの価値をかみしめなければならない。学校や会社の枠にはめられた若い者に比べてはるかに自由なのだ。

毎日、あの退職した日の開放感を想い起して、自由を満喫しよう。自由はただあるだけではもったいない。自分の一時間、自分の一日として味わい活用しよう。やりたいことをし、会いたい人に会い、食べたいものを食べ、行きたいところに行つて。

そのようにできれば、あとの一年を若い者の十年くらい自分を生きられる。これから面白くしよう。

■三条 死後について

なけなしの額であっても、相続の法定の分割は阻止する。自分と妻はそれぞれの死後、資産を一〇〇%相続する。そのあとも、親の介護をする子供に厚く相続する。その使途も、ちっぽけであっても財団のように、孫の教

育、自己実現、社会貢献以外に使ってはならない。少額でもせつかく稼いだ金だ。自分の意思通りに運営する。

葬式は家族葬、次第は自分で決めておく。墓は〇〇霊園とする。

わが文筆を選んで遺す。子孫と精神の相続者たちに。われ、死んでも言霊を生かさん。

■四条 仕事とレジャーについて

「話すこと」「書くこと」が好きだ。しかも、若い者の邪魔をしないこのことを続けてほしい——命ある限り。

たとえ、「脳力」が低下しても、蓄積によって、若い者に負けない何かを探し続けて。

そのうち、浜田道雄氏のようなエレガントでファンタスティックなHPをもつ。書評とサッカーゲーム評の。

一級の演劇・映画・コンサート・スポーツ試合を見逃がすべからず。それに海外旅行と温泉と読書とグルメと。

■五条 性について

もっと、関心そのものが衰えるかと思ったら、そうはならないことに驚いている。にかかわらず、体がいうことをきかないこともふしぎだ。ひとりになったら、「プラト

ニック・ラブをしない」ということなのだろうか。

それも相手がお年寄りであつてもそういう感情を持つことができる、というのも意外なことだった。特に昔好きだった相手ならいっそうに。

■六条 人間関係について

若者に対して…聞くだけで相手は気づく。聞くふりして吸収する。

八十代以上の先輩に対して…聞くだけで相手は癒される。聞くふりして教えを受ける。

妻に対して…どんなにへらず口を叩かれても、先に死なれたら号泣し、何百万円払ってでも会いたくなるであろう自分を想像すれば、きれずに我慢できる。

社会に対して…取材・研究会・同窓会・各種パーティ・ミクシィオフ会などに果敢に顔や口を出す。

■七条 八十代に向かって

先立ったら…一条・三条の部分による。

先立たれたら…「賢くて強そうな犬を飼う」「施設をセカンドハウスにする」（お金が足りたら）。

七十歳代を生きて

大庭 定男

一九九五年、足かけ二十六年住んだロンドンより帰国した。時に私は七十二歳。従って、七十歳台は、まず、故国への再適応（リハビリ）への努力から始まった。

故国への再適応

クラス会、同窓会、戦友会で、若い頃からの親友達と気の置けない話をし、盃を傾けることは誠に楽しかった。ロンドン時代に加入したが、出席できなかった日本英学史学会、日蘭学会、軍事史学会の会合で優れた研究発表を聴き、自分の研究を発表し、また、お互いの蓄積を交換することも楽しかった。

新しいグループの人たちとの交流も始まった。大野さんの紹介で入会できた企業OBベンクラブでは素晴らしい人生経験を持った珠玉のような人たちと交わり、私の生活はどれだけ豊富になったか判らない。また、戦後、

南方でJSP (Japanese Surrendered Personnel、日本降伏軍人) の名の下にコキ使われ、一年三六五日、きつい、危険、汚い仕事に駆り立てられたのはなぜだったのかにつき、学徒出陣組、泰緬鉄道建設鉄道隊員、若い学者など約十名でJSP研究会を発足、東大大学院留学中の若い英人研究者も加わり、毎回、突っ込んだ研究報告、活発な議論を展開してきた。

ライフ・ワークの追求

『戦争体験を語り継ぐ』『英国における日本人社会の歴史探求』という二つのライフ・ワークを意図的に進めた。

前者に関連し、『日本のインドネシア占領展』のアムステルダム国立博物館のシンポジウムで、私はオランダ軍のJSPに対する不当な取り扱いを厳しく糾弾したところ、オランダ捕虜団体会長は『あなた方は不当な取り扱いを受けたというが、二年ではないか。我々は三年半苦勞した』と反論。ある在留邦人より『良くぞ言ってくださった』と感謝された。

後者についてはロンドン・日本クラブ（日本人会）の会報に『在英日本人社会の歴史と人物像』を寄稿し続けた。現地の日本人学校で、これを教材に利用しているとの風の頼りもあり、喜んでいる。

また、日英協会、財界人の集まりでも、これにつき講演、ロンドンのジャパン・ソサイエティ（日本協会）が出版した『Britain and Japan』という論文集のシリーズに『ロンドンの日本のビジネスマン』、『ロンドンの三井物産』を寄稿した。

著書出版

一九八八年に出版された『戦中ロンドン日本語学校』（中公新書）を、知人のアン・カネコ女史が翻訳、『The "Japanese" War』（日本語を日本との戦争に生かす意）を英国のジャパン・ライブラリー社より出版した。

また、敗戦後、タンジョンプリオク港（ジャワ島）で強制労働に服していたときの日記を『ジャワ敗戦抑留日誌 1946-47』として龍溪書舎より出版できた。両書と

も、学者、研究者より高い評価を受けており、喜んでいる。

日英両国民性の相違

以上を通じ、日英両国民性の相違を感じ続けてきた。英国では会合や研究会で常に「日本人としてどう考えるか」、「大庭個人としてどう考えるか」をはっきり説明しなければならないなかった。ところが日本ではどうもそうではないらしい。余りはっきり自己主張しないのが良いようである。しかし、私は「年齢に免じてもらって」、これからも我が道を歩み続ける覚悟である。



年金生活者

金 京 法 一

六十三歳後半で退職し、文字通りの無職の年金生活者になった。それから十一年が経つ。退職後の生活に不安はなかった。贅沢をするわけではないので、金銭面で問題があるとは思えず、世の中には自分の知らない面白そうなことが万とあるようで、退屈する暇などあるまいと確信していた。事実その通りであった。ただし、期待と希望は半分もかなえられず、世の中万事甘くないことを実感させられた。

自分の好きなことで、それまでいろいろな制約で実現出来なかったことを始めた。オーケストラの演奏会に思う存分行くこと。これは実現し、年間四十回ぐらい、合計四百回以上出かけた。もう一つは登山やハイキングで、これも低山から三千メートル・クラスまで合計三百回以上は登っている。

次に、自分の全く知らない世界に挑戦することとし、西洋哲学の勉強を始めた。父親が医者であったせいか、子供のころから医者になることが当然と、自分も周りも思っていたが、途中で経済学に転向したため、最初から文系を目指した学生が当然触れたであろう領域のことはあまり知らなかった。単位だけをなんとか取って卒業し、サラリーマンになったのである。特に西洋哲学は全くと言っていいほどの未知の領域であった。

最初は二年ぐらい勉強すれば、文学部哲学科卒程度の理解と知識は得られるものとタカをくくっていた。かなりの投資で本を買い込み、上智大や都立大の成人向け初級講座に通い、次に朝日カルチャーのやや専門的な講座をいくつか取り、二年間はそれなりに勉強をした。しかし結果は惨憺たるものであった。講義を聴いているときはなるほどと思っても、後になって文字をたどってゆくと全然違うことのように思えてくる。さらにA先生の書いた解説とB先生の書いた解説がまるで違うことのように思える。いったい西洋哲学とはなんであろう、普通

の人間には理解不可能な世界なのであろうか。西洋哲学には「アポリア」という言葉がある。解決不能という意味であるが、西洋哲学自体がもとアポリアそのものではないのか。すっかり嫌気がさして投げ出してしまった。本棚にはほとんど読まない高価な本だけが残った。

それから何年か経った。積読の悲哀をかこつ本たちをぼんやり眺めていると、以前講義で先生が話した事を思い出した。ウィットゲンシュタインの『論理哲学論考』という本に關し「皆さんの学力でこの本を理解しようなどと思つてはいけません。病気になるだけです。読解するにはせめて哲学科に四年、さらに修士課程に三年在学する必要があります。世の中にはこんな本もあることを知るだけで十分です」と。また別の先生はフランスでは国立大学を目指す子供は事実上の予備校であるリセに入る。そこでの最も重要な科目はラテン語と哲学で、期末試験などで、中学生相手に「カントの純粹理性批判の範疇について述べよ」などと平気で出題する。生徒は純粹理性批判などほとんど理解できないが、本一冊を丸暗記

して試験に臨み、記憶をたどつて文章を書く。以前の日本の教育と同じである。しかし十代で覚えた言葉はそのまま身につき、やがては哲学的論理と言葉でものを考えたり話したりできるようになるという。

西洋哲学は知識ではなく、ものを考えるアートなのである。「自分とはなにか」という素朴な疑問に始まり、人間とは何か、さらに人間が知るといふ営みはなにか、また存在するとはいふかなることか、こうした疑問に、精緻この上ない論理で迫ろうというのである。そう悟つたとたんに、カントの感性・悟性・理性・倫理・崇高の美という論理経路や、ヘーゲルの意識・自己意識・理性・宗教・絶対知に至る論理構造がわかるような気がし出した。この体験は貴重である。ギリシャ以来二五〇〇年の歴史を持つ西洋哲学は、人間の認識と存在をめぐる論争で、未だ決着がつかないどころか、解は永久に開示されないと思われる。しかし、自らアポリアなどとシラケていても、万人に開かれた未知の領域を持ち、思考の挑戦を待つ魅惑の世界らしい。

悠憂の記

児 玉 忠 雄

人生の折り返し点を、とうに過ぎ、黄昏の日々を過ごしている。

この頃の会合では政治・景気・世間話などお決まりの井戸端会議以上に健康相談や亡くなった先輩同僚の思い出話が多い。

自分も否応なく人生の終焉に近いところにいることを思い知らされる。

それは明日かも知れないのだ。その自覚にたてばそろそろ「死に仕度」をすべき時期であろう。ああ俺はよく生きたな」というある種の満足感を持てる心境が望ましいが、未だ余事雑事に気を取られ、その準備もままならない。その前に「老い仕度」というものがあるのかも知れない。諸事年齢に見合った生き方にギアチェンジしスローダウンする。選択と集中で身辺整理を行い、より簡潔な生活様式、人間関係などへ再構築する。そのフ

レームワークの中で充実した日常を営むといった状況を創るべきであろうが、兎角問題先送りの横並び経営でその重い思いを抱きながら悠憂の日々を送っている。

近頃の心境としては流水の如く自然体で気儘に生きることとし生活信条として次の四Kに留意している。

一、「健康」

今のところ一病息災である。体が丈夫でないと人生面白くない。周囲にも迷惑がかかる。そんなに長生きをしたいとは思わないが、もう少し生きてもいいなと思う。そこで小飲小食、十四歳の愛犬ビーグルと毎日散歩に努めるなど生活全般に亘り枯葉マークの安全運転を心掛けている。

二、「家族・交友」

独立した息子二人、孫三人に家内共々恙なく夫々の生活を営み少々楽しんでいる。また学校、会社、社会生活の交流の中から培われた友人・知人との付き合い・コミュニケーション・人脈もできるだけ肌理細かく耕していきたい。

三、「家計」

昔ギリシャの小国アテネのモットーは「暮らしは低く、想いは高く」であったそうである。知的で質実な生活を保ち、友人知人らと交際するには小金が要る。その程度の家計は維持したい。

四、「快樂」

生きてゆく原動力は、快樂の追求であろう。

嫌なことは出来るだけ避け気儘で自分流に徹し快適な生活を保ちたい。これには些事に拘泥しないことも大事で自身の心構えの改善が必要かも知れない。

樂の一つは美を味うことである。若い頃から書画・骨董が好きで、折を捉え内外の展覧会・美術館を観て廻った。絵ではセザンヌ、フェルメールが特に好きである。

余生の暇つぶしに七年前からNHK文化センター水彩画教室に通い、展覧会出品に苦労した。

今年からは近くの青葉パレット会に入会し、個性的なベテラン画家の中で教室とは一味違う武者修行の苦労をしている。

もう一つは旅行である。そろそろ十年近く続いた毎年仲間との海外旅行から、重点を日本再発見の旅に移して

いこうと思っている。例えば奥の細道の跡をたどるか、見残した京都奈良の史跡を巡る、越中おわら風の盆を観るなどである。

大凡のところ、これが師走に入り平成二十一年を迎えようとする今月この頃の近況など身辺記である。日本国内は過去例を見ない程の政治の迷走・混乱・不況の進行で灯りも出口も見えない暗い閉塞感が満ちている。

世界は米国発のサブプライムローン問題に端を発した金融システムの破綻が、实体经济に浸透拡大しつつあり世界同時不況・社会不安はどこ迄拡大し深刻化するか見通しも立たず憂慮に堪えない。

本年のキーワードは「乱」であろうか。



「退職老人モード」のとまどい

―七十歳を生きる―

垂水 健一

小さなスケッチブックを開いて、色鉛筆で描いた風景画を見せながら旅の話をしてくれる友人がいる。地元中国語教室に通い、そこで仲良くなった人たちと、時には中国に旅行をする知人もいる。身近で、歳相応の充実した日々を送っている人たちは多い。

私も来年七十歳を迎える。しかし私には「余生」をどう生きるかという計画も思い浮かばないままのその日暮らし。「こんなことでいいのか」と考え、「なんとかしなければ」とつぶやきながら、結局行き着く先は決まっている。老後の人生設計を考えるのできなかったのは、転居続きの浮き草のような人生のせいにして、思考を停止するのである。

ほぼ四十年勤めた新聞社を退職するとき、歩んできた人生を振り返ったことがある。考えるひとつの方法とし

て、生まれてから何度引越したかを数えてみた。

十九回の引越しを繰り返して、いまの住居にたどりついている。いまの住み家は二十軒目である。私のような敗戦前の生まれには、疎開や引き揚げで移動は多い。私も誕生から就職するまで六回住所が変わっている。それは、それほど多くはないのだろうか。多いのは就職後である。移り住んだ場所は海外も含めて十四カ所。

転勤はサラリーマンの宿命のようなものだが、ある時期に転勤が集中したというのではない。入社から退職まで、おおむね三年前後で持ち場を変わっている。転勤の多い新聞社の中にあっても、頻繁な方である。大阪生まれで、大阪は新聞社のエリア外ということもあって、故郷に近い勤務地を希望したこともなければ、実家からの通勤を望んだこともないというのがその一つの理由かもしれない。

家族には申し訳ないが、私は転勤がそれほど苦にならなかった。仕事にちょっと飽きがきたころ、別の土地や仕事に変わるのは気分一新の好機であった。しかし行き詰まりの解決を転勤に期待するという安易な発想が他力本願の人生の処し方を身に着けさせた。

そして転勤の多いことで「終の棲家」がどこか、そこで何をするのか、真剣に考えることを避けてきた。いまになって、老後の人生設計は転勤のように向こう側からやってくるような甘いものではないことに気がついた。

私は体調に問題がある。このところ一年に一度以上入院している。そのたびに迷惑をかけるので、退職後に頼まれていた仕事も最近やめた。いまはほぼ退職老人モードに入った。ここに来て、これからどう生きるかという課題を突きつけられて、とまどっている。

考えながら突き当たるのは健康である。医師が「問題ありません」といえば海外旅行などいろいろ考える。「問題がありますね」といえば、検査や処置のことで落ち込む。「七十歳を生きる」よりは「七十歳を生きられるか」である。「生き方」などという積極的な発想は消えてしまふ。浮き草暮らしの後遺症と健康への自信のなさの二つの重石が、老後の過ごし方を考える邪魔をする。

新聞記者としての仕事の大半は中国を見つめることであった。その余熱があつて週一回、近くの大学で中国の政治問題を講じている。また中国関係の原稿を頼まれる

こともある。細々ながらパソコンを前にする仕事が途切れないことも気休めになり、老後の設計の邪魔をする。

難しいことを考えずに、やりたくてやれなかったことを見つけ、それを積み上げていこうと思うことがある。

約二十カ所の、私が渡り歩いてきた土地を訪ねて「自分史」を書こうかと思うことがある。そうすれば北京や上海、香港を再訪することもできる。手始めに最近、大阪に戻った機会に高校時代に住んでいた土地を訪ねた。

なんとなく記憶の中のそれらしい場所ではあるが、住宅はビルになり、訪ねてみたい人もいない。

人づてに小学校のころの家があつた付近の事情を聞いたこともある。私の住んでいたところにはマンションが建っているという。ここを訪ねても大した思い出に触れられそうにもない。ほかを訪ねても、先行きは見えていような気がする。

「七十歳を生きる」ということは、何をして生きるといふよりは、何を考えて生きるかということに置き換えて、これまで通りのつかみどころのない生活を続けることになりそうだ。

七十五歳のたわごと

中村 爽

今年、七十五歳になりました。「後期高齢者」の老人なのですが、どうも本人自身にはその自覚が足りなくて困ったものです。

先日、江戸時代の文人大田蜀山人が晩年に詠んだ狂歌を友人が知らせてくれました。

生きすぎて七十五年食いつぶし限りしられぬ天地（あめつち）の恩

なかなか味わいの深い歌です。さて、わが身はこの先どれ程天地の恩を受けられるのでしょうか。人はだれでも、自分だけはいつまでも死なないような気がするものです。老人であっても、それは同じこと。天のお許しがあれば、もう少し生き延びてこの世の移り変わりを見ていたいと願うのです。そこで蜀山人の作をもう一首。

今までは他人（ひと）が死ぬとは思ひしが俺が死ぬとはこいつあたまたらん

年を取るにつれて体力や気力は徐々に衰えます。その度合いは人によって差はあるのですが、私がそれを実感したのは古希を過ぎてからです。六十歳代は壮年時代とあまり変わらない生活で、前半は現役、後半は非常勤の会社勤めでした。その間に町内の自治会役員を引き受け、当ペンクラブにも入会しました。友人との飲み会やゴルフなど以前と同じに付き合っても体力の低下は感じませんでした。七十歳になり立ての時、前立腺の摘出手術を受けましたが、幸い回復も早く、すぐに元の生活に戻れたので、自分の体力はまだ大丈夫だと自負していたのです。実際のところ、私に限らず、現代の六十歳代は一般的に心身ともに老齢とは言えないと思っています。

その後二、三年経つうちに、いつの間にかなんとなく疲れやすくなりました。たつぷり眠っても体が重くて寝起きが悪く、夜間に寝汗をかくこともありました。その上、肩や腰に原因不明の痛みが出るようになったのです。日常の動作も鈍くなったと家人に言われたりしました。ところが、検査を受けても病的には問題なしで、

医者者の診断はいつもの「加齢」、つまりは「老化」です。から、これには順応していくほかはありません。残念ながら、若かったころのようにすっきりと気持ちの良い朝の目覚めや、活力に満ちた高揚感などは望めないかもしれないかもしれません。それでもまだ、山歩きや旅行は続けられるし、母校の高校同窓会長なども努めているので、年相応の健康と体力は残っていると納得しています。しかし、このごろは「老人」を自ら認め、大それた望みを持たずに、素直にスローライフを生きることが正解だと思うようになりました。

ところで、老境に入って、体よりもっと気になるのは頭の健康です。以前は「もうろく」、「呆け」、「老人性痴呆症」などと呼ばれ、一部の老人のものとはばかり思っていた認知障害が、今やだれでもかかる「認知症」として恐怖の対象になっています。自分自身、このごろは若い時と比べると暗記力や記憶力は明らかに低下しています。日常生活上のもの忘れもちよくちよくあり、脳の機能の衰えが不安になります。認知症の人は過去を忘れて「今」しかなくなり、未来も定かでないと言きま

す。過去の記憶がなくなるのは自分の人生そのものを失うようで、考えただけでも気が滅入ります。もともと、本人自身がそれを認識できなければ、かえって楽なのかもしれないませんが、まわりの人には迷惑でしょう。今のところ感性はまだ保たれているようなので、脳の老化防止のためせいぜい「脳トレ」に務めたいと思っています。

これを書いていると、窓の外から市の防災無線放送が聞こえてきます。耳を澄ますと、いつもの行方不明者捜査の協力依頼です。住所、姓名、年齢、身体の特徴、服装などの説明が続き、「お心当たりの方は警察署までご連絡ください」と終わります。気のせいか、このごろ回数が増えているようです。行方不明者は認知症で徘徊癖のある老人が多いとか。以前はたいして気にもせず、聞き流していましたが、近頃は特に年齢を注意して聴き、つい自分と比べてしまいます。しばらくして「無事に保護されました」と報告があるとほっとしながらも、「こんな形で町中に名前が響き渡るのは御免だな」とつぶやくのです。

七十歳を生きる

中 村 將 陸

私は大過なく馬齢を重ね、今年で七十二歳を迎えた。同級生や、会社の同期入社の人友のうち、数は少ないが永遠の眠りについた人も見受けられる。加齢に伴う衰えを感じないといえはウソになる。最近髪の毛に白いものが目立ち始め、夜尿と不眠にまま悩まされることがある。しかし、総体的には五体満足だ。これも先祖、父母、家族、同僚、友人などのお蔭だと感謝している。人生の節目について書くに当たって、旧陸軍の小野田少尉がマスコミとのインタビューで、「人間の一生は、全く時代の所産ですね」と述懐していたことが頭に浮かんだ。同氏がフィリピンのルバング島に太平洋戦争終結後二十九年もの長きにわたって潜伏していたのは、日米が戦ったからに他ならない。このような時代背景がなかったら、平穩で、平凡な人生を送っていたかもしれないと、同氏はインタビューに微笑んでいたのが印象的

あった。

歴史を紐解くまでもなく、国家といえども時代に抗うことができず、きりきり舞いさせられてしまう事例には事欠かない。太平洋戦争に突入していった日本は、時代に苦闘した国家の証しである。国家に比べれば取るに足らない存在の個人は、時代にほんろうされっぱなしというのが実情であろう。時代と独立して生き抜くことなぞ到底出来ない。ここでは、時代とのかかわりに照らし合わせて自分の人生を書いてみよう。紙面の制約もあり、ここでは人生で最も多感な幼年期とピークである青・壮年期に触れることにした。

私の一番古い記憶の一つは、軍艦マーチに続いて太平洋戦争の開戦を告げるラジオ放送であった。終日同じメッセーじが流されていたことが、五歳の児童の記憶に刻み込まれ、その時のことが何の脈絡もなく今でもふと甦って来ることがある。昭和十八年国民学校に入学するころは、日本の緒戦の勢いはすっかり剥落し、日増しに敗色が濃くなっていた。山本五十六海軍大將が南方の戦線に散って以降、日本は制空権、制海権を完全に米英に

握られ、開戦から約三年半で白旗を掲げるに至った。

地方の小さな町に生を受けたことが幸いして、戦火に直面する危険にさらされることはなかった。その上、終戦前後に日本を襲った大食糧危機もそれほど深刻なものではなかった。空腹に耐えられないという体験はしたことがない。思えば、東京大空襲などで命を落とした同世代の少年も多かったはずである。雑誌などの特集記事に目を通すと、申し訳ない気持ちさがこみ上げてくる。

昭和三十一年になるとその年の経済白書に書かれた「もはや戦後ではない」という言葉が流行語になった。

昭和三十四年に大学を卒業し入社した。その後、数十年にわたって日本経済は驚異的な成長を遂げ、世界の衆目を集めた。この時期日本経済が成長したのは、急速な技術革新の波に乗ったためである。技術者として先端企業に勤めていたことが幸いして、毎日わくわくする興奮を覚えつつ仕事をしていった。充実した会社人生を送ることが出来たことは無上の幸せであった。

平成十一年に定年退職を迎えた。会社生活の最後はバブル崩壊期と多少オーバーラップしたものの、致命的な

困難に直面しなかった。従業員に退職を勧告するという決して愉快でない仕事を担当することもなかった。仕事以外の幸運といえば、戦後の日本が戦争に突入することがなかったことだ。この歳になって、平和の大切さを感じている。

同世代の友人が集まると、健康が第一の話題となる。私も自分なりの健康法を実践している。NHKラジオ「あさいちばん」の「健康ライフ」を毎朝聞いて指針としている。また万歩計を常に身に付けている。これだけで、目的地へ行くとき出来るだけ足を使い、階段を駆け上がるようになる。さらには頭の体操のためいろいろな勉強会に参加している。英語は二つの会に出席し、自分の担当でない時も、身を入れて予習するようにしている。一時やめていた俳句も、仲間誘われて句会に定期的に出席している。

最後に、七十歳代まで社会に生かされてきた体験を、還元することも頭の片隅にある。首相官邸のホームページの「意見の募集」に、政策提言をずっと投稿しつづけている。本人はボケ防止に多少は有効であろうと信じているのである。

七十歳を生きる

西川 武彦

五木寛之さんのベストセラーに『林住期』がある。曰く、人生には四つの区切りがある。「学生期」「家住期」「林住期」、最後が「遊行期」。もっとも輝かしいのが五十歳から七十五歳までの「林住期」だそうで、七十一歳の筆者はその終章にることになる。

わが身を振り返ると、五十歳から六十歳の前半までが、サラリーマンとして自分なりに充実した日々であったし、早い時期に、第二の人生を見越して、小さいながら高原に別宅を建てて徐に棲み分けを始めた。子供達も巣立った。趣味のヴォーカルグループは五十歳からの二十一年間で素人なりに大成した感じだが、体力的にもきつくなり始めると今度はベン之道を選び、古希を迎えて短編小説に挑戦している。『林住期』の小見出し『燃えながらかくていくエネルギー』を実践している心意気である。身体的衰えは、林住期が「臨終期」にならぬよう、宥め

ながら対処しているつもりだ。金融危機も、年金さえ破綻しなければ、「吾唯足るを知る」の衣食住が脅かされることはあるまい。生来の脳天気でそう決めこんでいたが、ここにきて「住」のメンテナン스에頭を痛めている。

一つは築四十年の本宅。木造二階建てだが、モルタルの壁には亀裂が目立つ。風呂場の下水溝からはミミズが這い出す。二階のテラスを支える柱が朽ちた。先日など、隣のアパートの二階に住む女性が我が家を熱心に撮影しているの、「なにを撮っているの?」と聞けば、「お宅の樋に可愛い花が咲いているので…」という悲しい答えが返ってきた。その他数え上げるときりがないほどだ。

片や別宅のログハウスも築後十八年目を迎えた。十年前、フィンランドの製造元を訪れ、ログ材の伐採から、乾燥、マシンカットを経て搬出するまでの工程を見学した。「…というわけで、三年毎に塗装すれば二百年はもちますからご安心を…」。曾孫の代まで大丈夫ということだ。

問題は雨曝しのテラスだ。三畳のテラスに物足りず、七年前に国産材で五倍に拡張した。「毎年一回塗装してください」という業者の指示を守っているが、材質が弱い

のか、劣化が著しい。地上三メートルだから、二、三年で張り替えないと踏み破つて命を危うくするかもしれないが、年金生活者に、十年毎にウン十万の出費は辛い。

思いあぐねていた頃、某氏の喜寿祝賀パーティで、エベレストに七十五歳で登頂した三浦雄一郎氏と再会した。札幌勤務時代からのお付き合いである。黒髪は白く染まっていたが、肌はつやつや、目は活きいきしていて、枯れた逞しさに感服。

「今日は何キロの靴ですか？」の問いには、「パーティだから（片足）二キロにしてあります、普段は五キロですがね」と返ってきた。これからも節目の歳にエベレストに挑戦するという。現状維持を超えて、夢を追う創造的メンテナンスといえよう。

はたと思いついた。『そうだ、傷んできた本宅、別宅も創造的にメンテナンスして今後に備えよう。本宅は相続が終れば、建て直して軽量鉄骨の賃貸アパートにする、その一角を小さな本宅とする。本拠は別宅に移す。本宅で保存しかねるものは、別宅に収納する。そのためには別宅のテラスを取り壊して、跡地にワインバー付きのミニ

ギャラリーを作る。内外で集めた自己満足だけの収集品を取つかえ引つかえ飾つて、仲間と杯を交わすのもよからう。その屋根を耐久性のある素材のテラスにする』。

このほかに別宅のメンテナンスで急を要するのは、アデルセン・モルソーの新ストーブである。煙突の天井から外に出る部分と、屋根上でレンガの衣装を纏い、鉄の帽子を被った煙の排出部分がかなり傷んでいる。火災、雨漏りが怖いから即取替えるべし、とストーブ屋さんがのたまう。纏めた額の出費は痛い、ほんわりと暖かい赤い火を眺め、ストーブの上でお湯を沸かし、その蒸気で乾燥を和らげる、焼き芋をつくる等の楽しみは捨てがたい。改修に踏み切った。老亭主の薄くなった頭髮に目を流しながら、連れ合いは、「あと何年もつかしらす」とストーブ屋と会話している。どうやら気になるのは、七歳年上の夫の寿命のようだ。

「住」の創造的メンテナンスは中長期ベースで固まりつつあるが、本宅は、遊行期の終りにいる方がご存命のうちは手がつけれない。林住期の終りにいる前期高齢者とどちらが先か、怪しげな確信犯は慥然と呟いている。

七十歳の言葉あそび

野瀬 隆平

馬齢を重ねて七十歳となりました。古希と申しますが、今日の日本では稀なことではありません。男の平均寿命がほぼ八十歳、そして七十歳の平均余命がおよそ十五年です。古希は単なる通過点にすぎません。しかし、自分ではまだ若いと思っけていても、はたから見れば、もはやれつきとした老人です。寄る年波には勝てません。十分自覚して行動したいものです。

七十歳を表す言葉に「従心」というのもあります。ご存知の通り『論語』にでてくる言葉で、七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず、からきています。孔子様ならいざ知らず、凡人はともこのような境地に達しておりません。ただ、お酒だけは飲みたいだけ飲んで、限度を超えることはなくなりました。が、これは酒に弱くなったというだけの話です。

ところで、故事・ことわざの類には老いに関するものが

たくさんあります。昔の人の智慧がつまった言葉に学ぶのも悪くないかも知れません。しかし、中には正反対のことをいつているものもあります。例えば、老いては子に従えといいますが、老いたる馬は路を忘れずとも申しします。『韓非子』にある言葉で、道に迷ったら老馬を放つて後についてゆけ。経験豊かな老人は判断力があり方針を誤らないというものです。混沌としている今の世の中。こんなときこそ経験豊かな年寄りが智慧を出して、正しい道を示すべきなのでしょうが、残念ながらそんな英知を持ち合わせておりません。もつとも、年を取っているからといって必ずしも分別があるとは限りません。三歳の翁、百歳の童子といって、若くても年寄り以上に思慮分別のしっかりした人も居られますから。年寄りと釘頭は引っ込むがよし、ともいいます。あまりでしゃばりすぎない方がよい様です。高齢であることを笠に着て、威張り散らすのは論外です。これを老に倚りて老を売る、と申します。むしろ、子供に戻った様におおらかな気持ちでいたいものです。老いて再び稚児になる、のごとく。

老いては益々壮なるべしと、老け込まずに頑張れと

はげまされますが、一方では麒麟も老いぬれば驚馬に劣ると『戦国策』では論じています。老いてからの身の処しかたは難しいものです。

江戸の「いろはかるた」では、年寄りの冷や水と老人が無茶をするのを戒めています。しかし、あるお医者さまが言っておられました。年を取るとあらゆる感覚が鈍くなり、渴きを自覚することも難しくなってくる。だから、年を取ったら意識して水を飲めということです。その先生は、年寄りに冷や水と力説しておられました。

老いの一徹で家族を困らせたり、老いの練言で周りを辟易させてはいけません。昔の剣今の菜刀、と自分の実力が低下したことを率直に認めましょう。ただ、せめて気持ちだけは、老驥櫪に伏するも志は千里にあり、とゆきたいところです。これは曹操の詩の中にある言葉で、よい馬は年を取って厩に繋がれたままでも、なお千里を走ろうという気概だけは失わず、覇氣の衰えないこと、という意味ですね。

少々、耳の痛い言葉ですが、こんなものもあります。孔子がある人を責めて、老いて死せざる、是を賊となす、

と言ったそうです。これという善行も無く、いたずらに年老いて、生きながらえているのは、社会の害悪であるということ。どこかの国の政府もその様にいつているかに聞こえます。いや、これは老いの僻耳でしょう。

「老」の字を含む四字熟語もいろいろとあります。老少不定、老生常譚、老成持重、偕老同穴などなど。それから老老介護。いやこれはまだ辞書には載っていませんでした。こんな事態だけは、何としても免れたいですね。

ちなみに老生常譚という言葉ですが、老人は同じことを繰り返して話すということから、きまりきった話のことです。「また、その話が始まった」と陰で言われないように注意したいものです。

元氣な様でも歳をとって体力が弱っているのです。空元氣をだして無理をすると、爺の鉢巻景氣ばかり、とか年寄りの達者春の雪といつて、どうせ長続きしないのとひやかされます。年寄りが夜歩きして、老い木に花を咲かせよう、などと張り切りすぎないように氣をつけましょう。やけどをしかねません。老婆心ながらひとこと申し添えておきます。自戒の念をこめて。

七十歳（古希）代を生きる

森田 茂

いうまでもなく、高齢者の生活環境の充実、家族の健康、経済の健全性、社会活動や友人との信頼関係に負うところ大である。そこで社会・家庭教育を、仕事に忙しい親たちだけに任せるのではなく、高齢者が貢献すべき社会環境となってきた。いまや自己責任を強く植え付ける社会教育や家庭教育が手薄になっているからである。

いうまでもなく、高齢者の生活を充実し社会貢献するために、心身の健康ほど重要なテーマはない。そして生活の基盤である家庭をまず大切にする暮らしでありたい。夫婦の会話と笑顔を失わずに相互の信頼感を高めるよう努めたい。そのことは家庭の健全化にとって不可欠なことと信ずる。これは結果として、子供の育成にも直接的で良い影響をもたらし、社会活動にも力を発揮できることになろう。

また、生活面での見識のある教育とは別に、高齢者自身の知的才能をどう研鑽するかも意義あることである。なるほど、高齢者は経験に裏付けられた知識や認識能力を少なからず持っているが、それに拘泥して、変化に応ずる柔軟性に欠けるきらいがある。それを防止するには、情報の収集・分析や発表などの継続的な知的刺激が必要であろう。

新しい時代に合った勉強は年齢には無関係である。若い人々だけでなく、中年や高齢者でも、IT情報の知識は仕事に役立つだけでなく、生活そのものを充実させてくれるに違いない。情報化社会では、新聞やテレビなどのマスコミが社会に浸透しているが、IT情報を通じて自分のテーマを追いかけることをしないと、本当の生きがいを得られないような時代になりつつあるのではないだろうか。

高齢者の中では、一部の有名人の活躍だけが映るけれども、実際には独自の経験と知恵の蓄積を持っている人々がその能力を発揮できずに、おとなしいサイレント・マジョリティとなっている。そこで過去の蓄積を死

藏させずに生かしていくことができれば、高齢者の幸せな貢献といえよう。

私は、高齢者の生活を支える大切な要素として、①如何に感動をもつか(カ)、②何に興味をもつか(キ)、③どう工夫するか(ク)、④健康に心掛ける(ケ)、⑤恋のロマンを秘める(コ)、の五つのカキケコを心に銘じ過ぎていけば、すばらしい社会貢献も可能となり、充実した日々を送ることができると思う。そのためには高齢者自身が自分なりの興味あるテーマをもつことが大事である。そのテーマをどのように解決していくかを工夫していくと、感動を味わう暮らしに連がっていくにちがいない。恋のロマンとは、男女間のことも多いだろうが、自分の課題に恋することもありうる。

私は古希を過ぎてから、マジックに興味をもちはじめている。この趣味は、手を自由に動かすだけでなく、頭や全身も使うから、心身の健康にもプラスになるにちがいない。今までは、自分が関係する会合などでボランティアとしてやっているが、外部の団体からの依頼もくるようになった。

そこで、七十歳代のライフワークを大別すれば、一つは、今までのしがらみから離れて、趣味など好きなことをやる。地域社会での交流にも役立つから楽しい暮らしを与えてくれるだろう。次に、現役時代に蓄積した経験や知識を生かして、少しでも社会に貢献する。もう一つは、過去の見識や知見を効率的に発揮するために、役立つ趣味などを加味していく。そこでライフワークだけでなく、趣味も生きがいに関係することは言うまでもないので、そのコンビネーションについて考えるのも意味があるだろう。これが調和できれば硬軟融和の味わいが発揮できるかもしれない。

古希の高齢者になっても、家庭、健康、経済、人脈、運の五大要素が重要なことには違いない。そのために、高齢者のライフワークを如何に生かすが今問われているように思う。

高齢者も社会の一員として、その存在価値と達成価値を表示できるような生活をしたいものである。

七十歳からどう生きるか

渡里 清

昨年三月に七十歳の誕生日を迎えて四月から自由の身になった。特別な趣味を持たない私は、荷物の片付けや身辺の整理をしながらしばらくは単身赴任の疲れを取り将来を考えることにした。

友人達と話すと「時間が経つと何もする気が起こらなくなるから気をつけろ」という。連日家にいる私に妻は「何もすることは無いの？そんな人とは知らなかった。」そのうちに、社会との接点を失い、個人の枠の中に閉じこもり、何もすることが無いと、やがて意識や思考が萎えるように感じてきた。何日も誰にも会わず、誰とも話をしないと気持も活性を失うように感じる。

秋になって色々な友人に会って退職後の生き方について聞いた。アドバイスを呉れる友人は有り難い。「退職後にすることは、勤めを辞める前に決めておかないと、仕事を離れてから探すのは難しい」との忠告もある。今

からどうしたらすることを探せるか？

ある先輩は次のようなアドバイスを呉れた。

- 一 夫婦ともに健康であること。
- 二 奥さんとは別に自分で何かやることを持つ。
- 三 夫婦で共通なものを持つ。料理とか芝居見物とか。
- 四 できるだけ家にいる時間を減らす。カルチャースクールに行くとか。

別の友人は「英語のボランティア・ガイドがよい。インターネットで探せるよ」という。そこでインターネットで色々と情報を集めた。するとNPOのピースボートが世界一周の航海に英語のボランティア通訳を募集するとのこと。電話で聞くと年齢制限はない。五・六十人ぐらいの応募で十人ぐらい採用になるそうだ。ボランティア通訳には報酬は出ないが費用は要らない。四月から七月まで百日余りの航海で二十二カ国をまわる。学生時代に夢見て経済的理由で果せなかった世界一周だ。是非やってみたいと応募した。

更に調べてみると医療通訳というのがある。通訳には大まかに言って会議通訳、医療通訳、法廷通訳などがあ

るが、日本では分野ごとに専門化していない。各分野で専門家を養成すべきだが、日本では通訳の仕事はボランティアなどが入って混乱している。プロの通訳とボランティア通訳について通訳学会のシンポジウムの報告を読んできた。

「コミュニティー通訳が法廷・医療の場に入りこみ、その中にボランティアが通訳として知識も訓練もなしに入ってきて命や人権に関わっている。医療関係者や法学の先生で語学に堪能な専門家が通訳するのなら内容が正確で安心できる。しかしコミュニティー通訳のなかにはボランティアで二十年近く法廷の通訳をしているのに、通訳学校で基礎科にも入れない語学レベルの人がいる。司法関係者は通訳者に遠慮して、通訳が明らかに機能していても何も言わないそうだ。通訳学校の生徒が『法廷通訳』と書いた名刺を持ち、法廷通訳の仕事をしていた。彼は『法廷では間違えても何も言われないから』と公言していたそうだ。英語が得意なだけで通訳のトレーニングを全くやったことがない人が安易な気持ちで通訳をやっているケースもある。『グッドウィル・ガ

イド』というボランティアの存在に業界全体が苦しめられている。通訳はバイリンガルであれば誰でも出来ると思われているのかもしれない」

この報告を見て驚いた。グッドウィル・ガイドにせよ、コミュニティー通訳にせよ、行政当局が作った安易な制度がゆがみを生んでいる。

医療通訳にしても法廷通訳にしても、ボランティアを使えば安いと安易に取り組むのは返ってマイナスだ。アメリカのように専門的な能力を身につける教育機会を通じてそのレベルを持った専門職として確立すべきだが、日本の現状はそうならない。

国際化を目指すわが国で通訳の業務は未成熟だ。専門性も未分化で、制度が確立するのはこれからだろう。医療通訳の報酬は三時間で三千円とわずかだ。私のような年金生活者でないとやっていけない。私は医療分野の英語通訳を目指す。医学・薬学や健康法を勉強する良いきっかけにもなる。定年もないようだ。これからの努力でお医者さんにも患者さんにも頼られる医療通訳を志すことにしよう。

企業OBペンクラブについてよく聞かれる質問
(会員以外の読者のために)

Q 1. 会員の作品を見たいのですが？

A 1. 企業OBペンクラブのホームページをご覧ください。
(<http://www.obpen.com/>)

会員のエッセイ、800字文学館の作品、俳句、川柳、写真等が掲載されています。また、ベストライフオンライン (<http://www.bestlife.ne.jp/ob/index.html>) には月二回年金、政治・経済・社会問題についての会員の作品が投稿されます。さらに、ナムコ・トラベルにも画像つきの旅行記を投稿しています。

(<http://namcotravel.jp/user/obpen/index.html>)

Q 2. 月例会や勉強会はどこでやるのですか？

A 2. 代々木の独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター (<http://nycnive.go.jp/>) を利用しています。渋谷、新宿、代々木、参宮橋の各駅からアクセスが容易です。

Q 3. 月例会や勉強会の見学はできますか？

A 3. 大歓迎です。これまでも多数の方が勉強会を見学されてから入会されています。ご希望を事務局長あてに

(hira0321@t41iscom.net) 電子メールでお送り下さい。

Q 4. 入会手続きは？

A 4. やはり、電子メールで事務局長まで申し込んで下さい。折り返し、入会申込書をお送りします。

Q 5. 入会金、年会費はいくらですか？

A 5. 入会金はありません。年会費は一万五千円です。

なお、初年度の会費は入会時期により調整します。(五月～八月入会の場合は一万円、九月以降は五千円です)

Q 6. 住まいが関東地方ではないので、クラブの活動に参加が難しいのですが？

A 6. クラブの活動には、ホームページの会員専用サイトを使って参加できます。会員専用サイトからエッセイコラムや会員写真館に投稿できますし、「お知らせ」サイトや「会員フォーラム」で会員同士の自由な意見交換ができますので、遠方にお住まいの会員でも不便はありません。現在、ニューヨーク、長野県茅野市、名古屋市に在住の会員がおり、積極的に参加しています。

自由テーマ



吉田 邦彦

時間収入を増やす

上原 利夫

ビジネスマンは、退職すると、金銭収入が減ります。一方では、時間に余裕が出てきます。この時間を有益に使うと、時間収入が増えます。時間収入は容易に測定できませんが、これと金銭収入を合わせたものが、人生価値といえます。この価値は主観的なものですが、世間の評価も無視できません。

退職しても、昔の仲間とのゴルフ、マージャン、カラオケしか楽しみがない人がいます。時間に拘束されて金銭収入を得ている頃に、時間収入を得る準備をしていなかった人です。こんな人は時間を無駄遣いしています。

退職後は、家族に迷惑をかけず、自分を高め、社会にも貢献し、人生を豊かにするのです。これが時間収入の考え方です。

余裕のできた時間の使い方に、時間はかかっても、安い交通手段を選んで楽しむ方法があります。年金生活者

の「時は金なり」は、オカネを節約するために、時間をかけることを意味します。青春切符を使つてのんびり旅をすれば、特急車からでは観られない、景色や人情に接する機会に恵まれます。わたしは、東京都のシルバーパスを利用しています。一年間の料金は二万五百十円です。必ずしも有利でないので、できるだけ、都営地下鉄を使います。地下深いプラットホームの昇降に足を使うのです。高校時代から始めた趣味の登山のためです。

健康に生きるということは、それだけでも、社会の役に立つことです。わたしには、登山という具体的な目標があるので、オカネを払ってスポーツジムに入会し、体力の老化を遅らせています。また、健康法も兼ねて、七十歳からボイス・トレーニングを始めました。腹式呼吸のために腹筋を使います。人前で歌えるようになれば、高齢者や児童を慰問する機会も来るでしょう。

学術、芸術、文学などに接するならば時間収入は増えます。時間が勝負のビジネスとちがいで、趣味は時間を気にせずに、真髓を追及できます。わたしは六十二歳から、企業不祥事防止のための監査役制度の研究を始めました。

時間制約がないという意味で、趣味と考えられる面もありますが、今年になってようやく納得のできる結論に到達しました。十年がかりですが、その間に法学博士号をもらいましたので、研究成果に耳を傾けてもらえました。内容から見て趣味ではなく、ボランティアでしょう。時間と費用はかかりましたが、時間収入は増えました。

昨年と今年は、森林ボランティアに参加しました。里山の森林を育成するために、間伐、枝打ちを行うのです。この廃材を利用して山道も造りました。登山が趣味のわたしにとって、相応しいボランティアだと思います。これがきっかけで、自然環境の保護に関心が出てきました。先日は、奥多摩の日の出町にある、ごみの最終処理場とエコセメント化施設を見学しました。人が生きていると、ごみは必ず出ます。大切なことは、ごみを減らすことです。無駄なものは買わないことです。

ところで、アメリカ発のサブ・プライムローンに起因する経済環境の大変動が世界を襲っています。過去の金銭収入の蓄積がいつの間にか消えてしまいました。わたしは政治の貧困を嘆きます。バブルは利益の先食いです。

東京の都心には、オーナーの分からない近代ビルが林立しています。一般人には見えない仕組みですが、誰かが先に食った利益が建物価額に含まれています。そのうえ、建物価額が下がったので、損失が発生し、誰かが損をしています。原油の値上がり益は産油国へ流れ、産油国内の設備投資に使われますが、余剰資金は先進国の不動産や株式に投資されます。産油国の多くはイスラム教の国です。今起こっている地殻変動は、キリスト教文化からイスラム教文化への転換の予兆とも考えられます。

二十世紀型文明はキリスト教文化が創造しました。ここで偉そうに書いているわたしは、戦前生まれの二十世紀型です。二十一世紀に通じる知恵をどれだけ持っているのか、わたしには分かりません。団塊の世代の人が退職すると、それだけでも世の中が変わるので、わたしの経験が役立つかどうか、はなはだ疑問です。

キリスト教にもイスラム教にも馴染みのない日本人の居場所はどこにあるのでしょうか。そこで、仏教から経済を見つめるとき、学友・安原和雄君（元毎日新聞論説委員）のHP「仏教経済塾」は参考になります。

実記を片手にリギ山へ

鵜飼 直哉

六月末から、小学校時代の友人夫妻と四人で十二日間ほどスイスに行った。我が家の二人にはスイスは初めての旅だった。スイス好きの人たちは怪訝に思われるだろうが、私のお目当てはマッターホルンよりもユングフラウよりも、リギ山だ。リギ山と言ってもよほどの好きか、飽きるほどスイスに行った人でないと登ったことはないだろう。山岳地帯への入り口に当たるルツェルンから船でフィアヴァルトシュテッテ湖を一時、ウイッツナウという小さい町から登山鉄道で登った所にある。標高一七五〇メートルだから、四〇〇〇メートル超の山並みの中では数字を見ただけでは特に魅力は感じない。

スイスへ行くなら是非ともリギ山と考えた理由は、例によって米欧回覧実記である。

岩倉使節団は一八七三年六月十八日ウィーンを出発し、ミュンヘン経由で首都ベルンに二十日到着。九日間滞

在後、六月二十九日にジュネーブへ向かう。この間、スイス政府は一行を二泊三日の山岳地帯観光に招待する。

我一行已ニ「ベロン」府ニ著シ、大統領ニ謁ス、接伴掛「シーベル」氏言フ、当国ノ政府ハ冗費ヲ汰スルヲ勉ム、使節ヲ享待スル、他国ノ豊修ナルカ如キヲ得ス、只当国ノ佳山水ヲ以テ、其款待ヲ享ニアツヘシ、且南方ノ地ニ於テ、新ニ架成セル山路仰高鐵路アリ、人民ミナ使節ト之ヲ落成センヲ望ム、請フ二日ノ間ヲ勞セヨ、衆ミナ悦ビ從ンヲ願フ、

ベルンを出発した一行は、鉄道、船、馬車を乗り継いでトーン、インターラーケン、ブリュニツヒ、サムネンを経由してルツェルンに入る。途中、インターラーケンでは遥かに見える山岳地帯の景色に恍惚とし、サムネン村では村人たちの大歓迎を受ける。ここでウイリアムテルの話を聞いて、愛国心が自由と独立を維持する原動力であると久米邦武は説く。そして出迎えたスイス大統領等政府要人と共に、船でウイッツナウに向かう。

チューリッヒから直接ルツェルンに入った私は、実記を片手に一行に合流した気分になって、ウイッツナウ行

きの定期船に乗り込んだ。船からの景色は岩倉具視や伊藤博文たちが見たものと同じだと、妙に感慨にふける。

船ハ湖面ヲ輾リサル、水濶ニ山峻ナリ、時ニ一陣ノ細雨スキルニ逢フ、後湖ハ猶晴レ、迷霧飛雲アリテ峰峰ニカ、レリ、遠眺ノ清朗ヲ欠ケトモ、雲陰ノ變幻ニテ、湖上ノ奇景ヲ得タリ、

と書かれたページをめくりながら、写真を撮りまくった。

「ウィツナウ」ノ埠頭ニハ、人家数十戸アリ、寺塔尖ヲ抽ンテ、頗ル美觀ナリ、此ニ「エルイッキ」ノ蒸氣車駅アリ、此処ノ鉄道、并ニ瀛車ハ、今度当国ニテ新ニ發明セル建築ニテ、山嶺ヲ上下スルモノナリ、本日ハ其落成ニカ、ル

実記の銅版画と比べると、同じ場所に教会の塔があり、リギ山行きの登山鉄道の駅もある。ここから先は余計な説明は不要である。漢文訓読体の出番だ。

当処ノ勝景ハ、国中ニ奇絶スルヲ以テ、此ニ車路ヲ修メ、四方ノ游人ヲシテ、高峰ニ上リ、縦覧ヲ快クセシムル目的ナレハ、車ノ装置モ、四面ミナ玻瓈ニテ眺望ヲ快クセリ、此車ニ上リテ山路ヲ輾リ上レ

ハ湖水山峰ミナ、目下ニ落ツ、半腹ニ及フコロ、一ノ洞道ニ入ル、此ヲ出レハ、下ニ百尺ノ谷アリ、鉄橋ヲ以テ谷ヲ横絶シテ去ル、山岩壁ヲ削リ、樹木疎疎ニ生シ、前ニ懸泉アリ、下ニ湍流アリ、風景壮ナリ

リギ山山頂から見ると雄大な景色は、初めてスイスの山並を見る者には圧倒的だ。とは言っても、グリンデルワルドやツエルマツトで間近に迫る山々を見る前のことではあるが……。ともかく実記を開いてみた。

山頂からの豪快な景色に恍惚とした美文を期待したがこの光景を久米邦武は、

此峰頂ヨリ俯瞰スレハ、高峰ハ怒濤ノ如ク、低巒ハ跳波ノ如ク、南方ニ雪色玉ヲ抛ツカ如キハ、「ユリ」郡ノ郡嶽ナリ、（以下略）

と、これだけしか書いていない。さすがの久米も言葉を失ったのか、得意の「○○○○トシテ」の恍惚感表現もここでは姿を表さないのが残念だ。

写真を撮るよりも、まず今回の目的のリギクルム・ホテルに行ってみた。一行が宿泊したこのホテルは昨年リニューアルしたとのこと。念のため受付で訊ねてみた

が、そんな昔の話は誰も知らない。結局、一三五年前と変わらぬ景色を見たという自己満足だけで、客観的な成果は何もないままにスイスの初日は終わった。

実記には

是ヨリ食堂ニ於テ、鐵路落成ノ宴会ヲ開ク、会食ノ男女百余人、食享盛饌ヲキハメ、食間ニ「スピーチ」アリ、衆人ミナ器械師ノ偉業ヲ称賛シ、此席ニテ褒賞ノ金杯ヲ与フ、四時ニ至リ徹宴シ、竟ニ此ニ宿ヲナス

と書いてある。大統領が海外からの珍客と臨席しての祝宴は、当時には大ニュースであつただろう。そう考えると、この機会をもう少し生かすべきだ。

二日目、健脚の友人夫妻は世界一の急勾配のピラトゥスへ、家内はスケッチと各自が自由行動と決め、私はルツェルン歴史博物館、中央図書館、ウィッツナウ郷土博物館へと回ることにした。どこでも親切に対応して貰えたものの、誰もIwakura-Missionを知っていない。

ルツェルンの二日間はあつという間に終了。あと十日間、実記は忘れてスイスの美しい山々を見て回った。

帰国して驚いたことに、中央図書館の館長から厚い封筒が届いていた。岩倉使節団のリギ訪問を書いた当時の新聞記事が入っていた。いろいろな方のお手数をかけて、古典フォントで書かれたドイツ語を翻訳して頂いた。そのうち、大統領主催の晩餐会での一行の服装についての部分が特に興味深い。

「正副使三名は藍色の式服と白色のズボンを着用し、衣服の襟や胸は金色の刺繍で豊かに飾られ、頭にはnebelspate (こ) をかぶっていた」

続いてルツェルン歴史博物館からは、当日のリギクルム・ホテルの宿泊人名簿のコピーが届いた。IwakouraやKouniなどの名前がある。さっそく米欧亜回覧の会に報告した。どうやら二つとも新発見だったようだ。

お礼の手紙には、「まだ日本でもスイスでも殆ど知られていない岩倉使節団の話を一緒にPRしよう」と書いた。その後も口伝え（メール伝え）で知り合ったスイスの人たちが増えたのが嬉しい。

本当にこの国の人を見ず知らずの旅行者に親しみを感ぜさせてくれる。こんな旅をこれからも探したい。

南アフリカ大陸を訪ねて

西川 知世

夫の勤続記念旅行で南アフリカ共和国、ジンバブエ、ボツワナを巡った。飛行機と大陸鉄道ロボスレイルの旅であった。ときは十月、プレトリアの町にはジャカランの花が満開で、空を、地を、紫に染め上げていた。乾季ではあったが、ビクトリアフォールは圧巻であった。

また、サファリジープで駆け抜けた大地は乾燥していて、空はどこまでも青く、透明であった。喜望峰に十二使徒の峰と名づけられた岬を見て、その荒波の岬に十二使徒を重ね、未開の地へ向かった人々が胸に迫った。

南アフリカに出かけることが決まって、すぐに関谷さんに話した。さっそく分厚い南アフリカの資料が届いた。彼が所属している南アフリカの倶楽部の機関紙であった。帰ってから、頼まれて「芽吹く」という題で南アフリカの旅行の俳句作品を作った。関谷さんには詠んでいただく機会を永遠になくした。残念である。どのよ

うに評価されるか聞いてみたいとつくづく思っている。

芽吹く

足踏ん張つて春荒の喜望峰

春深しアパルトヘイトの痕辿り

春の涛猛りてロベン島低し

ジャカラランダ咲かせ鉄扉を閉ざしをり

バオバブの芽吹くジンバブエの大地

春の原裂けゐて大河滝と落つ

踊り子や草青む地を踏み鳴らし

牛瘦せて少年やせて春暑し

ブッシュ芽吹く獣の息の荒きとき

インパラの美しき跳躍陽炎へり

象の背にまたがり春の昼の月

象使ひに小象の懐き春ゆふべ

キリン二頭春夕焼けを食みてをり

春星の降る国境を過ぎにけり

鉄路岐かるるアフリカの春暁に

「国宝薬師寺展」を観る

遠藤 俊也

最近の仏像ブームはすさまじい。それを私は肌で感じるのである。

ことし（平成二十年）五月二十七日、東京国立博物館へ薬師寺の仏像展を観に行った。ところが、延々長蛇の列。展示会場の平成館へ入るまでには一時間三十分しかかってしまった。こんなことは始めてだ。

奈良の薬師寺は私は学生の頃から何回訪れたことか。その都度本堂で本尊の薬師如来の左右に佇む日光、月光両菩薩にお目にかかっているが、白鳳時代に铸造された傑作には何時も感動させられる。金色燦然とした大きな光背に覆われているので、背中の方は観ることができない。今回はそれが取り外されて運ばれて来たので背面は裸同然の筈だ。

展示場はよく出来ていた。中二階から両菩薩の正面をまっすぐ見下せるし、一階に降りると側面、背面まで隈

なく拝観できた。皆が早く移動するのでそれほど混んでいない。

両菩薩とも本堂でお目にかかった時より遥かに大きく力強く感じられ、古銅の持つ焦茶色の肌の艶が光って美麗という他はない。人間以上の美しさに包まれたお顔。一寸ひねった腰の魅力。じっと拝観していても飽きが来ない白鳳彫刻の傑作である。

強いて差を言えば、日光菩薩は威厳と逞しさを備えた男性。無限の慈悲をやさしく投げかけてくれる月光菩薩は母性そのものだ。

私はこの両菩薩を見上げたまま動けなかった。そして、この像を造った飛鳥の邑の工人たちに思いを馳せた。どんな人たちだったのだろうか。おそらく大陸から渡って来た帰化人か、その弟子たちであろう。その美的感覚と技量には敬服の他はない。

裏側に廻ってみた。比べて見るとやはり月光菩薩の方が腹も細く腰のひねりも強い。今度は斜め横から眺めてみる。やや下を見詰める二人の菩薩の切れ長の眼には衆生を想う慈悲の深さが滲んでいるようだ。和辻哲郎氏は、これ

らの像について名著「古寺巡礼」にこう書いている。

「およそ仏教美術の偉大性を信じてない人があるならばこの像を見せるがいい」。

月光菩薩にはこんな話もある。

東京帝国大学の講師だったフェノロサが弟子の岡倉天心を伴い、明治十三年薬師寺でこの月光菩薩を拝観して感嘆の余り、「やあ、これはミロのビーナスだ」と言ったという。

この菩薩のほかに、薬師寺東院堂本尊の聖観音菩薩立像が別室に展示されていた。このことを私は知らなかったので大きな驚きだった。同じ白鳳期の銅製の仏像の中で、私は本堂の薬師三尊よりもこの聖観音の方により大きな魅力を感じていたからだ。

大きさは等身大。やはり古銅造りで黒光りし、光背はつけたまま展示されていた。腰のひねりはなく垂直に立っている。眼には杏仁形が僅かに残り、口許にはかすかな微笑を湛える。薄い衣の美しい襞の流れの中にみ足が透けて見える。これらはインドのグプタ彫刻の名残を感じさせる。このことからして私は、この像は薬師寺三

尊よりやや少し前に造られたと考えたい。その端正な顔立ちには聡明と美しさの結晶であり、人間の風貌を造り上げながら、神を示現しているのだ。まさに日本観音像の白眉と言ってよい。

こうして観ると、これらの仏像が創られた白鳳時代は日本国が明確に自己の力を充実させた時代であり、文化の面でも発展力の旺盛な時代であったことがよく分かる。

持統帝は偉大な権力者であった夫君天武帝の遺志の総仕上げとして、唐の長安にならい藤原京を完成させた。

その規模は大和三山を組み込み、次の平城京と同じ位壮大なものであったという。しかし、僅か十六年で遷都。

宮殿、宮衛、寺院等の建造物は可能な限り解体、新都に運ばれ再利用された。薬師寺もこのようにして西の京に移されたのだった。藤原京を短期間で閉じた理由は、いろいろな学説があるがまだ結論は出てこない。佐保川の堤の上の道を、蒼空の下、二上山を遥か西方に望みながら、袈裟か白衣でまとわれた薬師寺の仏像群がしづしづと運ばれて行く風景を想像すると、美しく且つ平和な天平ロマンの一齣が眼に浮かぶようだ。

続 海外駐在員のひとりごと

大塚 滋

悠遊第十五号では「ミスターデイトー」の話をした。今回も引き続き技術系の英語下手の話だが、前号では技術系を一括りで英語が下手なような書き方をしたが、誤解を与える表現だった。私の言う技術屋とは鉄道屋のことである。

国鉄、ＪＲを通じて鉄道は国内完結型産業だから、つい最近まで海外との係わり合いは殆どなく、英語の必要性もまた無かった。それが新幹線の成功で、鉄道に対する技術協力の要請が高まり、先進国、後進国をとわず技術屋の海外派遣が増えてきた。こうして英語の駄目な出張者がどんどん海外へ出ることとなった。

そもそも国内完結型の鉄道からアメリカに駐在員が出たのは、ワシントン―ニューヨーク―ボストンを結ぶ幹線北東回廊線の近代化に知恵をかはしてほしいとのアメリカ政府の要請があり、多くの分野の技術屋が派遣され、

その計画、行程の調整についてのアメリカ側との打合せなど多岐にわたる業務を遂行するため、アメリカ運輸省に駐在員が常駐することとなったのである。通訳が本来業務でないというものの、初めてアメリカへ出張してきた人に対しては先ず飛行場の出迎えから仕事が始まる。否応なしに通訳をせざるを得ない。

日本からの調査団、視察団も多く受け入れた。彼らは事前に用意してきた挨拶とか資料の読み上げ、説明はなんとか無事に終えることができる。多分、日本で練習して来たのだろう。そして相手側の提出した資料もなんとか読んで、およそのその内容を理解することができる。

なにしろ、日本人の英語は読むことが、聞くこと、しやべることよりはるかに強い。だから双方の資料の説明が終わって、さて質疑応答、自由討議となると途端に座が白けてしまう。相手の言うことが分からない。例え分かったとしても、英語で答えられない。相手は両手をひろげてどうしようもないと言うしぐさ。こちらは顔を見合わせて、困惑の極み。こういう時、駐在員としてはできるだけ口をはさまないのが原則なのだが、見るに見か

ねて助け船をだす。だが、一旦そうなると日本側はホットしたように日本語でしゃべりだし、こちらは完全に通訳になってしまう。

随分多くのこうした出張者を受け入れたが、大雑把に言つて、彼等は二種類に分類することが出来る。一つは全くしゃべれないし、しゃべろうともしないグループ。もう一つはあまり上手くないのに、アメリカへ出張し、英語が話せると喜び勇んでやつて来る第二のグループ。なに不自由なく会話が出来るという第三のグループには長い駐在中、不幸にしてお目にかかることはなかった。

第一のグループは吞気で気楽なもの。仕事はすべて通訳まかせ。なかでもT君は、仕事以外は「イエス、プリーズ」だけで十分こと足りると言う。多くの人が苦手とする食事の場合でも、相手の言うのは質問だろうからと、「イエス、プリーズ」ですましてしまう。肉の焼き具合を聞かれて「イエス、プリーズ」でもあるまいが、とにかくT君は滞在中これで押し通し、なんのストレスもなく「また来たい」と言つて帰つていった。

これと対照的なのが第二のグループのF君だ。多少英

語ができるからなんでも質問し、会話をしたい。ジャパニーズ・イングリッシュだが、きれいな英語をしゃべる人とは多少話ができる。それが嬉しくて自慢の種だ。

ある日、F君は、運輸省のカフェテリアで自分の番になり、ジャガイモのサラダをとったところ、黒人のおばさんが語尾を上げて「グレイビー」と聞いてきた。止せばいいのに、「グレイビーとは何ぞや」と逆に質問。おばさんは待つてましたとばかり巻き舌でしゃべりだした。「グレイビー」とはジャガイモのサラダなどにかける肉汁のことである。さあF君は困った。何をいつているか全く分からない。後ろに並んでいる連中はニヤニヤ笑つて見ている。困りはてたF君、私に助けてくれと合図する。しかし私だつて巻き舌の英語、しかも料理の話だから、分かるわけが無い。「要するに、彼はグレイビーをかけてほしいのだ」と言つて急場を逃れた。「何でもかんでも質問するのは止せ」と注意をしたが、「あんな英語、分かるもんか」と反省の色無し。これがT君なら「イエス、プリーズ」でOK。極めて適切な答えである。

T君とF君。どっちもどっち頭の痛い二人であつた。

菅江真澄の津軽紀行

大月 和彦

江戸時代の旅行家菅江真澄は、三十一歳のときに故郷の三河を出てから秋田県角館で没するまでの四十五年間、東北と北海道の各地を巡り歩く旅の生涯を送った。行く先々で子どもの遊び、働く農民、市井の出来事などを観察し、風景、風俗習慣、伝説などさまざまな事柄や庶民の生活の克明な記録を残している。

旅に出た最初の冬を秋田県雄勝郡で過ごした真澄は、翌年夏、能代から海沿いに北上し、鰯ヶ沢から津軽野に入った。木造、五所川原、弘前を経て青森まで足をのばした後、弘前から南に向かい秋田領に戻る旅をした。天明五年（一七八五年）八月三日から八月二十五日までのこの旅の記録を日記『外が浜風』に残している。真澄は、民俗学の先駆者と高く評価した柳田国男が「この旅は、この世の中が極端に悪いころであって、色々と心を動かす話がある」と評したこの旅をたどってみる。

鰯ヶ沢で大きな嵐に遭った翌朝、海岸のあちこちに船が沈み、積み荷が漂着している。村人は小舟で海に出て、柄の長い鎌や熊手で漂流物をかき集め、自分のものに見ているのを見る。

内陸部に入って恐ろしい光景を目にする。

「道をしばらくきて浮田という所へ出た。卯の木、床前という村の小道をわけてくると、雪が消え残っているように、草むらに人の白骨がたくさん乱れ散っていた。あるいは、うず高く積み重なっている。頭骨などの転がっている穴ごとに薄や女郎花の生い出ているさまは、見る心持がしない・・・」と記す。

行きずりの女から、餓えの極限状況の下で起こったおぞましい話を耳にする。「まるで羅刹、阿修羅など悪魔の住む国などがこのようなものでないかと思われ・・・」と泣きながら語った女の話半信半疑の思いで聞き、惨状を偲んでいる。

弘前近くで、「さるけ」という泥炭を掘り出して馬で運ぶ様子や木の皮で作ったくつと蒲で編んだはばきを背負って市に向かう女たちの姿を書きとめている。

笛や鼓を打ち鳴らして「さんげさんげ」と大声で唱えながら通りすぎていく一団に会う。五穀豊穡を祈って岩木山に参詣する優婆塞（在家の山伏）たち。飢饉の不安が続く中でも村人の信仰活動が続いていた。

黒石近くの村に泊まったときのこと、旅人の金や衣服が頻繁に盗まれるが、犯人はつかまらない。あちこちに潜んでいて、夜になるとしので妻子に会いに来るといふ噂があったので、ある夜、村人が手に天秤棒、又木、利鎌などを持って目星をつけた家を探すと、盗人は窓を破って逃げ出した。畑に潜んでいるところを見つけ、足をとって押さえ、縄をかけるといふ騒ぎを目撃する。身近な災難には、お上に頼らないで村人は自衛していたのだ。

大火と飢饉に見舞われた青森の町は仮小屋が立ち並んでいた。ここでも鍋釜を背負い幼児を抱えた男女が道いつばいにやってくるのに出会う。他の国へ逃れようとする人たち。二年前の飢饉には松前に渡って助かったが、今度はどこのだれの情けを受けて生きられるだろうか心配だと、話していた。

大鰐から矢立峠を越えて秋田領に向かうが、関手形を

持たなかった真澄は、碇が関で通行を断られる。村の有力者に頼み込んで、翌日通ることができた。

秋田領に入って泊まった長走の村で、道の傍らで念仏を唱えながら卒塔婆の先に金輪つけた無縁車を廻している男を見る。ここに埋められた餓死者を弔っているのだという。「あわれ、わが一族の者はみな、このようになってしまった。あさましい世の中だ」と独り言を言う。「馬も食い、人を食って命が助かった……。深く隠して人には語らずにいましたが、旅人や出家の方には改悔、懺悔したら罪が減るだろうと思い、ありのままにもらすのです」と語るのを聞く。男に銭を渡して別れ、南部領の鹿角に向かった。

今年（平成二十年）の秋、日記に出てくる床前、森田、木造など現在のつがる市の郊外を歩いた。岩木山の北に広がる田園は黄金色に染まり、今年も豊作だという。田んぼにそびえるカントリーエレベーターはまもなく米で満杯になるはず。かつては救荒作物だった蕎麦が休耕地一面に植え付けられ、白い花をつけていた。

闘い取っていない権利と自由

大平 忠

日本においては、明治維新以後、近代化の猛スピードで走った歴史の中で、個人の権利と自由のための血みどろの闘いが無かった。欧米諸国とのこの違いが、現在にいたるまであらゆる事象に影響をおとしている。

明治四年、岩倉使節団が欧米を視察した際、近代の国民国家は憲法を持ち、国民がなんらかの形で国政に参加し、そのうえで国を挙げての政策が実現されている実態をよく認識した。特に、木戸孝允、大久保利通は共に立憲君主制への移行は必至と考え、明治六年帰朝するや、立憲制に関する意見書を提出している。

しかし、これらの意見書に個人の権利と自由についての配慮は乏しい。使節団の一行の中で、個人の権利と自由について掘り下げて考えた形跡は、わずかに中江兆民が目立つぐらいではなからうか。

もうひとり福沢諭吉は、維新前に三度の欧米視察を

行っており、早くに民権は参政権のほかに個人の権利の基盤あつてのものと考えていた。

西南戦争前後から高まった自由民権運動も、議會を開設し、そこへの参加の声ばかりが大きく、明治憲法が發布されてからは運動自体が消えていく。自由民権運動敗北について福沢はこう述べている。

「私権未だ固からずしてこれを犯す者も犯されるも平氣なるが如き漠然たる社会に、唯熱して政権のみの事を講ずるは、或は前後緩急を倒にするのそしりを免れざる可し」(私権論)

明治十三年国会期成同盟は各方面に憲法草案の作成を促した。現在私擬憲法草案は四十数種類発見されているという。このなかで植木枝盛起草のものと五日市憲法といわれる千葉卓三郎起草のものは、人権規定を細密に定めている。国家の存在よりも政府の法よりも先に基本的人権があり、それは何物によっても侵すことのできない永久の権利であると書かれている。現在の日本国憲法と極めて近い。

しかし、明治十四年の政変で、英国流議會政治を唱え

る大隈重信は政府外へ追放され、次いで明治十五年、民権派の先手を打って国会開設の詔勅が出される。問題は、この詔勅の中で野における民間の自由な憲法論議が禁止されたことである。天皇の勅諭でこのようなことを禁止した例は無く、岩倉具視、伊藤博文等は民権運動に過剰反応を起こしたとは思えない。

ここでもし自由な憲法論議が世の中でなされていたら、人権思想はもっと広まり進んだものになったであろう。

自由民権運動の中の私権主張の動きは天皇の名を借りてつぶされてしまったのである。

その後伊藤の主導のもとに作られた明治憲法も見た目には世界的にも評判のいいものであった。運用次第では国民にとってよい憲法に成りえたかもしれない。しかし、人権に関する条文は、すべて法の名のもとに死んでいく。

明治十三年集会条例、明治十六年新聞条例改正と辿ってきた方向が、さらに厳しく明治二十年には保安条例が生まれ、基本的人権の制約、弾圧へと向っていく。この流れの先には治安維持法が待っているのである。

維新後、開明、開化と叫んでも、近代化の真髄である

べき個人の権利と自由は、一般国民の目覚める前に政府によって目を塞がれたといつてよい。個人よりも集団のためという「滅私奉公」の叫びの中に、いつのまにか放り込まれてしまった。

欧米の長年かかって勝ち取られた個人の尊厳に対する意識は、戦前はいかに根付かなかった。真の意味での近代国家ができていないうちに、日清、日露の戦争に勝利し、欧米諸国に伍したと錯覚したのであった。このことがその後の日本のすべてに尾を引いている。

沖繩、アイヌ、部落等の国内差別の問題は無論である。日露戦争後日本が陥った植民地主義、帝国主義も、個々の人権に目覚めた国民であれば、世界の流れからいっても他国に対する考え方が異なってきたはずである。

さらに、政治家も、パーパーテストではすこぶる優秀な官僚も、国と自分のためには仕事をしますが、国民個々のための「僕」という意識は稀薄であったといえよう。この稀薄さは、我々の頭上から権利と自由が舞い降りてきた戦後、そして今に続いているといつてもよい。

個人の尊厳問題は、未だに日本の大きな課題である。

あなたならどうする

木下 洋介

あれはたしか休みの日のことだ。雨が降っていた。一人でぶらぶら歩いていて、一軒の回転寿司屋に入ったときのことである。

店は昼どきで、混みあっていた。適当に食べて、いざ支払いとなって財布がない。えっ、どうして、どうして、慌てれば慌てるほど収拾がつかなくなる。財布を入れるポケットはきまつているのに、そのポケットにはないのだ。何回も何十回も手を突っ込んでも財布は出てこない。

そのうち洋服を替えて出てきたことに気づき、ポケットを探しよりこの場をどうするかだと腰をかけなおして考える。いろいろ考えが浮かぶ。正直に店の人に話すしかない。なに食わぬ顔して店を出る。それは食い逃げだ。

財布を取りに一度帰ってくるか。でも家には誰もいな

い。鍵は開かない。他の客が店を出るのにまぎれこんで一緒に出てしまう。これも無銭飲食だ。いずれにしても拳骨の一つや二つは覚悟していなければならぬ。土下座させられるかもしれない、などと考えているうちにだいたい時間も経つ。気のせいかわ客が私を注目しているように見える。

「店長に話したいのだが」と皿を運んでいる若者にいうと、若者は一人の男を指さした。指さされた男は三十歳ぐらいか。時に店の外に向かって「イラッシャイマセ」を連呼している。「なに、無銭飲食だ」といつて、やにわに胸倉を掴んで、一発二発あごのあたりをめがけてくるかも知れない。覚悟はできているが緊張する。一発でも受けて変形した顔で帰ったら女房になんというか。それにはなんと答えればいいか……。これらがパタパタと頭の中を駆けめぐる。

その店長は四、五十センチ前にいて私の目を見ていた。私はゆつくり金のない状態を説明した。私の説明のあと、さあどうなるか。なにかあるとその時だと思つた。ところが、店長は「身元を証明するものを持ってい

ますか」と言った。私は一瞬耳を疑った。「健康保険証なら持っています」が「それ見せてください」。

昨日歯医者に行ったときの保険証を差し出した。

店長は裏、表と何回かひっくり返しながら見ていたが、ニコリともしないで、私を見据えた。緊張は最高度に達した。

「こんどここを通ったときに払ってください、いいですね」と念を押した。言い終わると、保険証を返して、先程まで立っていたところへ行き、同じ調子で「イラッシャイマセ」と声を張り上げている。

私は身体中の溜まっていた汗が流れ出たようだった。

店長は保険証を見ながらこの始末をどうするか考えていたのだろう。年寄りに一発食らわしてみたところでないにもならないし、皿洗いをさせるわけにはいかないし、年寄りに免じてまあ返してやろうという結論に達したのではないか。お蔭で一発も来なかったし、警察に通報されることもなく、店の客に感づかれることもなく、さらに電話番号をメモされるところか聞かれもせず、私は、「わかりました」と深々と頭を下げて店を出た。

こういうのを蛇足というのかもしれないが、私にはこんなことがある。東京生活を始めた頃、知合いに金を借りに行ったことがある。あいにく不在であったが、応対に出た人に用向きを聞かれたので、金を借りたくて伺ったと言ったら、その人がその場で用立ててくれた。涙が出るほど嬉しかった。なぜって、それまではこれでもかこれでもかというほど、都会は、東京は、生き馬の目を抜くようなどころだと教えられていたのだから。



あさ 7/6

近所のこと

釘澤 淑郎

私の近所で、かなり大きなマンシヨンの建設が進んでいる。暫く前、散歩の際に見た表札には「木村」とあった。聞いたところによれば、「木村屋パン」の社長宅とのこと。明治の頃、士族出身者が武士の商法と嘲られて殆どが商売に失敗した中で、士族出身ながら「小倉パン」（餡をパン生地で包み、真ん中を窪ませて焼き上げて、最後に窪みに桜の花の塩漬けを入れたもの）を売出して大成した木村屋だと思う。あの大邸宅がマンシヨンに変わつつある。

その隣は「自証院」という、今は小さく控え目な感じの天台宗の寺である。江戸時代には尾張徳川家の庇護を受け、結構大きな寺だったようだ。この寺の周囲は、今の「木村邸」を含めて、その境内だった。そこには樹齢何百年の松林があった。この寺の前の坂を靖国通りの方へ少々下ると、今は「成女学園」という女学校がある。

明治の頃、ここに小泉八雲（ラフカデオ・ハーン）の旧宅があった。熊本の第五高等学校教授の生活を終えて、東京帝国大学の教授となった頃のことである。

八雲はこの地が気に入っていたようで、特に「自証院」を散歩し、その住職と話をするのを楽しみにしていた。ところが、ある日、非常にがっかりした様子で散歩から帰ってきた。住職が生活に困って、境内の大きな樹木を切って薪として売り払ったのだ。明治政府の廃仏毀釈策の影響と尾張徳川家の庇護が無くなったことで、かなり困窮していた。さらに、境内にあった自証院の御霊堂も売ってしまった。この御霊堂は朱塗りで金箔をふんだんに使った造りで、現在、小金井公園の中にある「江戸東京たてももの園」の入り口前で堂々とした、しかも豪華な姿を見せている。

八雲はその後、大久保のほうへ引越し、そこで生涯を終える。引越しの理由は、自証院のことが一つにあったらしい。私は散歩の道に、立派で大きかった江戸期から現代へ、この寺が歴史の変動の中で翻弄されながら今の姿があることに、想いを馳せる。

散歩の目標地の一つに、戸山公園がある。江戸以前は戸山村と称して随分深い原っぱで、戸山が原といわれた。寛文八年（一六六八年）尾張徳川公の下屋敷となった。その敷地は十三万六千坪。その翌年から工事が始まり、約三十年後に大庭園が完成する。廻遊式築山泉水庭園で極めて豪華なものだったらしい。寛政の頃、十一代将軍家斉が来遊、「天下第一の眺めなり」といわれた由。池の周りをそぞろ歩きをする、招かれた諸侯や奥女中の姿が目につく。

明治に入り、陸軍戸山学校の用地となり、その演習地が広がっていた。軍人の卵が匍匐前進を繰り返し返していたであろう。「夏草や兵どもが夢の跡」の句そのものであった。

戦後は占領軍将校の住宅が建てられて、戸山ハイツと称した。その後、返還されてから、周囲に都営住宅がよきよきと建てられて、今や景観が良いとはいえないが、まだまだ昔の面影と自然の良さが残っている。

ここからそれ程遠くないところ（市ヶ谷本村町）には尾張公の上屋敷があった。ここには後に陸軍参謀本部が

おかれた。今は、防衛省の建物が堂々の威容を誇る。三島由紀夫が自決した場所でもある。

私はいつも大久保通りに面する国立国際医療センター（昔は、陸軍病院）横の道を折れて、公園の中へと入っていく。この公園の中央に「箱根山」という三十メートル程の小山がある。

尾張公の庭園では玉円峰という築山であったが、明治になり、「箱根山」と呼ばれるようになった。散歩の際は、必ずこの山に登り、山頂で一休みすることになっている。春には、周りの桜の花を愛でる人達が集まってくる。秋の紅葉の頃のこの公園は人が少なくて気分よく歩ける。

この辺りで出会った人達の多くは都営住宅の住人と思われる、かなりの高齢者の方々である。杖を突き、或いは小さな手押し車を押しながら、歩いている。平和な世の中をしみじみ感じながらも、この公園がどう変化していくのであろうかと思う散歩道だ。

会社での恩人

佐久間 直 正

七十年も生きていると、人間誰でも、数え切れない多くの人々と出会い、そして忘れられないほどの、お世話を受けてきたと思う。この受けたお世話が一つでも非常に大きなものであるか、或いは積み重なって大きくなれば、それは恩を受けたということであろう。

半世紀近くも昔に、縁あつてある会社に入り、まあ無事に定年まで居られたについては、入社で五年先輩のTさんに、恩人と呼んでもいいほどのお世話になりました。

入社して一年ほど横浜支店に居てから、定期異動と関係のない六月に突然本社に転勤になりました。後で知ったことですが、Tさんがどうしても早急に痔の手術をしたくてはならず、その期間を繋ぐアシスタントが必要になったとのことでした。まわりの人の中には、「あいつはTの肛門アシスタントだ」などとぬかす者も居たようです。

この頃はまだ痔の手術はそれほど普及しておらず、噂を聞いて、沢山の人が密かに手術の詳細を聞きに来ていました。話好きのTさんはその度に仕事をやめて、長々と説明していました。いつも同じ話を聞いている小生は、その詳細を全て知ることとなり、Tさんが席に居ない時は、代わりに説明をしていました。痔シスタントとして、入社六年目で初めてのアシスタントを付けて貰い、嬉しかったのでしょうか、その分本当に親切にしてもらいました。例えばTさんは「半年は仕事をしないでいい。

俺がお前の代わりに書いたメモを時々清書していろ」と言いました。これには若干の説明を要します。如何に二年目の社員でも少しは事務の手伝いは出来ますが、他の会社と同様に、本社で仕事と言えば、何か上申書とか稟議書を提出することで、変なものを書かれては困るので、このような言い方になったのです。如何にも私が書いたように上に上げれば、中々な奴と早々に認められるというわけです。今の省力化のご時世では、若手社員に話しても、信じてもらえないとは思われない悠長な時代です。兎に角Tさんの下に居た三年間は、雌鳥の羽の下に

いるようで、暢気に過ごしたように思います。

私が居たのは船会社なのですが、昭和三十年代後半は所得倍増の最中で、日本の輸出入を賄うには、まだ日本船が十分ではありませんでした。と言う訳で、社内でも大型船の取り合いが大変でした。手持ちの船を航路ごとに配船して、最大の収入を得るために、各ラインを代表する若手社員の会議が、毎月行われていました。私はTさんに知恵を授けられて、これに出席し、多くの場合自分達の航路に都合のよい結果を得ていました。それも当然、入社二、三年の社員の中に、六年以上の頭脳が混じって居るのですから。

暫くすると、割と自由にやらせて貰えるようになり、破天荒な提案も時々やりました。例えば、一度積み終わった外国産の塩を、海中に投棄して、もっと運賃の高い羊毛を積もうというものです。この馬鹿な提案を荷主さんも了承し、実行することになりましたが、港内での塩の投棄は、環境の観点から許可を貰えず、それでは港

外で言うことになり、今度は沖仲仕の組合と交渉する間に、塩が固まって、海運の歴史に残ったであろう壮挙もおじゃんとなりました。（これは豪州での出来事で、当時塩分が大きくなると魚が困るなどという発想は、日本人には理解できませんでした。日本で公害問題が大きくなるのはもう少し後です）

Tさんの下には三年弱居ました。次に隣の課に移る時、Tさんがご同期の人に私の引継ぎをしました。そつと聞いていると「こいつは上の人間を使うのが上手いから、気をつけろ」と。確かにご同期の人たちにはあとで四人に仕えましたが、皆良く働き、揃って偉くなりました。

その後Tさんと仕事が一緒になるのは、Tさんが米国のクルーズ会社の会長、私が本社の客船部長の時です。この時も始めたばかりの事業ということもあり、色々なことがおきました。しかし今思い出して可笑しいのは、余り仕事と関係ないことばかりです。ある日、Tさんから電話があり、ロスアンゼルスのにやら有名なゴルフ

クラブに入会したから、大枚幾ら幾らの金を都合して欲しいとのこと。私は答えました。「まだ大変な赤字を出しているのに、それどころではないでしょう」と。すると『いいから社長と相談してくれ』と。社長のところへ行くと「実は先日出張の折、そこでゴルフをしてきたのだ。何とかしてやれないか」とのこと。何をかいわんやである。仕方がないから、何とかしました。

Tさんの会長在任期間は米国の法人設立に始まる十年近くにわたり、その間色々ありました。営業開始直後に第一次湾岸戦争があり、米国のクルーズ客は飛行機で海外に行くのを恐れるようになりました。このため初めの二―三年のスケジュールを大幅に変える必要があり、この間に赤字を生じました。さらにロスアンゼルスの大地震もこの間にあり、多くのフリーウェイが崩壊して、半年以上にわたり自動車の通勤が大変だったと思います。加えて怖いのは時々起こる山火事です。Tさんの時にも相当大きな火事が、社宅のすぐ後ろまで迫ったことがあります。我々も日本で大変心配し、度々様子を聞いて

ていました。最後まで頑張っていたTさんも、消防署の命令で、とうとう避難を決意したようでした。そうなりと長年苦勞して集めた海運関係の書籍が何より大事で、先ずこれを車に積み込み、現地オフィス近くのホテルに間一髪逃れたそうです。他の邦人の報告によると、この時、Tさんは奥さんを忘れて行ったというのですが、流石にこれは信じられません。慌てて二十メートル位は走ったかもしれませんが。

それから数年の後、私はTさんの後任となり、ロスに行きました。Tさんの住んでいた社宅、家具一式、車、風呂の糸瓜、半分使った歯磨きチューブに加え、勿論そのクラブ会員資格も引き継ぎました。

Tさんには、会社生活のいろはから教えて貰い、最後は第二の職場までお世話になり、あれほど入会に反対したカントリークラブで、本当に楽しませて頂きました。

因みにTさんは今も大元気で、つい最近も「豪華客船の悲劇」という客船遭難史の大部を出版しました。

信用ということについて

倉 藤 金 助

最近、「仲間包み」なる言葉を知った。江戸時代の金銀包みの一つで、もともと本両替屋仲間が封をした金包みに署名し、信用通用させたものを「仲間包み」といったのだという。現在でいえば、銀行の札束の帯封が、それにあたるのだろう。

そういえば、僕が社会に出たのは昭和三十四年だが、その頃、銀行の帯封をした札束を数えようとしたら、それは数えなくてよいのだと笑われたことがあった。当時、それがどうしてなのか、先輩に聞いても納得できるものではなかった。四十年たった今でもその光景を覚えているのだから、笑われたことがよほど腑に落ちなかったのだろう。今にして思えば、それは「仲間包み」を意味していたのかと、その言葉を知って、ようやく長年の疑問が解けた気分になった。

先日、面白いことを体験した。A銀行から引き出し

た、帯封のままの札束を、となりのC銀行に預けに行ったら、若い行員さんが表情一つ変えず、「数えさせていただきます」といって、機械にかけたものだ。当然といえばとうぜんの行為だが、平成の世では、もう「仲間包み」は雲のくたはへ行っちゃった！

もう一つ。お中元やらお歳暮やらでいただいた、名古屋の老舗百貨店の商品券を、その老舗百貨店へ持ち込んだときの話。

百貨店の綴られた商品券は、「仲間包み」そのものだと思うのだが、店員はきれいに綴じてある一冊十綴りの商品券の表紙を無造作に剥ぎ取り、一枚いちまい数えだした。「君のところの商品券だろう？ なぜ数えるの？」と思いながらその動作を見守り、そして思った。もし、そのうちの一冊に十一枚操ってあったらどうするのだろうと。

僕は、ありもしないことを考えながら、数えている手を眺めていた。

旧東海道歩き

清水 勝

二〇〇八年十一月十七日午後二時、京都三条大橋に我らダブル弥次喜多の四人がいた。そう、この四人は旧東海道四九六キロを四年間通算二十七日間かけて歩き終えたのだ。特に歓迎される風もなく、淡々と記念写真を撮っていた。

*

*

当初は街歩きとして月に一回、旧東海道を日帰りの範囲で歩くということから始めた。日帰りの最後は箱根から三嶋までで、そこに着くや否やこのまま終わるわけには行かないと、京都三条を目指すことになった。ただ無理をしない、暑さと雨を避け、定年待ち等それぞれの予定を優先しようということもあって、到着までに思いのほか時間が経過してしまった。

江戸時代の人は十一〜十九泊、一日平均三十九〜二十五キロを歩いている（馬・籠を利用している場合も

ある）。それにしても道の状況、履物のことを考えると凄いい。

江戸幕府が東海道を整備したのは、軍用道路としてであり、そのため沿道には直轄領以外は全て譜代大名を配し、京の二条城には所司代を置いて守備した。しかし、江戸の中期以降は平和が続く、講による観光旅行をはじめ民衆の旅行にも盛んに使われるようになったようだ。

さて、旧東海道を歩いて何処が印象的だったかという
と、やはり苦勞して汗を掻き掻き登った峠、即ち箱根峠（箱根宿）、薩埵峠（由比宿／興津宿）、宇津ノ谷峠（丸子宿／岡部宿）、小夜の中山峠（金谷宿／日坂宿）、鈴鹿峠（坂下宿／土山宿）である。厳しさでは箱根峠が一番であり、美しい眺めは薩埵峠、雰囲気が残っているのは宇津ノ谷峠、そして夜泣き伝説の中山峠、最後の難所は雨の鈴鹿峠となる。

*

*

この後はQ & A方式で話を進めていこう。

Q. 旧東海道と国道一号線の違いは？

A. スタート後は国道一五号を通り、京浜急行に沿って

いる。国道一号とは保土ヶ谷で合い、その後はほぼ一号線に並行線の道となっている。これは国道を作る際に旧道では道路の拡張が困難で、バイパスを通さざるを得なかったからだろう。逆に言えば、だからこそロードサイトから離れた所に古い家並みが残ることになったと思われる。

Q. 旅籠の数が多く、最も賑わった宿場は？

A. 記録によれば宮宿（熱田宿）で、旅籠は二四八もあった。熱田神宮に詣でる人、桑名宿までの渡し船を待つ人、そして名古屋城も近く遊興に来る人等々でごった返した。次に多いのが、桑名宿の一二〇、続いては徳川様のお膝元岡崎宿で、一二二である。逆に最も旅籠の少ないのは石薬師宿と庄野宿で共に十五のみ、しかもこの二宿は並んでいる。理由は二宿とも伊勢詣の旅道から逸れているためと、桑名宿や四日市宿に泊まった旅人は、鈴鹿峠近くの関宿、坂下宿に宿を取ったためだろう。

Q. 宿場間が最も近いのは？

A. 三十五番目の御油宿と次の赤坂宿は僅か一・七キロと短く、一つの宿場のようであつた。それだけに宿泊客

の争奪戦が激しく、そのため留め女や飯盛女（遊女）が活躍したという。なお、そうしたことは関係がないが、この間には今も見事な松並木が続いていて、旧東海道を歩いている実感がする。念のためにいえば街はすっかり廃れ、かつての争奪戦は嘘のようだ。

宿間の長いのは、宮宿―桑名宿の海上七里（二十七キロ）ということになるが、陸路だと小田原宿―箱根宿の十六・五キロとなる。箱根八里とは小田原宿―箱根宿―三嶋宿の合計を言ったのである。距離がある上に坂は厳しく、石畳は滑り易く、さらに関所が待ち構えているのだから、この間は大変な苦勞を強いられたと思われる。

Q. 問屋場は何をする所？

A. 宿場には必ず問屋場がある。幕府によって認められた馬、籠、人足を手配するところで、武士はもちろん町人でも利用できる。値段も公定で、上りも下りも次の宿場まで安全に送ってくれる。

なお、馬には本馬と軽尻があり、乗る人と荷物の重さによって価格が違っていた。人足は荷物を背負ってくれ人で、価格は本馬の半額程度であつたらしい。

袖摺りあった三人の中国人

莊 司 忠 志

映画「慕情」を観たのは、はつきりと思い出せないが、大学に入った前後だったか。ストーリーよりも、映画の主題歌「Love Is a Many Splendored Thing」に魅了された。映画の中で演ずる、ジェニファー・ジョーンズとウイリアム・ホールデンの二人が、香港南部の浅水湾で泳ぐ海の周辺の景色がとくに印象に残った。

社会人になって二年目、最初の海外出張が香港だったので、仕事の合間に町から浅水湾にタクシーを走らせた。

映画の中では、緑深い湾岸の丘陵地に豪華住宅が点在する、落ち着いて美しい場所だったが、私がい実際に訪れたときには、海岸に高層アパートが何軒か建築中で、商店があちこちに出現したりしていて、記憶にあった映画の雰囲気とはまったく変わり、俗化していて、落胆させられた。

その後シンガポールに赴任し、ある昼食時ホテルの食堂で隣り合わせたのが、「慕情」の原作者ハン・スーイン女史だった。私は勇気を奮って「映画慕情はすばらしかったです」と言いながら握手を求めた。女史も、ありがとう、と言いつつ握手を返してきてくれた。

その後同じ場所で再度ハン女史を見かけたが、そのときは、噂されていた年下のインド人の歯医者さんのボーイフレンドと一緒にいた。二人はシンガポールの隣のジョホールバル（現在はマレーシア）に住んでいたらしい。ハン女史は、中国人の父親が若き日鉄道の勉強でベルギーにいたとき、ベルギー人女性と仲良くなり生まれた混血児である。

後年、同じ作者の三部作、「悲傷の樹」、「転生の花」、「無鳥の夏」を読んだ記憶がある。

☆

一九七九年末、私は十一年の長いアテネ駐在を終わり、翌年早々帰国することになって、台湾人女性が開店したばかりの中国料理店で知人友人と会食を重ねていた。ある晩店のオーナーの女性が一人の品のよい中国人

の老人を紹介してくれた。それは中国の「何応欽」将軍だった。私の年代では、将軍の名前は、蒋介石主席の側近として記憶にインプットされていた。

将軍は、「日本との戦争が終わった時、日本軍の岡村大将と終戦の覚書に署名したが、アレもずいぶんと昔のことになった」と感慨深げに話された。「この年になってヨーロッパ各地を見られてよかったよ」とも日本語で話された。将軍は蒋介石と前後して日本の陸軍士官学校に学び、八年も日本に滞在したこともあり、日本語も自由に話せた。

後に将軍は台湾で、九十七歳で亡くなられたので、私がお会ったときは、将軍が八十八歳の時だったのだ。

☆

ニューヨークのセントラル公園の近く、特にアップパーイーストには豪華広大なアパートが林立している。

ある夕方、そのひとつに住む息子夫婦の友人Pさん宅に夕食によばれ、私たち夫婦も相伴した。そのアパートは、ワンフロアー一軒の広壮アパートで、このようなアパートの玄関には四、五名のコンシェルジュとかガード

マンが常駐していて、アパート住人のすべてを熟知している。

私たちがアパートの玄関でエレベーターを待っていたとき、玄関には四、五人のアジア人らしい女性がいた。その時Pさんが私の耳元でささやいた。「あの背の高い老婦人はSong Meilingだ」と。Song Meilingといえば、蒋介石未亡人の宋美齡ではないか。私の全身に電気のような戦慄が走った。宋夫人は、私たち夫婦を認めて、目礼をしてきた。私も、家内を促して目礼を返した。

その後しばらくしてから、新聞テレビは宋美齡氏が、ニューヨークのアパートで亡くなられた、と。享年百五歳だとも。（一説には百六歳とも）

宋夫人は長らくそのアパートに姪御さんの一人と、他にメイド数人と住んでいたらしい。

宋夫人は、若い時ジョージア州の田舎の小さな大学に学んだが、ハーバード大学を卒業した兄、宋子文の勧めで、ボストンに近いWellesley大学に転校し、そこを卒業した。

後年、アメリカの上院議員ヒラリー・クリントンも同じ大学に学び、首席で卒業した。

理科支援特別講師を体験して

杉 浦 右 藏

理科支援とは 文部科学省は「理科教育の充実」施策として理科支援員等配置事業を平成十七年度に法制化しました。此の事業は科学技術振興機構（JST）が管理実行しています。十八年度に全国で三校パイロット授業が実施され、十九年度から本実施を開始、全国で約二万三千ある小学校のうち約三千校弱の学校に実施しました。外部人材を理科支援員や特別講師として活用することにより、小学校五、六年生の理科の授業における観察実験や理科授業の充実を図ることを目的としています。実施は各県教育庁・政令都市教育委員会が主導します。

応募の動機 私は現在七十六歳の後期高齢者です。幸にも七十二歳まで会社勤務、その後、学会や協会への協力、千葉県技術士会理事、地域老人会長など年金生活ボランティアをしています。そんなところへ理科支援員等配置事業の話がきました。

カリキュラムの作成 千葉県技術士会会員十九人の有志が集まり、「理科支援センター」を立ち上げ千葉県教育庁と打ち合わせしました。まずは理科教科書や文部科学省の学習指導要綱の検討、小学校で学ぶ五年六年の内容分析の打合せを行いながら、各自何が出来たかの素案を作り、千葉県教育庁が定めた理科支援指導案を作成しました。千葉県教育庁からは授業時限四十五分に納めて、小学生に「感動を与える」ようにとの希望です。カリキュラムの提出後、十九年度は十二月から二月にかけて全国一斉に約三千校が実施されました。二十年度は小学校の前期と後期の期別に分けて、学校授業の進行に合わせた形で実施します。私が提出したのは教育指導要綱の「電磁石」の応用の話「ケータイのつながる仕組み」に決めました。イントロ五分、ケータイを分解して中身を調べてみよう十分、実験体験十五分、説明講釈十分、質疑まとめ五分、の四十五分にしました。

特別講師の決定 カリキュラムの提出後、教育庁から特別講師予定者に集合案内が通知され、オリエンテーションが半日実施されます。教育庁は講師予定者から集

まったカリキュラムを各小学校に配布して学校側からの選択希望を収集します。理科授業は十七項目に亘る広範囲ですからかなり大変なようです。選択決定された題材講師には個別に電話で通知され学校側と講師側と日程調整して実施日が決定されます。

事前打合せ 実施日が決定した後、講師が学校側に訪問して事前打合せを一回以上行います。学校の先生は多忙で、午後四時から五時半頃になります。私の例で説明すると「ケータイのつながる仕組み」授業を担当担任の先生に集まってもらい、生徒に授業する形で実物を使って、当日の本番のリハーサルの気持ちで実施説明します。説明終了後、先生方の御意見、手伝って欲しいところ、等をディスカッションします。

本番の感想 小学校の標準生徒数は一クラス三十五名、理科実験室で行います。実験卓一卓六名にします。まずはOHC提示装置でケータイ機の中身を分解して電磁石に関係した構造などを説明します。次の実験体験では、講師側から生徒側に電話を掛け、生徒に講師側と生徒側を見もらい、ショットキーダイオード二個と高輝

度LEDの組合せで作った「電波を目で見てみよう」の目視、生徒着信側でケータイ機マナーモード受信の振動体験をします。これを六回繰り返している間、別に各実験卓に本物の振動モータと電池を置き、先生と通信している間に電池の直列の勉強や一万回転の振動モータを動かして分銅付構造などを虫眼鏡で観察してもらいます。最後に、パワーポイントを使って、電磁石の応用から電波の説明、ケータイアンテナ、基地局、交換局の役割、全国のケータイの実情、などを講義して最後に質疑をします。副読本としてドコモ提供マナーの話をして終わりとなります。

感想 カリキュラム作り、授業の仕組みを作るのに大変な工夫と知恵が必要です。謝金は県によって異なるようですが、別に要求する物品代を除き、一校当たり二万円です。一校やるも十校やるも手間は同じく掛かります。また、一校大体四クラスあり、一日四時限連続で、同じことを実施するには体力と気力を必要とします。しかし後期高齢者のボケ防止、人生の恩返しに最適と思っています。

百二十周忌

高橋 孝藏

二〇〇九年七月五日はフレデリック・ウィリアム・ストレンジの百二十周忌に当たる。ストレンジは日本における近代スポーツの父といえる人で、私のライフワークとして、既に九カ年も追いつけている人物である。百二十周忌を機会に決着つけたいと考える。

学会

研究も大詰めに近づいたので、論文にまとめ、スポーツ史の権威者に届けた。これが契機となり、日本体育学会に招かれることになった。

二〇〇八年の日本体育学会は九月九日より、四日間早稲田大学にて行われた。その中の分科会の一つがストレンジ研究に充てられ、そこでスピーチした。スピーカーは四名で、司会役の阿部筑波大教授が先導し、私、次に米国の研究仲間ルイス博士、最後に渡辺東大名誉教授

が、ストレンジについてそれぞれの分野で研究内容を発表し、最後はパネルディスカッションで締めくくられた。

聴講者は全員専門家で、体育史の教授や大学院学生約七十名強が参加した。これに十五名のシニア・ボートマンが応援に駆けつけてくれた。外語、東大、学習院大、江戸川大のOBの面々である。特に外語の場合は先輩や同輩が練習を休んでまで、励ましに来てくれた。御礼の言葉もないぐらい嬉しかった。また、私やルイス博士のような素人をただ招くだけでなく、新鮮な視野を提供してくれたと感謝さえしていただいた体育史分科会の度量には感服した。

出版

大学の先生から、某大出版社社長に研究論文が持ち込まれた。勿論、素人の研究論文をすぐ出版するほど、出版業界は甘くない。

出版したいという気持ちはとても強いものがあるが、それ以前に「読めるものを書く」のかがもつと大事なことである。「最盛時の大英帝国と近代化を急ぐ日本を背景に、日本にスポーツを広めた男」を納得がいけるよ

うに書けるかがポイントである。挑戦のし甲斐があると考えている。

百二十周忌

三年前から、命日になると、有志と共にストレンジ墓所の草むしりをし、墓石を洗って磨き、花束を供え、日本のスポーツ界に貢献されたことを感謝するという儀式を続けてきた。

百二十周忌にはストレンジの末裔、日本体育学会の体育史メンバーが参加したいという希望が伝えられてきた。個人ベースで対処すべき問題でなく、下働きするから、日本ボート協会に預けたいと申し出、内諾を得た。

彼らの意向にもよるが、日本体育協会（森喜郎会長）、陸上競技連盟（河野洋平会長）、イギリス大使館などどう連絡を取り合ったらよいのか。これを機に、日本ボート協会はボート人口増、体育学会はスポーツ人口増につながるよう、マスコミ対策を考慮するようにとの希望も聞かされている。七月五日が近づくにつれ、忙しくなりそうである。

七十歳をどう生きるか

七十歳代も元気でいて、好きなことが思う存分できれぱと思う。

ストレンジ研究は正解だった。途中で、大病を患いボートを漕げなくなったのも、反対に幸いし、ストレンジ研究に集中できる結果となった。研究の成果もそこそこに仕上がった。

しかし、それ以上に重要なことは新しい友人が作れたことだ。米国の研究仲間にはルイス博士。彼は日本勤務時代に鶴見川でボートを漕いでいた。現在退役軍人。数年間ストレンジ研究ではメールで激しいやりとりを行った。しかし、じかに会ったのは今回の学会が初めてだった。ストレンジの末裔で家系研究家のイギリス人レイ・フェザー女史、末裔のフランス人エマニュエル氏、同じくエヴェリン女史。阿部生雄筑波大教授、東大野球部の監督もやられた渡辺融名誉教授。それぞれが尊敬でき、魅力のある人々だ。

ストレンジ百二十周忌が終わると、テーマが変わるだろうが、やはり好きなことを見つけ、元気でやっていきたいと思う。

ベイカー・ストリート二二一B

田谷 英浩

ベイカー・ストリート二二一B、コナン・ドイルが創りあげた名探偵シャーロック・ホームズの住宅兼事務所のアドレスである。

ここがロンドンでも特に有名で由緒ある場所として知られるのは、世界の推理小説史上最大のメッカであるからである。

世にシャーロック・ヒアンという人種が存在する。架空の人物シャーロック・ホームズをあたかも実在した人物であるかのように研究し、彼の手懸けた事件や登場人物、当時の英国の風俗、風物などを研究、詮索する。こうした物好きなファン、崇拝者をこうよぶ。

中学生時代、延原謙訳の新潮文庫でホームズを繰り返し読んだ熱烈なファンの一人として、いつかこの場所を訪ねてみたいと思っていた。

地下鉄ベイカー・ストリート駅を地上に出る。通りがかりの人に声をかけるが、誰も正確に二二一Bを知らない。しかし数分後、ホームズ風いでたちのサンドイッチマンを見つける。彼が持つプラカードはホームズ・ミュージアムを示しており、低層のオフィスが連なる一角に「221B BAKER STREET Sherlock Holmes」の表札を発見した。

この道に馬車が止まる。降りてくる人物を二階の窓から見下ろしていたホームズが「ワトスン君、今度の依頼人の特長は……」などと言っていたあの場所にいま立っているのだ。そう考えるだけで愉快。創作と現実の境目が無くなってくる。

狭いドアを開けると、中は意外にもミュージアムというよりお土産屋。キーホルダーや各種のプレートなど、ホームズものの小物がところ狭しと並べられている。しばし眺め廻してから、ツバが前後にあるあの独特の鹿鹿帽を買う。

ホームズが世に出て百二十余年。日本のファンはもうあらかたここに来てしまっていて、最も遅れた訪問者で

あろうが、そんな事はともかく念願かなって大満足。ここだったのか。こういうところだったのか！ホームズが住んでいたのは！

ところでホームズと相棒ワトソンの部屋はこの二階にあったはずだ。今は土産物屋に変じたこのフロアはハドスン夫人の台所と食堂であつたろうと思われる。当然二階の居間の様子が見たいし、調度品も見たい。

ホームズの研究書によると「一九五七年十二月二十八日、トラファルガ広場の近く、ノーザンバーランド・ストリートの一角に酒場シャーロック・ホームズが開店した。ここはただの酒場でなく、ホームズに関する多くの資料が集められ展示されているほか、ベイカー・ストリート二二一Bの部屋の模様がそっくりそのまま再現されている」とある。

となると次はここに行かねばならない。地下鉄を乗り継いでチャリング・クロス駅へ。パブ・シャーロック・ホームズは中級のレストランでお世辞にも上品、シック、立派とは言い難かった。しかしホームズ・ファンなら毎日でも通いたくなること受けあい。ホームズが事件

解決にあたったゆかりの品々が壁一面に飾られているし、一番奥まったテーブルの隣は再現されたホームズの居間になっている。

ほぼ満員の客はこの一種異様な雰囲気の中で嬉しそうに食事を楽しんでいる。ビールと「コナン・ドイル」という肉料理で乾杯！

さてシャーロック・ホームズは何時もロンドン警視庁を小馬鹿にしていたが、あのスコットランド・ヤードは何処にあるのだろうか。地図で探すとウエストミンスター寺院の近くにニュー・スコットランド・ヤードが見付かった。

ほろ酔い機嫌でそこを訪ねる。ガラス張りの比較的新しいビル街の一角に目的のロンドン警視庁はあった。やおら鹿猟帽を被りなおして立ち番の警官に近づく。

「俺はシャーロック・ホームズである。歳をとつてオールド・スコットランド・ヤードの場所を忘れた。」

若い警官は破顔一笑、こちらの地図に現在地とオールドの場所を示してくれる。

警官は今もホームズには一目置いていようだ。

戦後教育の問題点

玉山 和夫

聞く所によると、戦後の中学・高校では昭和時代の歴史を教えないという。日本史の授業は一年間では時間が足りないとして、終わりの方は端折って、徳川時代か明治維新位までしか教えないらしい。

それで生徒が困らないのは、高校・大学の入学試験には日清戦争、日露戦争や、大東亜戦争などに関係する問題が出ないからという。生徒は戦争に敗れた日本が将来報復戦争を仕掛けないよう、連合軍が占領政策によって日本人を洗脳したことは知らない。

これらの戦争についての入試問題を出したとすると、国内にある色々な圧力団体のいくつかから激しい批判を受けることが予想される。入試問題を作る先生方は、非難を受けることを避けるのである。

ところが次のような問題が出たとすると、あなたはどれを正解とされますか。

日本が一九四一年に米国・英国と戦争を始めた主な理由を次の中から選べ。

イ) 日本が大東亜共栄圏として東アジア全域を領土にしたいと計画した。

ロ) 東南アジアの原住民が白人の搾取を逃れ独立したいと日本に助けをもとめた。

ハ) 日本はドイツと協定を結んでいたので、それを実行するため。

ニ) 米国が英国を助けるために、日本を挑発した。

ホ) 米国が中国の蒋介石政権に軍事援助をしていて、すでに米軍人が日本軍と戦っていた。

ヘ) 国際コミンテルンの策略にひっかかった。

ト) 戦闘一途の軍人が国の実権を握った。

この七項目はどれも見方によっては正解とされうる。

先般失職した航空幕僚長の意見は(ヘ)に近いと見られるように、色々な意見があるのは当然だが、筆者は(ニ)が正解だと考えている。

第二次世界大戦は一九三九年ドイツがポーランドに侵

入したので英国も宣戦布告して始まった。翌年ドイツが西方に電撃作戦を行うと英仏軍はもろくも破れ、英軍はダンケルクから辛うじて本国に脱出した。英国のチャーチル首相は英国単独ではドイツに勝つことが出来ないと痛感して、米国が参戦するよう画策した。

米国は議会が承認しなければ参戦できないが、議会は伝統的に孤立主義が強く、米大陸以外に派兵する事は反対であった。それで米国を参戦させる唯一の方法は日本に米国を攻撃させることだった。米国が攻撃されれば自衛のため議会は開戦を承認せざるをえない。

ルーズベルト大統領は英国びいきだったので、資源の少ない日本にたいし屑鉄と石油の輸出を禁止したのをはじめ、ハルノートなど執拗に挑発を行った。石油を止められると日本は一年も経たないうちに軍艦も飛行機も戦車も動かせなくなる。戦わないで破れるより死中に活を求めて、日本海軍はハワイの真珠湾を先制攻撃した。

ハワイは米国の領土であるから、「真珠湾を忘れるな」と米国は日独に宣戦布告した。もし日本が石油の確保のためにオランダ領のインドネシアの油田を占領して

も、米国は参戦しなかった可能性がある。正に日本は英国の策動に同調した米国に挑発されて、敗戦への道を歩むことになったのであった。残念ながらこの事実日本ではあまり知られていない。

戦後日本を占領していた米国にとっては、米国が日本の参戦を挑発したと認めたくなかったのは当然で、占領政策によって日本の歴史が歪められた一例である。前記の意見は英国人少将との共著の本に書いたが、英国人にとつては米国を戦争に引きずり込み、勝利に導いたチャーチル首相の功績は大きい。

ところでどうしたら中学高校で昭和史を教えるようになるかという、なかなか難しい。新しい歴史教科書が作られたが、猛烈な反対運動が近隣の国まで巻き込んで起こって、採択している学校は僅かである。

やつと考えた案は、共通一次試験に戦争に関係ない昭和史を出題することだ。そうすれば高校では昭和史を教える。昭和史を教えれば戦争は避けて通れない。

参議院制度の改革を望む

鳥海 博

最近の政治動向を見ると、政策よりも政争が表面に出て、国民の必要としている政治が行われない傾向にあるのは、誠に憂慮に耐えないところである。これも元を正せば、衆・参両院の振れに遠因がある。この振れに至る経過を簡単に振り返って見ると、

平成十七年九月の衆議院議員選挙は、郵政改革の是非がその焦点であったが、自民党が圧勝し、三分の二以上（六十八％）の『圧倒的多数』の与党派議員を生み出した。（与党が三七議席（自民党が二九六議席・公明党が三十一議席）で、民主党が一一三議席。民主党は選挙前の一七七議席から大幅減）。

この二年後に行われた平成十九年七月の参議院議員選挙では、その争点はいくつかあったが、「社会保険庁のずさんな年金管理体制」が世の非難を浴び、「年金給付

の問題」や「年金保険料の徴収問題」でも与党は窮地に追い詰められ、また、景気の上昇につれ現れ出した「格差問題」や、相次ぐ大臣の不穏当発言などが、野党の絶好の餌食となり、自民党は大敗してしまった。（総数二四二議席の内、非改選議員を含め、与党一〇三議席、民主党等の野党が一二九議席）。

良識ある選良である両院議員諸侯であるから、徒らに数を持つて自派の主張・法案を通そうということでもないとは思ふものの、結果的に見ると、衆議院で可決しても参議院では否決される（and vice versa）、重要案件であればあるほど、こういう事態がここ一年半の間に何度も繰り返されて来たのは事実である。この原因は、憲法の規定上、衆参両院の権限に、さしたる優劣の差が無いからである。

憲法の規定を簡単におさらいしておくと、衆議院が参議院に勝る権限としては、予算の先議権乃至は議決権、条約の承認権、内閣総理大臣の指名権などであるが、こ

れらが与野党間の振れでそんなに悪影響を及ぼすことは無い。またもう一つ、内閣(総理大臣)と国会との関係であるが、内閣不信任決議は、衆議院のみで行えるが、不信任された内閣は総辞職するか、衆議院を解散して民意を問うかの選択を迫られる。これは内閣と衆議院の緊張関係の表れである。裏返しに考えると、参議院には解散が無いということになる。

問題は、法律の制定権である。

『衆議院で可決し、参議院でこれと異なった議決をした法律案は、衆議院で出席議員の三分の二以上の多数(以下本稿では『圧倒的多数』という)で再び可決したときは、法律となる。』(憲法第五十九条第二項)

形の上では、ここには確かに衆議院の優位性が見られる。参議院で否決された法律案は、衆議院で三分の二以上の多数で再議決すれば法律として成立するからである。現在の衆議院議員の政党バランスから言えば、与党は圧倒的多数を占めているから、必ずその法律案を通すことが出来る。しかしながら、参議院選挙の方があとで行われたが故に参議院の方が民意を反映しているという

ロジックで押し捲られると、衆議院で圧倒的多数を保持していても与党は無力である。ましてや、過去を振り返って見て分かるとおり、衆議院で与党が圧倒的多数を保持するのは「たまたま」であって、普通は過半数程度の多数ということが多い。となると、参議院が野党多数となった場合には両院の意志が食い違う可能性が高く、かくして日本の国会は何にも出来ない恐れがある。

これ、将に制度欠陥である。今までこの制度欠陥が表面化しなかったのは、参議院の政党バランスが衆議院のミニチュア版であったからである。これは早急に直さないと、国会の機能が麻痺してしまう。

翻って現行の二院制について考えてみよう。記録によれば、戦後新憲法を制定するに当たり、一院制か二院制かが識者間で議論され、一院制案も無くは無かったが、結局、今のような衆参両院制が採択されたのであるが、明治憲法の二院制が形的には踏襲された訳である。ただ、戦後は貴族制度がなくなったから、貴族院に当たるものは参議院という呼称になった。そして勿論、議員資格は、貴族院時代の非公選(勅撰)では無くなり、全て

選挙により公選されることになった。ただここで注意すべきは、議員資格における衆議院と参議院との違いが、それほど明確ではないことである。被選挙資格が二十五歳と三十歳、任期が四年と六年、解散の有無、この程度の相違である。この制度が字義通りに運用されれば、両院が政争の場になりうる必然性を持っていることである。

戦後この制度が作られた時に、暗黙のうちに想定されていた両院制度というのは、我々が戦後の小・中学校で教えられたように、参議院議員には、政党の利害と離れた（を超えた）人物を選ぼうという思想である。参議院に期待されているのは、言うところの「良識の府」である。戦後第一回の参議院選挙では、政党に属さない、いわゆる無所属議員が一〇八人と最大数を獲得し、議会開催時には、院内会派として「緑風会」が出来ている。

「緑風会」は、衆議院とは一線を画した、不偏不党の統一会派を作ろうとする機運に乗ったもので、将に政党色を嫌ったものである。つまり、党利党略や政争を超えた是々非々を旨とし、政治政党のような党議拘束を設け

ないなど、目先の利益ではなく、長期的・歴史的展望のもとに、衆議院の動向をチェックする役割に徹していたといえる。戦前にあった「貴族院」の影響があったとも言われているが、制度的には極めて妥当な両院の棲み分けであった。ところが時の経過に連れ、参議院がすっかり政党化してしまった。こうなると、両院制度のレゾン・デートルが全く消えてしまつて、「数の論理」のみが表面化してくる。

結語

両院制度を存続させるなら、両院の性格の違いを浮き立たせるような改正が必要である。例えば、「参議院の権限を縮小させる」ことも考えられる。政治は衆議院に任せて、参議院を衆議院の諮問に応じる機関にしてしまうこともあり得る選択ではないか？ また議員資格に関するの改良は、これは絶対に必要である。

思いつくままに書き並べるなら、

「（地方自治を尊重する意味で）地方区議員は都道府県議会が推挙する」

「被選挙資格を五十歳以上にする」・・・ある程度の人

生経験を要する仕事と考えて。

「議員は然るべき機関の任命制にする」

「元総理大臣とか衆参両院議長、最高裁判所長官などはみんな自動的に参議院議員にする」

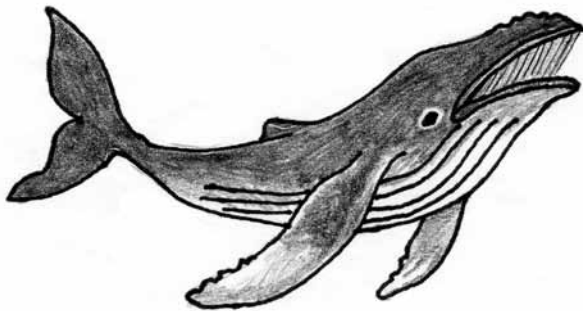
「終身とする」のも一案であろう。選挙があると、議員はどうしても次回の当落を気にするから、選挙民の顔を思い浮かべ、思い切った意見が言えず、また長期的展望に立った施策などが出来なくなる。選挙の洗礼は良し悪しである。

やや冗談めくが「試験（IQテスト）を行う」なども如何であろうか。

ところで参議院という名称に関してであるが、「アメリカの上院」は、その正式名称は元老院（United States Senate）であり、「上院」は俗称である。日本でも参議院をやめて元老院にしたらどうか？

最後に、些か乱暴な意見ではあるが、「参議院など、やめちゃえ！」という声も結構聞こえてくる。上述したように参議院に政党政治を持ち込むなら、確かにこれは「屋上屋」を重ねるの愚に等しく、両院制度はムダであ

る。憲法制定後六十年、原点に返って、奈辺も検討課題であろう。



「昭和二十年」

中川路 明

昭和十六年、日本軍が太平洋の島々に進撃したのは僅か六か月間。その後全域で連戦連敗、敗色の濃いなか、昭和二十年を迎えた。我が家では、父は勤務する軍需会社が忙しくほとんど在宅せず、母は病床に臥せていた。長兄は結核療養で父の生地鹿児島に転地、次兄は海軍兵学校在学中。私と妹は共に勤労働員に通い、夜は笑い声の少ない寂しい日を送っていた。

昭和十九年空襲が始まり、鹿児島で卵と野菜に恵まれ新鮮な空気を吸い回復した長兄が帰宅し、母の看病をした。長兄は力強く肥え、私と妹は旋盤工と組立工の毎日、疲労と空腹で生気がない。隣近所の人と相談し、焼け出されても雨露を凌げる二間四方の防空壕を造った。

昭和二十年二月に入り、空襲警報発令のたびに、長兄が母を抱いて壕まで運んだ。東京に続き三月に四百機による夜間空襲を受けた。満天を花火のように赤い尾を

曳いて、ザーッと音を立てゆらゆらと焼夷弾が落ちてくる。壕を出て家の中を見て周り、玄関先で一発見つけ、鳶口で掻き出し、壁板が焦げただけで助かった。

五月、六月は昼間空襲で、神戸の東西に細長い地形が絨毯爆撃に適し焼き尽くされた。幸い我が家は山寄りにあり戦災を免れる。神戸空襲は百三十回を超え、以降は艦載機により、電気、水道、ガス、交通が徹底的に破壊された。七月には通勤もできず、甲子園浜に上陸する米軍を想定して、敵戦車への穴に潜む自爆や竹槍と、生きる望みのない迎撃訓練に参加しつつ敗戦の日を迎えた。

八月十四日の夜遅く帰宅した父が敗戦を伝えた。「明日からどうなるかわからない。いろいろ噂する人もいるが、アメリカ軍は決して乱暴しない。世間が落ち着くまで家を出ないように」と、安堵の表情で家族を諭した。父親も数日で残務整理から解放され、まず食糧確保が大仕事と裏の空き地に菜園を作った。農家育ちの父は自信があり、「落ち葉の堆肥を入れるから五十センチは掘れ」と指揮し、暑い中、妹と「畝作り競争だ」と応じた。

ある夜家族を呼び、「今夜は家族麻雀を教えてやろ

う」と父が納戸から秘蔵の麻雀牌の箱を出してくる。

石油ランプの炎を一杯に上げてゲーム規則を手に、「チー」、「ボン」と我が家は久しぶりに賑わった。

御影から四つ先の駅近くに、松林で有名な武庫川が流れている。戦争末期、航空燃料用の松根油の採取で、松は全部伐り倒された。敗戦で無残に放置された直径一メートルを超える根塊を父たちが払下げを受けた。父と兄妹四人で、鉋と鋸を使って細分し大きなリュックに詰め、阪急電車に乗って運んだ。「重たいのに大変やなあ」と同情する人、「どこで許可を貰ったん」としつこく訊く人など、燃料に困っている乗客たちに囲まれた。燃料の自足ができ漸く安心した。

父は鹿児島に芋を送るよう頼んだからとヤミ米の買出しは許さず、ひもじい日が続いた。救いの神が現れた。父がかつて在米中に親しくしていた友人から、段ボール箱一杯のメリケン粉が届いた。早速、粉と重曹を水で捏ね木箱に詰め、両端に金属板を挿し込み電気を通し、やっと苦いがパンらしいものが焼けた。水分量の加減、電圧の調整と私は得意の実験を重ね、「うまいっ」と家

族中の喝采を受けるパン作りに成功した。

軍需会社幹部の父が公職追放され、苦しい家計を余儀なくされたが、父は毎日閑で本格的に菜園作りに取り組んだ。肥料確保に水洗でない汲み取り式の便所小屋を建てる。九月を迎え学校、ラグビー練習が始まって、唯一の栄養源と時間を惜しんで手伝った。

十一月になり、鹿児島で敗戦の絶望から気持ちを立て直した次兄が帰ってきた。軍学校生に比べ、勉強ができず、不健康な粗食が続いた自分の学生生活に、憤懣やる方なかったが、家族全員が元気に揃ったのはこの上ない喜びだった。暮には、父の再就職が決まり、子どもたちは勉強と運動にそれぞれ戦後の道を歩き始めた。

このように昭和二十年は、前半の空襲の危険と後半の飢えの生活不安に対し、外に頼ることなく家族全員で力をあわせて立ち向かっていた。

すでに家族が皆黄泉に旅立ってしまった、今一人しみじみと振り返ると、当時は幸せと思っていたが、昭和二十年は、家族にはかけがえのない貴重な日々だった。

十一月、さむらいの月に

橋本 政彦

菊の白さに、冬の近さを感じます。この時期になると、先輩から「菊が咲いた。取りに来て」との電話があり、白、黄、薄紫の菊の鉢を頂きに出向きます。預かって、玄関脇に置いて愛でています。それを見ていると、晋末宋初の詩人、陶淵明（三六五―四二七年）の帰去来辞の一節「三逕就荒 松菊猶存」を思い出します。訳は、「邸内にある三つの逕は荒れているが、松の操は緑をたたえ菊の花は燦として露霜の中に咲き誇っていた。これらは世の浮沈、榮枯盛衰に関わりなく誠をあらわしている」とあります。詩人、淵明の感慨を思い、人の世の来し方、これからの行く末が思われるというものです。

二〇〇八年、今年も十一月となり残すところ二ヶ月となりました。そこで十一月に因んだ、歴史的事件を拾ってみました。一八六七年十一月九日、この日はどんな日だったのでしょうか。記録を紐解くと、この十一月九日

は旧暦の十月十四日で、第十五代、最後の將軍徳川慶喜が、明治天皇に統治権の返還を行った、大政奉還の日に当たります。一六〇三年に、家康が征夷大將軍になって以来、約二百六十年にわたって連綿と続いた江戸幕府がついに滅びた日でもあります。この日から、明治維新に向けて国内では幾多の内戦、改革が続きました。ですから、この日を新生日本の始まりの日であると言っても間違いではなさそうです。一九〇八年、キリスト教思想家、無教会主義を唱えた内村鑑三（一八六一―一九三〇年）は、一八九四年に発刊した「代表的日本人 (Japan & the Japanese)」の改訂版を出版しています。そこには、五名の人物が描かれています。最初に、新日本の創設者として西郷隆盛、二番目は行政改革のモデル上杉鷹山、そして二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人と続きます。明治維新につき、「ある意味で一八六八年の日本の維新革命は、西郷の革命であつたと称してもよい――」、「西郷の生涯のこの時期（最後の時期）を歴史が解明できるのは、まだ百年先のことでしょう」などの記述があります。西郷の目指した文明の定義とは、「文明とは正義のひろく行わ

れることである。豪勢な邸宅、衣類の華美、外観の壮麗ではない」との紹介があり、彼のいう意味での文明は、ほとんど進歩を見せなかったのではないかと内村は指摘しています。最近は経済的、金銭的価値を至上とする価値観が日本に蔓延しているかに見えます。果たして経済的価値の占めるべき比重は、われわれの人生、社会生活において、どの程度であるべきなのか、ここで今一度立ち止まって熟考する時が来たようです。世界の大激動が日本を襲った明治維新の時期は、今の日本の状況とも重なります。「士は利を以って移らず たとえ窮するも義を失わず 達するも道をはなれず 知己の為に死す」の思想は、成熟社会の今こそ検討に値する価値のようです。

この十一月、海の方こう米国では、民主党のバラク・オバマ上院議員が圧倒的な得票数で、共和党のマケイン氏を破り、米国史上初の黒人大統領に選出されました。武力行使を重視したブッシュ政権の政策が新政権でどう変わるのか、深刻度を深める米国発の世界経済危機をどう収めるのか、世界は注目しています。十一月十四日、金融と世界経済の安定を討議する緊急首脳会議G20が、ワ

シントンで開催されました。アジアからは日本、韓国、中国、インド、インドネシアの五カ国が参加しました。参加五カ国の総人口は三十億人で世界の四割、GDP総額では二割以上を占めるのですから、アジアのプレゼンスは以前と比べ大きなものであった筈です。二十年前の東西冷戦終結から、世界は米国の一極支配が顕著となり、経済面ではグローバリズムが世界をリードし、規律なき金融拡大路線が今日の破局へとつながりました。G20緊急首脳会議は、基軸通貨体制を含めた世界の新経済秩序を構築する切っ掛けとなる会議と位置づけられます。これから紆余曲折を経て、「アジアの時代」がより鮮明となり、その姿を目にするようになると期待されます。米国の急激な信用収縮が、どのような負の連鎖を当面の世界に与えるのか種々の予測がなされていますが、我々には、来るべき新世界秩序に対応するCommunication SkillとGlobal Standardの知識を磨く地道な精進、努力が求められます。十一月は、「君子財を愛す、これを取るに道あり」を思い出す格好の月となりました。冬將軍の到来も、いよいよこれからが本番です。

遠い夏の日

濱田

優ゆうたか

見渡すかぎりの青田の海に村里の島々が浮かぶ。

庄内平野を流れる最上川の支流のほとりで、ぼくは釣り糸をたらし川面の浮子うきを見つめていた。

横には麦わら帽子をかぶり、タオルを首に巻いた「じいちゃん」がしゃがんでいる。じいちゃんは、ぼくが幼いときに〈おじさん〉といえなくてそう呼んだのだが、大きくなってもなかなか呼び名は変えられない。彼も、小学校高学年になったぼくを「ぼう」と呼ぶ。〈坊や〉のつもりだ。

はた目には伯父・甥に見えるぼくたちだが、じつはそうではない。彼が長いこと赤坂のぼくの家に下宿しているうちに、親戚付き合いをするようになったのだ。東京で生まれ育ったぼくは、毎年のように夏休みになると、故郷の代わりに彼の家に遊びに来た。

じいちゃんの浮子がスーッと引きこまれ、大きな魚が

掛かった。それまで仏頂面していた彼の顔が弛んで、竿を立てる。緑色の濁り水の中で魚の白い腹が踊った。

「ぼう！ たも」といわれて、差し出したたも、網に大鯰が掬い取られた。ぼくが鯰と対面したのはその時がはじめて。頭でつかちで口が大きく、不恰好ながらユーモラスな姿が妙に印象に残った。

朝ご飯のあと、日差しがあまり強くないうちに、二、三時間川釣りを楽しみ、家に戻ってお昼ご飯を食べながら午睡をする。

一眠りした後、屋敷の裏の小川で泥鰌取りをした。まだ田圃に農薬を使うことが少なかった頃、目の細かい網を張って上流側から追込めば小さな泥鰌がいくらかでも取れた。泥を吐かせて味噌汁にする。

田舎の暮らしは、都会っ子のぼくには物珍しいことが多くて面白かった。なかでも便所は変わっていて、庭に立派な厠が建っている。そこまで行くのは、夜は怖い。冬は寒いだろう。それで裏の土間に簡便な小用の壺が埋めである。ある夜、ぼくがそこにおしっこに行くと、お婆さんがぐるりとお尻をまくって器用に立小便をしてい

るではないか。ぼくはびっくり仰天したが、お婆さんは平氣な顔で話しかけてきた。

じいちゃんの家は、その昔余目あまるめの中心街に位置した衣料品店の大店おだなだった。だが、鉄道の開通とともに繁華街は駅前に移り、駅に遠い旧商店街は人通りが減って見る影もなくなった。彼の身内でも駅前に店を出した分家の方が羽振りがよくなり、本家はしだいに衰えた。

ただ、じいちゃんは三男坊なので、商業学校を優秀な成績で出ると大手銀行に就職し、上京して独り立ちする。戦時色が募りくる時世ながら、「人生最良の日々」と、彼があとから述懐した青春時代をしばし謳歌した。

そのころである、彼がぼくのうちに下宿していたのは。上京してから下宿先を転々と変えた彼が、どういうわけか、素人下宿を始めたばかりのうちに居ついた。わがままで氣難しいじいちゃんを自分の息子のように扱い、ときには手厳しいお説教をしたりした母の応対が却ってよかったのかもしれない。

彼はぼくを殊の外かわいがってくれ、幼児のぼくも彼

になつた。母には「どんなに苦しくても、ほうを大学に入れるように」と説いていたそうだ。自分の銀行勤めの経験を踏まえてアドバイスであろう。

自由な身だったじいちゃんの運命は、戦後まもなく急転した。兄たちの戦死や病死で、急に本家の家業を継がざるを得なくなったのだ。三十を前にして急遽余目に戻り、人生の後半は生家の重荷を背負って苦闘を続ける。

因習に縛られ、傾いてもなお本家の体面を保つのは辛いだろう。はやらない店の番をするのは奥さんに任せ、自分は将来性のある事業を起こそうと何度か試みたがうまくいかず、心楽しまない日々を送っていたようだ。

ぼくがそこにいる間、忙しい仕事を休んで遊んでくれた、とばかり思っていた。が、今顧みると、ぼくがじいちゃんの鬱屈を癒す相手をしていたのかもしれない。そういえば、大鯰を取り込んだときにぼくに見せた笑顔は、彼が東京にいたころの懐かしいそれだった。

旧懷の情にやる方ない思いが塗り重なる、夏の日の思い出である。

近代化と経済発展

浜田 道雄

一九七〇年代の初め、わたしは在タイ日本大使館に勤務していた。米国がベトナム内戦で苦戦していた時期である。そのころのタイは米軍の北爆の基地として、また兵站基地として、多くの米兵や米軍機関を駐留させていたが、そのなかには、東南アジア諸国への共産勢力の浸透を防ぐため民生・経済の分野で、これらの国々を支援する経済協力機関も多かった。

USOM（今日のUSAIDの前身だろうか）もそんな機関の一つであり、タイではおもに東北タイの農村部で農地改良、灌漑、農業技術改良などの事業を行っていた。

あるとき、わたしは知り合いになったUSOMの農業技術専門家の一人に「東北タイの農村で、どんな援助をしているのか」とたずねたことがあった。

すると、彼はニヤリと笑い、「いま、我々の間にこんなジョークがはやってるんだ」といって、話し出した。

「ご存知のように、イサーン（タイ東北地方）は五月から九月までの雨季にしか雨が降らない。十月から十一月はメコーンの洪水で田畑も街も水浸しだ。だから農作業は五月から九月までしかできない。乾季や洪水の時は、街に出稼ぎに出るか、家でゴロゴロするしかないんだ。

それで、わたしたちは彼らに農業改良事業をもちかけた。『まず灌漑施設を整備し、雨季に排水を良くして水を溜め、乾季にその水を使って、土地に適した作物を植えよう。そうすれば、一年中農業が出来るし、作物を市場に売れば、収入も増える。みんなの生活もよくなる』と。

すると、彼らはこう訊くんだ。『生活がよくなるって、どうなるんだね？』って。

『収入が増えれば、家には電気も引けるし、水道も引けて、近代的な生活が出来る。家族と離れて、街でつらい出稼ぎをしなくてもいい。休みの日には家にいて昼寝もできる』っていつてやると、

『わしらは、むかしから天候にあわせて米を作り、池や川で魚を掬い、家の周りの野菜をとって食べている。貧乏かもしれないが、食うには困らない。現金がいる時だ

け街に出て出稼ぎするんだ。農作業だって、朝や夕方の涼しいうちにやって、暑い昼日中は昼寝する。あんなたちがいう近代的な生活っていうやつは、いまの俺たちの生活とどこがちがうかね？」っていつて、ハンモックにはいつて昼寝しちゃったんだ」

彼はそういうと、肩をすくめて、「タイはこんなところさ」とつぶやいた。米国の意図するような民生安定事業になかなか乗ってこない、タイの農民へのいらだちが、彼らの間にこんなジョークを生み出したのだろう。

だが、タイのその後は、この農民のいったようにはならなかった。ベトナム戦争の終結後、「インドシナ半島を『戦場から市場へ』変える」と叫んで、経済成長に邁進したタイは、「近代化」に成功して、経済発展の優等生となり、都会では欧米型の豊かな生活を実現させた。

経済発展に伴って、市場経済の波に巻き込まれた農村もまた「近代化」した。多くの換金作物を栽培して、街の市場だけでなく、遠く外国にまで売りさばくようになって、現金収入は増え、農民の家々にもテレビ、冷蔵庫、ピックアップ・トラックが必需品になった。

しかし、いったん手に入れた「近代的な豊かな生活」は、もはや彼らを木陰で昼寝させてくれたりはしない。豊かになればなるで、いつそのの便利さ、豊かさを求めて、人々は狂奔する。ラジオを持てばテレビを、冷蔵庫を持てばクーラーを、ピックアップやモーターサイクルを持てばこんどはセダンを、もっと豊かな生活のために買わねばならない。そして、それを買う現金を求めて、農民は農作業を女房や年老いた親たちに任せ、アラブ諸国や日本、台湾までにも出稼ぎにでかけるようになった。

農村には若者たちの姿はなくなり、出稼ぎにでていった息子や娘からの仕送りで、預かった孫たちの世話をし、ほそぼそと農業をする老人たちだけになった。

もはや、そこには、暑いからと木陰で昼寝し、涼しくなったからといって田に出て働く、ISOMの専門家を困らせた農村の「自然で、豊かな生活」はどこにもない。

「近代化」は人間にとつて何なんだつたのか？ 先進国が途上国に援助した「経済発展」は、本当に人々の生活を豊かにしたのだろうか？

私には、答のない問いの一つである。

ロココ劇場のとんだオペラ

平尾 富男

ドイツ旅行滞在中の九月に「モーツァルト祭り」が開催されることを知る。演目がオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』というのも大いに関心を惹いた。会場はドイツ観光街道に指定されている「古城街道」沿いに位置する都市シユヴェッツインゲン。しかも、プファルツ選帝侯カール・テオドルが造った夏の離宮の中の「ロココ劇場」での公演である。モーツァルトとオペラの愛好家を自称する人間としては、本物のロココ様式劇場で観劇できるという好機を逃すわけには行かない。滞在日程を調整し、モーツァルトとロココ劇場に敬意を表して、ダーク・スーツと紐付の黒靴をスーツ・ケースに詰め込んで日本を出発したことは言うまでもない。

この離宮は、美しく整然と管理された七十二ヘクタールもの広大な庭を隣接させ、ベルサイユ宮殿に倣ったバロックの総合芸術作品の様相を現在も誇っている。奢侈

と芸術、特に音楽を愛した選帝侯が造った劇場は小さいながらも豪華絢爛である。かつて賓客として招かれたフランスの文学・哲学の巨星ヴォルテールも、その早期古典主義様式の幻想的な美しさに感銘を受けたと伝えられている。モーツァルトのオペラを演じるのにはうつつけではないか。

上演される『コシ・ファン・トゥッテ』は、特に二重唱やアリアが音楽的にも優れて美しいから大好きな作品である。内容が不道徳であるとして十九世紀を通じて評価が低かったらしいが、二十世紀に到ってやっと再評価され、今ではモーツァルトのオペラの代表作であると認識されるようになっていく。

当日開場までの二時間、広く美しい静かな庭園内を散策して期待に昂る心を落ち着かせた。いよいよ時間が来て劇場内に入り、黒の正装やスーツ姿の男性観客、肩を露にしたロング・ドレスの女性たちに混ざって席に着いた。ところが、目の前の舞台を見据えると何か違和感があるのだ。緞帳も暗転幕も開け放れた舞台上には、観客に後姿を見せたままの男女が六人、舞台の前面に身じろぎ

もせず立っている。男性の一人は黒の背広姿だったが、他の人物は派手なミニスカートの衣装の女性や、Ｔシャツなどの普段着姿である。舞台装置らしきものは、舞台背面の幕の前に六脚の椅子が置いてあるだけ。

やがて指揮者が登場して、小編成のオーケストラが序曲を奏で始めると、舞台に立っていた六人が一人ひとり舞台背面に向かって歩き出し、用意されていた椅子に座る。『コシ・ファン・トゥッテ』が始まったのだ。少なくとも音楽は聴き慣れた美しい旋律。序曲が終わると、件の登場人物たちが筋書き通り順番に歌いだした―椅子に腰掛けたまま。出番が遅い侍女のデスビーナ役はガムを噛みながら、真っ赤なミニスカートの下から伸びた脚を組み替えたりしながらいかにも手持ち無沙汰だという様子。この辺で、観客が少しざわつき始めた。

時代も衣装も現代に置き換えて演出された「超越」オペラだということは、今や誰の目にも明らかだ。入場の際に渡されたドイツ語の小冊子には、ここまでの演出のことは書かれていなかった筈だが。観客を驚かそうというのも演出の意図にあったのだろうか。

うら若い姉妹の恋人役、ナボリの青年将校二人が王様の命令で船に乗って戦場に赴くという、原作本来の場面では啞然とさせられる。突然に無線操縦の模型ヘリコプターが舞台上の空間に飛び回り、中幕の前面に降りて来たスクリーンにはベトナム戦争のニュース映画と思しき白黒映像が映し出されたのだから。

オペラが進むにつれ中幕が上がると、どこにでもある現代風キッチンが装置されていて、そこで舞台が進行する。イタリア語で歌うアリア、アンサンブルの間にはドイツ語が使われたり、なんと「とんだ」演出である。

そのうちに、主役二組の恋人たちが絡み合う場面での、由緒ある離宮の劇場に相応しくない余りにも行き過ぎた猥らな所作には、もう我慢が出来なくなった。観客からは大声でのブーイングこそ出なかったが、ふと顔を見合わせた隣席の老年の淑女は、慚然とした表情で首を横に振った。せつかく遠路はるばる来たのだからと思いつつも、意を決して途中の幕間に劇場を出ることにする。

モーツァルトも、豪勢な「ロココ劇場」を造った選帝侯も泣いているに違いないと恨めしく思いながら。

イスタンブールで逢ったある老人の物語

福島 弘毅

そう、もうだいぶ昔のことになる。町にある時ジブシーの女占い師がやってきたんだ。珈琲カップの底に残ったどろりとした滓を空けて、その形を見て占うという。町で評判だったが、わしは興味がなかった。ところが友達が来て、どうしてもその占い師のところに行こうというんだ。たつてもという親友の強い引つ張りに負けてとうとう行ったんだ。その女ジブシーはわしの前で、カップの底の珈琲滓をテーブルに空けて、その形をしばらく眺めていたんだが、それから話し始めたんだ……。

最初にわしはどのくらい裕福な人間かどうか聞いてきた。当時工場を幾つか経営していたし、財産も相当貯えていたが、パンを食うには困らない身分だと答えたんだ。そうしたら、いやいやパンを食うに困らないどころか、大変な金持ちだと言うんだ。女ジブシーはさらに続けた。それがとんでもない話だった。今は幸せかもしれないが、その幸福はあつという間もなく飛んでいつてしまふ。まず今持っている財産をすべて無くす。その次に家族とも別れ離れになり、牢獄に入れられるという。その牢獄の生活は悲惨で、一日に小さなパン一切れと水一パイントしかあてがわれない。体は痩せ細り、この小指のようにガリガリになってしまふ。それでも死なないうで長らえるというんだ。冗談じゃない、頭に來てしまったよ。だから占いなんか嫌だと言ったんだ。やつぱりこんな占いジブシーのところに来るのではなかったと思い、家に帰ったよ。その日一日嫌な気分だった。それがこの大戦の始まる三年前のことだった。だれも戦争がまた始まるなんてまるで思いもしなかった頃だったのだよ。戦争が始まって、あつという間に国はドイツに占領されてしまったのさ。最初にナチがやってきた。ナチがやったことはわしらの財産を片端から没収していったんだ。あの占い師の言う通りわしの全財産は取り上げられてしまった。そのうちに戦争の風向きは替わり、今度はロシアの兵隊が攻めて來た。あの赤の連中がやったことは、当時わしら上流階級の人間をみんな引つ捕らえて、牢獄

にぶち込んだんだ。毎日が地獄だった。来る日も来る日も責めと刑を受け、自白を強要され、改宗を強要された。わしゃ、しかし、自分の考えを変えなかった。だから牢獄から出されなかった。

ほんとにあのジプシーが言った通り、一日に小さなパン一切れと一パイントの水しかあてがわれなかった。この小指みたいに体はガリガリに痩せ細ってしまった。同じ牢にいた親友の元首相はある日起きてみると冷たくなって死んでいたよ。でもわしは死ななかった。死なないで長いこと牢獄の生活を続けさせられたんだ。そして何年も経ったある時、ついに牢獄から出されたんだ。牢獄から出されても、秘密警察に朝から晩まで付きまとわれ、何をするのも見張られた。全く自由はなかった。我々は共產社会の敵と見られ、何をするか見張らないと危険だと思われた。それでいつも見張りが嚴重についたのだよ。

国から出るより仕方なかった。パスポートを申請したんだ。何度も申請したが、発給されなかった。外国に行つて何をされるか分らないと思われたんだ。しかしわしは体も瘠せ衰え、老人になってしまった。何が出来る訳

じゃない。家族も国に残していくのだから、外国で悪いことは出来ない。どうかだから国を出させてくれと懇願を続けた。何年か経つてようやく、通行許可証を発行され、国を出ることが出来た。あちこちを流れ、やっとこのトルコにたどり着き今こうして生活しているのだよ。

本物の占い師はこの世の中にいるんだ。あのジプシーの珈琲占い通りのことが一字一句も違わず起こったのだよ。占い通り財産を没収されてしまった。家族と別れ離れとなり、牢獄に入れられてしまった。一日に小さなパン一切れと水一パイントしかあてがわれず、この小指のように瘠せ衰えてしまった。それでも長らえ、こうして牢獄から出され、家族と別れ、この国にやってきた。

もう人生も残り少なくなつてしまった。でも、あのジプシーの占い師が最後に言つた占いがもう一つあるんだよ。七十歳になるまでに、わしはもう一度自由を取り戻し、裕福な時を持つようになると言つたんだ。これまでの占いは一言一句その通りのことが起こつた。だからこの最後の占いも実現するとわしは信じている。その時が来るのを楽しみにして、こうして生きているんだよ。

ハナの生涯

古川 さちを

ハナというのは昭和初期九州の一農家で二十年間を生きた牝馬（ひんば）の本名である。馬籍簿には「駄馬・ハナ」と記されていても、その母親はサラブレッド系で、栗毛の体型は競走馬のようにスマートだった。目鼻立ちがよい上に性格もおとなしく、皆に可愛がられた。

その村では、各戸一〜二頭の牛を飼育して、農耕用に役立てるほか、繁殖による現金収入を得ている。働き手に余裕のある農家では、それに加えて馬の飼育もやっていた。農耕用や馬肥生産もさることながら、軍馬の需要が増えていたので繁殖用も有望だったのである。

よく知られているように飼育馬と家人は相性がいい。ハナとその家の長女・則子とは生年月が同じこともあり、特に仲がよかった。彼女が小学校に上がる頃ハナは立派な大人になり、およそ二年ごとに母親となる。規子が親身になって子育ての手伝いをするせいか、仔馬は毛

並みよく育った。

それだけに、仔馬の競り市でハナの子を手放すのを、則子は大いに悲しんだものだ。しかし、当然ながら一番悲しむのは母親のハナであり、別れを惜しむ鳴き声は聞くにたえなかった。ある年の競りでは、いつになく鳴き声が大きいと言われていたところ、夜中に厩の柵を乗り越えて逃げ出す騒ぎ。どうして道が分かるのか、競り市のあった十キロも先の公園をさまよい歩いていったものだ。

規子が小学校を終える頃には、次男幸二郎がハナの世話を引き受けた。人を乗せるのを嫌がり、乗馬には使えないと言われたハナが幸二郎だけは喜々として乗せるのだった。お陰で幸二郎は十歳にして乗馬を覚える。

ハナの主な仕事は荷物運びだった。農耕には飼育牛を使うので、それぐらいしか仕事がない。水車小屋の精米所に運ぶ粃や小麦、遠く離れた雑木林に取りためた薪の束がたまると、その運搬は農家にとって大事な仕事だ。

幸二郎はハナの背に積みつけた「荷」の前か後ろに、小さな身体をちょこんと乗せる感じで精米所や山と家の間を往復する。道の途中ハナがびたりと止まって進まなくな

るところがあつた。大嫌いな蛇の多い藪のある場所だ。

幸二郎は馬を降りて、その道を二十メートルほど往復してみせる。賢いハナは、襲う蛇がないことを悟つたのだらう、安心して先へ進んでくれるのだ。

県道に出て、たまたま自動車の音が聞こえるときも、幸二郎は下馬し、轡をしつかり掴んで車をやり過す。

子供たちが馬に親しみ続ける生活を営むうちにハナの年齢が二十歳にもなり、敗戦の年がやってきた。二十歳というと人間にしたら八十歳に相当し、大へんな老齢だ。

戦争末期、たまたま村に駐屯していた輜重部隊から駄馬の無償払い下げが受けられた。不要となるハナをどうするか。売り払うしかない。適当な飼い主があるという馬喰の言葉を信じて人手に渡すことになった。

ハナとの別れの日、新しい馬に心を移したように見える幸二郎は一見平常心だ。が、長女則子は違った。顔中を涙にぬらして別れを惜しむ。ハナの方も悲しみを共にして、眼が潤んでいたものだ。

その一ヶ月後、ハナは二十年の生涯を終える。大人たちは幸二郎に隠していたが、食肉用として屠殺されていた

のだ。姉からひそかに事実を知らされた幸二郎は悲しみに沈んだ。馬肉を人が食べることを彼は知らなかったのだ、何か異常な話を聞かされたように感じたのである。

あれほど仲良しで苦楽を共にした幸二郎とハナの関係は、人と馬のかかわりではなくて、人間同士に等しいように見えた。それが人に食べられたと思うと、世の中で最も気味悪い不潔な情景を見たように感じたのだ。

打ちひしがれたような幸二郎の姿を、大人たちは、戦争に敗れた軍国少年の悲しみだろうと勘違いしてくれた。が、そうではなかった。ハナとの別れは、彼の生涯で最も悲しい体験として記憶に残る。

戦争が終わり、平和な世の中になると、都会では牛肉、豚肉、鶏肉などに伍して馬肉もレストランの食卓に上るようになった。今や都会人となった幸二郎には、それがこの上なく汚らわしく思われるのである。彼にとつては、馬肉を食べる人が人肉を食べる畜生に見えるのだ。

幸二郎は今までに馬肉を食べたことがないし、これからも金輪際食べることはない。人肉を食べないのと同じ感覚なのである。

モンマルトル、ジャンゴ、外人部隊、犬

細谷 博

長年パリに住む昔の仲間からの定期便「フランス通信」を読んでいううちに、モンマルトルの文字が眼にふれた途端、私のタイムマシンが自動的にスイッチオンし、私を八十年代の夜更けのモンマルトルの丘に連れて行った。サクレクール寺院裏の広場は、昼間にはあれ程居た似顔絵描きたちも大部分は引き上げていたとはいえ、まだまだ食事やワインを楽しむ人でごった返していた。

翌日の打ち合わせの資料作りがやっと終わり、疲れた頭を休ませるには地理的に「高い」ところで気軽な酒を飲むにかぎると、モンマルトルの丘を登った訳である。

どこかの店にしようかとぶらついた挙句、調子の良いジャズが聞こえたレストランの脇にあるスタンドバーに入った。LPを客の注文でかける日本でも流行っていたスタイルのジャズバーで、これは当たりと早速オンザ

ロックのスコッチを乾いた喉に流し込みながら、今度は真面目に音を聴いた。

演奏は左手指三本のアコースティックギターの名手ジャンゴ・ラインハルトとジャズヴァイオリンの始祖ステファーン・グラッペリ当時（まだご存命で活躍中！）のクインテットであった。懐かしいダイナとか自作のジャンゴロジイなどの素晴らしい「乗りのり」の演奏に耳とグラスを傾けて陶然としているうちに、腿のあたりを何か生暖かいものがぐぐつと押して来るのに気がついた。はて面妖な。カウンターの客にはバリジエヌの姿はなかったはずだがと、腰のあたりを見ると、なんと大きな犬が親しげに体を摺り寄せて来ていたのだった。

驚いてこの犬の持ち主はと探そうとしたら、横の背が高く黒メガネの、骨ばつて、ごついのにどこか都会的でスリムな老人が「やー私の犬が失礼した。あなたはジャズがお好きなようですな。リズムを取っていた。この犬はそれが判るのですよ。あなたはこの演奏が気に入っているかな？」と聞いてきた。「ええ。ジャンゴ・ラインハルト。大好きです」すると老人は「いいや。違う。彼は

ジャンゴ・レナールだよ」と意外な答え。少し酔いが廻ってきていた私は一寸むっとして「彼はラインハルトですよ。 本当の天才です。日本にもフアンが結構居ります。レナールなんかじゃありません」

すると老人は振り向いて「なんと、あなたは日本人だったのか！ それじゃー無理もない。ジャンゴはベルギー系ジプシーだが国籍はフランスなので、彼の名をフランス語読みでレナールと呼んでいる。長い間の親友だったよ。お互い差別で酷い目にあった仲間だからね」と言つてレインコートのポケットから、やおら太いゴムバンドでくくつたいくつかの書類の束を取り出した。手探りで色もくすんだ古びたパスポート風の書類を抜き出し、私の目の前に剣を突き立てるような手付きで差し出した。「見てごらん。まだ目が達者なころの私だよ」。そこで初めて私は老人が盲目であることに気がついた。

大きな犬は老人の眼であり、アンテナであり、スポークスマンでもあったようだ。目の前に差し出されたレジマン・エトランジェ（外人部隊）のカルト・ディダン

ティテ（身分証）が私には初めてお目にかかるものにも拘らず、どこか親しいもののような気がした。開けてみると、中に貼つてあるやつと見分けられる程の古い写真は、まさにあの映画「外人部隊」の最後のシーン。熱砂の砂漠に向けて出征してゆく外人部隊を、マルレーネ・ディトリッヒがハイヒールを脱いでついて行つた、そのターゲットであつた部隊の下つ端の二枚目、ゲイリー・クーパーその人であつた。

それが時差ボケとアルコールの相乗効果のせいとは判つていたが、なんだかその幻覚が心地よく思えた。ジャンゴ・ラインハルトが、いやジャンゴ・レナールが奏でる、シルクのスカーフが躍るような感觸のギターサウンドから、いつの間にかコールマン・ホーキンスの大きく暖かく包むようなテナーサククスに変わつていた。

しかし沈黙の大きな犬のぬくもりから離れるのが心惜しく、時計の時間を気にすることをやめて、モンマルトルの夜が更けるにまかせていた。

太極拳教室を

松 谷 隆

私の七十歳は、二年後に「楊名時健康太極拳」の師範の免状を取得して始まる。その後はこの免状を生かしていく計画を立てている。

シリコンバレー駐在中に、初めて「太極拳」という言葉を聞いてから、十七年になる。自分自身が太極拳にのめり込むとはとても想像できなかった。ましてや、人生の目標の一つになるうとは。このようなことになったいきさつは以下のとおりである。

そのきっかけは、二〇〇〇年六月の区報にのっていた生涯学習講座の案内である。そのなかに「『楊名時』の気功・健康太極拳講座」があった。最初のコースは満員でだめ、しかし追加の土曜日コースにもぐりこめた。

最初の三カ月は、講師の説明内容もわからず、見よう見まねで、手足を動かすだけで終わった。しかし、練習が終わったあとの快感がなんともいえず、また面白さも

増してきたので、続けることにした。

翌年の暮れ、講師の勧めで「初傳」の免状を取った。

そのころから、この太極拳とは一生付き合えそうだが、将来教室を持てればいいなあと思い始めた。なぜなら、腹式呼吸を基本としているため、気がつかないうちに血流がよくなり、体調を整えられるからである。これを他の人に教えてあげれば役に立つと思えた。

その後、神奈川県支部が開催する研修会にはかさず参加し、技をみがきながら、毎年上級の免状をとりつづけ、五年目に助手として練習生を指導できる指導員になった。

そして将来、自分の太極拳教室を持ちたいとの思いがより強くなったのは、二〇〇五年の春先輩の準師範が交通事故で亡くなり、彼女が担当していた教室を師範から任されたときである。その先輩からは「将来立派な指導者になるため、お互い勉強しよう」と励まされてきたので、恩返しのため、お互い勉強しよう」と励まされてきたので、その夢を実現するため、練習により力を入れてきた。

二〇〇六年に「準師範」に昇級したので、太極拳の指

導員と自己紹介できるようになった。前年秋の指導者研修会に参加したとき、昼食時にとなりに座ったひとから「太極拳を始めて何年ですか」と聞かれ、「五年」と答えたところ、「えっ！五年で指導者？」とびっくりされた。この世界では、修業年数がものをいうことを痛感した。

今年九月には本部主催の全国指導者研修会兼師範審査会に参加した。いままでの支部の指導者研修会は昼食付きで無料であるのになんと有料、しかし、その分の勉強と師範試験受験の心構えができたのは幸運だった。

師範審査を受けるには準師範となつてから五年後と規定されている。しかし、支部からの推薦があれば、四年で受験できるとの内規があるとのこと。いずれせよ、本部あるいは支部に入会后、十年以上それなりの修練を積んでいなければ審査を受けられない。受けるからには必ず合格するとの確信を得たのは今回の最大の収穫だった。

さて、師範になつてから、どうやって教室を開くかが最大の課題である。現在の練習生は師範の教室に入った人たちなので、私からは誘えない。彼らが師範に断つて

くれば、話は別であるが、それも期待しない。すべてゼロから始める予定である。彼らを通じてのクチコミや練習場所のケアプラザでのPR、さらには神奈川県役所への売り込みを考えている。

「奥さまは健康太極拳で元氣はつらつ。あなたも負けずに、恥ずかしがらずに健康太極拳をしませんか。私のように」をキャッチフレーズにするつもりである。

幸い練習場所は、いままでのケアプラザを使わしてもらつてもいいのである。なにかボランティア活動をすれば無償で練習会場を借りられることになっている。いざとなれば家内に協力してもらうしかない。

次の課題はこの教室を生活の糧とすることかである。正直いつてそのつもりはないし、できっこない。自分の健康を維持するために、一緒に太極拳をやりたいというスタイルを守りたい。

故楊名時師家の健康太極拳の伝道師となり、私自身を含め家族全員の体と心の健康を維持しながら、教室を通じて練習生とその家族にも、健康太極拳の楽しさをぜひ伝えたいと考えている。

(二〇〇八年十一月記)

旅の愉しみ

三宅 劬

学生時代から山登り、スキーにはかなり熱中して、サラリーマンになってからも、若い頃は年休と土日を利用して年間四十一五十日位山へ出かけていました。責任のある仕事をするようになってからは、日数は少なくなりましたが、良く山登りを楽しんでいました。

七十歳まで現役サラリーマンとして毎日勤務して第二の会社を辞めて毎日が日曜日の生活に入り、老化防止のために、二人の学友が入会していた企業OBペンクラブに入会させていただいた他、いくつかの異業種交流会にも参加して、現役時代より多くの人々との交流の輪が広がっています。

時間は十分あり、多少の蓄えがあったので、退職後のこの十一年間は思う存分好きな旅をして歩きました。国

内も三―四泊程度の短い旅を数回していますが、今のところは、早春、初夏、秋の三回、延べ一〇〇日前後海外に出かけています。過去五十数回延べ三年余りの海外旅行は、一度シンガポールへ団体旅行で参加したほかはすべて、家内と二人での個人旅行で、航空券の購入、ホテルの予約などはすべて自分でやり、準備も旅の楽しみの一つです。

昨年七月に満八十歳になりましたが、何か思い出に残る旅をしたいと考え、四十年前、ポルトガル勤務時代に聴いたイタリアの古都ヴェローナの円形劇場での野外オペラを思い出し、スケジュールを調べると、誕生日に「アイーダ」の演奏があることが分かりました。ヴェローナの円形劇場のほか、ピサ近くの田舎村で七月にプッチーニのオペラが行われ、アマルフィ近くのワグナー所縁の村でワグナーのオペラが聴けることも分かり、三カ所で野外オペラを聴く旅を計画しました。

それぞれの場所付近には見所も多いので、われわれ二

人だけでは勿体ないと三カ所のホテルを三泊ずつ五部屋予約して、メールのやり取りをしている数十人の学友・知人に声をかけました。最初は七組の応募があり、ホテルの追加予約も考えましたが、最終的には三組、玉山ご夫妻、野瀬ご夫妻とペンクラブの方だけになりました。旅慣れた方たちなので現地集合、現地解散で、途中は自由行動で思い出に残る旅でした。

最も古い旅の思い出は一九六一年の最初の出張でチューリッヒに三週間余り滞在中、ホテルの支配人に誘われたウイーン国立オペラ劇場の最上席で聴いたカラヤン指揮のカルメンで、五十年近く経った今も鮮明に覚えています。

今年二月中旬のある日、毎日のように歩いているクライストチャーチの植物園で花の写真を撮っている欧米人と、持っているカメラが同じなので話し合いました。ワシントンDC近くに住む日本通の弁護士でその後三、四回メールのやり取りをしています。

昨年三月、日本へ帰る前日オークランドのホテルのレストランで隣にいたオーストラリア人紳士が「サッポロビール」と注文したのがきっかけで話し合いメールのやり取りもしていますが、二度も北大に交換教授として来られたメルボルン大学教授のWさんでした。

今年七月、三日間滞在したイタリアの聖地アッシジで、あるレストランから出てきた米国人夫妻と目があつて話し合い彼らが夕食をした裏通りのレストランは素晴らしいと聞きました。ご主人はイタリア好きの大学教授、奥さまは大手製薬会社の研究員で、翌日もまた郊外で会って写真を撮って送ってあげ、二、三度メールのやり取りをしています。

長らく旅をしているとこのような出会いが沢山ありますが、退職してこの十年余り、十五年程続いて参加している旅好きの若者たちと旅の楽しさを語り合う月二、三回の会合は年齢を忘れて楽しい一刻です。

B29を二機も墜とした話

山 縣 正 靖

昔の話である。義兄は江田島海軍兵学校の出身で、終戦当時は上海航空隊の若手戦闘機搭乗員をしていた。終戦の翌日にこれが最後の飛行と局地戦闘機雷電を駆って飛び立ち、日本男児ここにありと口惜しさを吹き飛ばす派手なデモフライトを敢行したまではよかったが、途中でエンジンが不調、市街地を避け、上海の真ん中を流れる河に着水した。命永らえた義兄は、定年後に特攻隊で逝った方々の生家を訪れてお線香を手向けて歩いていた。

その義兄が胃がんで逝って、この夏の七回忌に海兵同期の元航空隊員にお参り頂いた。お歳は八十四歳くらい、盃が進むほどに若き日の航空隊の話になった。

哲学の老先生のようなIさんは「私は水上機でした。

三座の零式艦隊偵察機です」

「三座だと巡洋艦のカタパルトから打ち出される時の衝撃は凄いのでは？ 助走なしですよね」と伺うと、「そ

うです。その時操縦桿を握っていると衝撃で身体がのけぞって機首が上がり失速して海中に落ちてしまう。操縦桿を放し脇の縄を握って耐え、打ち出されたらすぐ操縦桿を握り、そろそろと機首を挙げて上昇する。打ち出されたら、もう三人でひたすら決められた一〇〇〇kmの偵察進路を飛んで、帰りは動いている母艦を探して戻ってくる。途中で敵の戦闘機に出会ったらおしまいです」

Aさんは元気な方で、座を盛り上げてくださったが、「私は戦闘機乗りで、B29を二機墜としているのですよ。こう見えても戦闘はうまかった」

「飛行機は雷電ですか。それとも紫電改？」「いや、零戦です」（レイ戦が正調である）

「雷電は扱いづらい飛行機でした。高度九〇〇〇m位では日本の過給機が弱いので速度が落ち、翼が小さいからちょっとした拍子で右前のめりに落ちてしまう。零戦の方が安定していました」

当時のB29は高度一万mを悠々と飛んで来る。零戦は九五〇〇mが上昇限度で、いつもB29を取り逃がしてしまう。口惜しくて悲憤慷慨していたら、古参の整備士

が「分隊士、話があります。エンジンにある調整をすると零戦でも一万m以上昇れる。ただ、帰りの六〇〇〇m位でエンジンがおかしくなって事故を起こすので、その調整はご法度です。」と耳打ちしてくれた。「死んでもいいから憎つきB29を撃墜したい。私の責任で飛ぶから」と秘密で調整してもらい、飛んでみたら、零戦は安定して高度を上げてなんと一万五〇〇mまで上昇できた。

ある日その高度にいたら、基地から無線が入った。

「雀、雀。後ろにカラス」。雀は零戦、カラスは敵爆撃機の符牒である。後ろ下を見ると、高度1万mにB29がやって来る。しめたところと三六〇度旋回したらB29の後方上空の絶好の位置につき、そこから急降下して攻撃した。

「零戦の二十ミリ機関砲には八発に一発曳光弾が入っています。それが糸を引くように、B29の巨大な胴体に吸い込まれ、五十発も撃ち込んだところで、各所からバァーっと黒い煙を吹き出しました」

衝突しないように離脱して、魔の六〇〇〇mもうまくかわして基地に着陸すると基地司令が待っていた。ご禁

制の高高度飛行をやったのでドヤされるかと思ったら、「よくやった。何も云わん」とお咎めなし。下からB29が墜ちていくのを見ていたのである。

もう一機は名古屋で、今度は有効打を与えていたが、撃墜は未確認と報告しておいたところ、戦後に米軍が名古屋地区でB29一機が撃墜された当日の航空基地の戦闘記録を調べて、A中尉がやったと言ってきた。これで二機撃墜が確認されたのである。

「皆さんどうして一番危険な航空隊を志願されたのですか」

「あの頃は皆が死ぬことを覚悟していました。どうせ死ぬのなら、あつという間に死ねる飛行機が良い。潜水艦で海底に閉じ込められて、二日も三日も悶えて死ぬのはいやだった。それに霞ヶ浦からなら訓練中に、たまには故郷に帰れましたから」

当時、皆さん二十二、三歳の若者だったのである。こちらも、B29に乗っていた十数人も同じような若者が死を覚悟で戦い、生死を分かった時代であった。

水辺紀行（〇八年）

吉 寄 清 己

カンボジアの二月は乾季である。トンレサップ湖は東南アジア最大の湖で、乾季の面積はびわ湖の三倍、五月から十月の雨季は乾季の三倍に広がる。アンコール遺跡のあるシエムリアプ、町の中心を流れる泥水の川は湖に流入する。河口の両岸は、丸太と葉でつくられた高床の小屋が並び、内部は透けて見え、風通しはよい。漁民たちは寝泊まりしている。彼らは小さな漁船を操り、凄まじいエンジン音を響かせて湖に出て行く。鮎のような魚は、上流にある魚市場に水揚げされる。熱帯の炎天下、生の魚を素早く処理する人々で混雑している。魚は干物になる。

湖を遊覧するボートの料金は一名につき二十五米ドル、魚市場の横から出発する。遊覧客は欧米の人が多かった。乗船しようとする、大勢のものの売りの子供が駆け寄りうるさい。子供たちの皮膚は土埃で汚れ象の皮

のようになっていた。ボートは泥水の川を突っ走る。川中は狭いのには船が多く、エンジン騒音と物凄い波しぶきである。波の立つ川岸から投網をしている人は多い。

湖に出ると、水上生活の筏が見えてきた。筏はぎつしりと並び、水上都市である。水に浮かぶお寺、学校、警察もあるという。私らは観光ルートになっている沖合いの大きな筏に着き下船した。ここにはワニの水族館、高級魚ナマズの養殖いけす、レストラン、売店がある。私らは筏の二階に上り、休憩所のベンチから水上生活の家を眺めた。どの家も間取りが多く大きな筏である。野菜を栽培している。淡水の湖上生活は涼しくて快適であるだろうと思う。一階の船着場は、観光客を目当てに、子供たちが手漕ぎの小舟に乗りバナナを売りにくる。首に大きな蛇を巻きつけた男の子、洗たく盤に乗り演技する少年、写真をとると一米ドルを要求された。子供たちは学校にも行かず、生きるのに精一杯である。

近江八幡の水郷めぐりは新緑の五月に行った。四百年前、雅な宮中の船遊びに似せて豊臣秀次が始めたという。船頭さんは七十歳代の人たちで、最高齢は私と同じ

八十三歳である。遠回りコースは所要時間百二十分、私らは八十分の普通コース、一漕六人乗り八千六百円に乗船した。五百人が住むびわ湖最大の島、沖島から、東岸の一带は標高二百から三百メートルの山が連なり、内陸の安土山との間は湿地帯である。農民たちは水路を運搬路にして稲作をしている。水郷めぐりの舟は、田舟の通る水路をゆつくりと行く。櫓を漕ぐ音は聞えない。よしのうつ蒼と茂った狭いくねくね曲る水路を通れば、視界が広がり安土山を見渡せる沼も通る。気持ちよく舟に揺られていると、よしの陰から小鳥のかわいい声が聞こえてくる。せわしさは全くなく、静寂であつた。

カプリ島の青の洞窟はスリル満点である。ナポリの沖合四十キロにあるカプリ島は高速船に乗り五十分で到着した。カプリの港から洞窟を見に行く舟は、私の住む大磯のつり船と同じ大きさで、ツアー客二十九名が乗ると一杯になった。港を出た舟は波が荒く大揺に、女性たちは船酔いになる。二十分ほどして洞窟に着いたが、洞窟の入口は高さ二メートルもない小さな穴が開いているだけである。波の荒い入口の前で、小さな六人乗りの手

こぎ舟に乗り移り穴を通るのである。どちらの舟も上下に大きく揺れているから、乗り移るのは大変だ。その上困ったことに、七月下旬、欧州からの観光客は多かった。客は石灰岩でできた島に上り、手こぎ小舟に乗る順番を待っている。私らは海上で波に揺られながら三十分近く待たされた。船酔いの人はますますひどくなり、げえげえの人もでる。幸い私と妻は船酔いにならず、手こぎ舟に転がり込み、小舟の底に寝そべって姿勢を低くした。船頭は波の上下をみて、波が下った瞬間穴を通過する。洞窟のなかは真暗である。やがて小さな入口から差し込む光で海水の色はエメラルドグリーンに輝いていた。

ベネチアの運河めぐりは私ら老夫婦を貴族気分にくれる。高級装備の時価四百万円というゴンドラに乗り、世襲制度の着飾った漕者を従え、サン・マルコ広場と寺院、ドゥカレ宮殿を囲む狭い水路を遊覧する。光と色彩は豊かで絵画的である。大理石でできた家の勝手口、窓から屋内を垣間見て面白い。ゴンドラはひっきりなしに通る、カンツォーネの歌声も聞かれる。商売気のある中世の雰囲気であつた。

サプライズ

吉田 邦彦

マーストリヒトに住むコーリー夫人は三年前に夫リチャードを亡くしていた。(悠遊十三号記述) なつかしい再会が昨年の暮に実現した。きっかけは四年前、元氣だったリチャードとコーリー夫妻が日本にやってきた時、わが家の留学生マリーナを夫妻に紹介したことが発端だった。その時コーリーは自分達の二人の娘と同じ年頃のマリーナをすっかり気に入、機会があったら訪ねるよう氣を遣ってくれた。

そのマリーナは昨年三月、一橋大の大学院を卒業して母と祖母が待つベルリンに帰国した。八月にはデュッセルドルフの近くにある日本企業に就職が決まり、アパートも見つけた。

彼女の新生活ぶり、ドイツのクリスマス、そしてコーリーやヨス達との再会を楽しみに十二月初旬出発した。デュッセルドルフからマーストリヒトまでは列車で二

時間間程であった。私達二人にとってはなつかしいコーリー宅だが、マリーナにとっては勿論初めての地である。

家は旧市街のさらに中心部に位置する歴史的な石造りである。四階建ての三階は二人の娘の部屋だったが、現在在は二人とも家を出ているので、私達のベッドルームに用意されていた。冬の空はどんよりしていて、いかにもオランダらしい気候である。庭も懐かしく、りんご、なし、ぶどうの木など冬枯れであったがそれぞれ見覚えがあった。初めて訪問の時、庭を案内してくれたエリザベスは遠くコスタリカで生物学の研究者として活躍している。妹のカロリーヌはミラノのヒルトンにつとめていたが、今はヨス一族が経営するフィギ・ホテルのマーケティング担当としてヨスを補佐している。コーリーは彼女に明日会えるし、大きなサプライズもあるといった。

翌日、コーリーはここがはじめてのマリーナのために、市内を半日かけて案内してくれ、三時過ぎに列車でザイストに向かった。その列車が途中で故障し、別の車輛に乗り換えたりした為、ザイストに着いた頃は夕暮れ

であつた。その間、コーリーは何度もケイタイでザイストと連絡を取り合つていたようだ。やつとザイスト駅に着くやいなや、出迎へのヨスが荷物はそのままにして、すぐ隣りのスロット・ザイスト、つまりザイスト城に急いで行かなければならないという。

いわれるままに急ぎ足で行くと、城の前庭にはたくさんの車が駐車しており、人影も多い。入り口に着くと大勢の客でごった返していたが、二年前にわが家に来たテオ、ジョゼ夫妻が出迎えてくれ、頬キスを繰り返した後、一冊の小冊子を見せた。表紙にテオの全身写真があり、大きく六十歳とある。これがコーリーのいうサブライズの意味だとはじめて分かった。なるほどと、私達三人はあらためてお祝いの言葉を贈った。始めからそう言ってくれば、何か気の効いたお祝い品でも持ってきたのだが、あとのまつりになってしまった。こちらでも日本と同じ「還暦」祝いがあることが分かった。

会場に入ると、バンドが軽い音楽を奏でていて、ボーイがドリンクや料理の皿を器用に掲げて人々の間をかきわけ、サービスにつとめていた。

クラッカーを合図に乾杯が繰り返され、司会はヨス兄弟の二番目のジェラードの息子二人が代わる代わるつとめていた。当然オランダ語だったが、時折会場全体が爆笑するので、どうもテオの生い立ちや新婚当手を少しふざけてというか、茶化していたのではと想像した。やがて話が本日のパーティのことに及んだらしい。あちこちのテーブルにライトを当て、参会のお礼をいつていたと思う。そのうち親戚にも番が廻ってきた。私は海外勤務の経験もなく、ましてや語学もろくにできないので、こんな場面に遭遇したのは初めてであり、興味も手伝つて司会の早口の言葉を聞き漏らすまいと、じつと耳を傾けていた。すると突然彼が私達三人を指差して、今日は遠来の客が日本から来たと言っているらしい。前触れもなくライトが当てられ、びっくりして声も出ない。するとマリーナが「おめでとうございます、今日はお招きいただきありがとうございます、私の日本の両親です」と英語で挨拶してくれたのだった。

あつという間の出来事だった。正直のところ私はそのあとどうしていたのか思い出せない。私達にとってまさにコーリーのいうサブライズそのものだった。

仏教徒にあらずとも

三 春

大田区大森を訪ねる機会があつたら是非とも密乗院に立ち寄つて欲しい。密乗院は、千三百年の歴史を持つ真言宗の寺で、新四国多摩川八十八箇所七十七番目の札所でもある。門をくぐると、正面本堂の右側に斬新なデザインの客殿と庫裡があらわれる。建築家川口通正氏の設計によるもので、漆喰と木材と銅板との見事な調和に圧倒される。円形の玄関、その脇から座敷前を通つて裏玄関に続く露地に入ると、生い茂るススキを描いた一〇八枚の陶板が埋め込まれた塀が続いている。ススキの鋭い葉はそれぞれ思う方向に天を突き刺し、いかにも自由奔放でありながらきりと引き締まっている。この幽玄なススキの塀は蜜乗院の顔とも言え、ダイナミックな設計と繊細な心遣いとが織り成すハーモニーを象徴しているかのようだ。陶板は、前田和氏の個展で現任職須佐知行氏のお母様が購入したものだという。

茶人でもあるお母様は美意識の高い方で、海外旅行とカラオケが大好きな陽気なお人だったが、残念なことに一昨年の秋に亡くなられた。座敷にはいつも野山の草花がさりげなく生けられ、しつとりと落ち着いた空間で上質なお茶とお菓子を頂戴しながら庭を眺めているとふっと心が和んでくる。

住職と私とは、子供の頃に悪友たちに誘われて秋川でバーベキューピクニックをして以来の友人で



ある。長らく親交が途絶えていたが、お互いの子供たちが通う学習塾で偶然に再会したことから、お会いする機会が増えた。

我家には
宗教心も宗
派もなく、
父の葬儀で
彼が住職で
あることを
あらためて
思いだし、
読経をお願い
した。今
は両親がこ
この墓地に
眠ってい
る。寺の自
慢話など聞



かされたこともないので、初めて密乗院を訪れた時は感動すら覚え、その謙虚な人柄に感じ入ったものだ。大胆な設計、円形の書斎、随所に見られる柔らかな曲線は、住職の柔和さとしなやかな感性を表しているかのようだ。

客殿と茶室の両方から眺められる中庭は小京都の趣である。建物も庭も墓地も隅々まで手入れが行き届いて気持ちがよい。驚いたことに、毎日の手入れは住職ご夫妻がみずからなさっており、人任せにしていない。更に驚くことに、建設費を檀家の寄付に頼らず、住職個人が借り入れた資金でまかなったそうで、銀行への返済金は毎月九十万円を超え、経済的に辛い時期もあったという。だからこそ檀家から口を出されることなく、寺とは思えぬ斬新且つ優美なデザインを押し通すことができたわけで、そのこだわりと強靱な意志には敬服するばかりだ。

住職としての執務のほかに、書、篆刻、日本画など、実に多彩な修練を積みながら、童句集「鼻ったれ小僧」や同人誌「虚空」など、執筆にも力を尽くしている。四

季の花々が描かれた本堂の天井画や掛け軸は住職の作である。また、音楽に対する確かな耳の持ち主で、時にはプロを招いて本堂でコンサートを開き、地域住民や母子家庭の子供たちに、良いものと触れ合う機会を提供している。



近年、大枚の寄付を募って贅を凝らした華美な寺があるかと思えば、また、怠慢によって凋落の一途をたどる寺もあるようだが、密乗院のようにつつましい姿勢を貫きながら誠意と情熱を惜しみなく注いでいる寺は稀有であらう。

創作短編



吉田 邦彦

アタージュ

山崎 礼子

それは古い楽譜で、変色していたし音符も判別しにくかった。ざっと弾いてみたら、短調の旋律が不思議な懐かしさを伴って響いてくる。絵里子は楽譜を鞆に入れ、ギターを収めたケースを持って家を出た。

練習場のカラオケボックスに到着すると、真一は既に部屋に入って待っていた。

「二時間しかだめだって。早く合わせようぜ」

ドアを開けるなり真一が言った。

「ごめん、ごめん。新しい楽譜を読んで」

絵里子はそこですぐに言い直した。

「新しくはないか……。古い楽譜だけど新しい、新しいけど古い」

「何ぶつぶつ言ってるんだよ。何か面白いもの見つけたのか」

絵里子は我が意を得たとばかり真一の隣に座り、楽譜

を取り出した。

「ずいぶん汚ねえな。シミもいっぱいあるし」

真一は相変わらずの乱暴な口調で言い、それでも楽譜をテーブルに広げて弾き始めた。

絵里子と真一は高校時代ギター部で一緒だった。大学、就職とそれぞれの歳月を経て、二年前の同窓会で卒業以来初めて顔を合わせたのである。意気投合して、老人ホームや病院へ演奏しに行くようになったのはそれからすぐ後のことだ。

「結構いい曲じゃん」

「でしよう？ 単純なんだけど、なんかぐつと来るのよね。最初から合わせてみない？」

二人で頭を寄せ合いゆつくりと弾き始める。タイトル通りアタージュなので、曲の速度も遅い。

「誰かが趣味で作った曲かな」

「そうだと思うわ。アンティークシヨップで見つけたの」

「へええ。そんな所で楽譜なんか売ってるんだ」

「たまたまよ。ちよほど家を処分する人がいて、中身を

まるまる買ったらしいわ」

アンティークショップと言えば聞こえがいいが、要するに古道具屋である。ブラウン管のテレビやらレトロな扇風機やらに混じってブリキのおもちゃがあったり、ブランド物のバッグがさりげなく置いてあったりする。絵里子はその店が好きでよく覗くのだ。

「まるまる買ったと言うことはかなりの金持ちの家だろうな。いらぬ物を処分するお金も持つわけだろ？ 採算とれると踏んだんだな」

真一もその店を知っていて、胡散臭い親父がいると悪口を言っていたことがあった。

時間をかけて、読み辛い音符を確かめながら合わせていったが、どうしてもおさまりの悪い箇所がある。

「これ楽譜の間違いだろ」

「そうよねえ。この音がナチュラルで、ここもおかしいし、ほらこれも」

「どうだろう。音符がよく見えないな」

「ねえ、これ練習して今度の老人ホームに持っていかない？」

真一はすぐに

「よし、曲調も郷愁を誘う感じがしていいもんな」

そう言って「頭からもう一度弾こう」とギターを構えなおした。

郷愁という言葉が見事にはまる曲だと思った。テーマの反復は単調になるどころか、気分を高揚させる効果もある。絵里子は改めて曲調の豊かさに心を躍らせ、真一が気に入ってくれたことに喜びを感じていた。

ところが終盤の転調したクライマックスでまたしても躓いた。こんな単純な曲で細工をするのは不自然な気がする。

「やつぱりこの部分、メロディに合うように弾くね」

「そうだな」と真一も頷いた。

練習の後、食事をして二人は別れた。

帰宅して自分の部屋に入ると、絵里子は一気に力が抜けた。真一とは演奏の場が決まれば会って練習をする。その間に絵里子を選曲し、楽譜に起こす。絵里子は彼に会いたい一心で曲を探しているように思うことがある。いつになったら音楽のパートナーから人としてのパート

ナーになれるんだろう。時々そんなことを考えた。真一にとって絵里子はいくまでもギターデュオの相手という認識に留まっているようだ。鈍感なのか、意識的なのか絵里子にはわからない。でも、今日の真一はいつになく曲に対して前向きだった。絵里子は見つけ出した楽譜が二人の間を縮める予感を抱いたのだった。

一ヶ月後、ハロウィンパーティーで弾いて欲しいと依頼がきた。二人の家からさほど遠くない高級老人ホームだ。アダージョの楽譜は絵里子の手で新しく甦り、不自然な音も直した。その他に「小さい秋」や「もみじ」など季節の唱歌も選り当目を迎えた。

ホームではホテルかと見紛う共有スペースで、ソファに深々と腰をおろした入居者を前に、真一と絵里子は気持ちよく演奏した。唱歌が始まるとあちらこちらから歌声が聴こえてきた。真一と顔を見合せて笑みを交わす。最後に例のアダージョを弾き始めた。思ったとおり郷愁を誘うメロディに、皆うつとりと聴き入っている。絵里子も曲の世界に酔っていた。いよいよクライマックスという時、いきなり大きな声があった。

「そこ、楽譜をよく見て。違うだろう」

絵里子は思わず手を止めた。真一は戸惑っているようだったが、そのまま弾き続け、絵里子にも弾くように目で促す。声をかけたのは後ろの方に座っている白髪の男性だった。職員が傍に行つて宥めている様子が見えた。何とか無事に弾き終え、盛大な拍手をもらつてコンサートは終わった。

帰り際、職員が演奏を中断させたことを詫びて、「あの方、音楽にはうるさくて。ご高齢で記憶が曖昧になつているんです。これに懲りずにまた来てくださいね」

そう言つて見送つてくれた。

帰り道、絵里子はもしやと言う思いに促われていた。考えを話すと真一も同じ気持ちだったようで、そのまま二人で楽譜を手に入れた古道具屋へ向かった。

その夜、絵里子はアダージョの楽譜を開いて、ある作業をした。古道具屋の話によると、やはりあの男性が楽譜の持ち主であつた。本人はチェロを趣味にしていたと

のことだった。

作業はあつけなく終わった。日頃古道具屋の主人と懇意にしていたお陰で、かなり立ち入ったことが聞けたのだ。だからこそはかどったとも言えた。

後日、真一を呼び出し、絵里子は楽譜に秘められた暗号を解いて見せた。真一はしきりに感嘆の声をあげた。音符は日本語でドレミファソラシドだが、ハニホヘトイロハとも言う。またアルファベットではC D E F G A H Cと表す。それらを組み合わせ、楽譜の中で違和感があった部分を解説したのだ。表記にないものは#やbで読み取った。

「奥さんの名前がミホで、『アイシテイル、ミホ』か。すごいラブレターだな。奥さんはちゃんとわかっていたんだらうか」

「わかってたわよ。奥さんはピアノを弾いていたんですって。二人でデュエットしたわよね、きつと」

「変な楽譜のまま弾いたわけじゃないよな」

それはもちろんそうだろう。でも彼女はもうこの世にはいない。それを思うと切なく、アダージョの旋律が物

悲しく耳に甦って来るのだった。

絵里子はこの曲がプロポーズではなかったかと思っている。いつか真一も自分のために曲を作ってくれないだろうか。声にならない思いを込めた眼差しで真一を見る。真一は楽譜を眼で追っていた。微かに口ずさむアダージョのメロディが絵里子の耳に届いた。



民族自壊―お年寄りのための童話

新山 章一郎

普段なら麗かな常春の日差しが柔らかく降り注ぎ、小鳥歌い、花咲き乱れる天国ではありますが、このところの日本の政治、社会の有様に、男神、女神様方が集まって大騒ぎのありさまです。

「ねえちょいと、あんた何とかしなさいよ。この頃の日本はどうなってるの。あれじゃ国が減びるわ。担当神として恥ずかしくないの」

「しょうがないでしょう、私だってみつともないから何とかしようとするんだけど。もう駄目なのよ、あの国は」

「ひどいものじゃのう。国の指導者が相次いで簡単に『やゝめた』とその国を放り出すというのはのう。三人目も危ないもんじゃ」

「私もそれが心配なんですよ。とにかくみんな親の威光で周りからちやほや持ち上げられてばかりいたんで

しょ。今まで、自分のしたことは総て下の者が始末してくれていたから、他人の不行跡の後始末を自分がやらされるなんて考えたこともなかったでしょうよ」

「そうよ、最初の総理は部下に不祥事が起こるとどうしていいか分かんなくなっちゃって、心身ともにすっかり落ち込んでいとも簡単に『もう駄目だ』でしょ。二番目も野党がちよっと反対すると『お母ちゃん、あの子苛めるー。僕ちゃん可哀そう、もういやーっ』とひっくり返っちゃって。どうしょうもないわね」

「三番目は漫画とキャラで、『受け』だけで喋っているから、とにかく軽すぎるわ。言うことをころころ変えるし、ちよっとややこしいことが起きると『僕ちゃんわかんない。やってえ』とすぐ他人に丸投げしてとげ顔。あれじゃおっぱり出す前に周りが見放すわ」

「そんな人間しか担ぎ出せない議員連中しか選出できない国民もどうかと思うわな。彼らもかなりおかしくなっておるぞ、この頃。自分の気に食わないというだけでやたらと人を殺す。野獣でも同属の殺しは余りせんのじゃなあ」

「あれには私も困ってるんですよ、神様の私にもわけ分かんなくて」

「なーに、すべて民族自壊シンドロームなんじゃよ。弱いリーダーしか出ないのはその群れが劣化した証拠じゃ。公僕共がでたらめをやったり、一般人も平気でビルの偽装をやったり毒米をばらまいたり、わけの分からぬ殺人が増えたり」

「わしもそう思う。大体あの国は少し長く生き過ぎたな。過去において世界に覇を唱えた国でも千年も隆盛を保った国は殆んどない。いかなる民族とでも、よくて数百年で次々に質的に変わっておる。あの優秀な政治形態を考え出したローマでさえそうじゃ。エジプトも一つの王朝については案外短いものじゃ。それ以外の覇権国家もそんなに長くは繁栄を保つことは出来なかった」

「それに、日本は世界に覇を唱えたわけではない。極東の小さな島国でちまちまとやってきたからこそ千四、五百年も一つの国、単一民族として続いてきただけじゃ。それがいきなり世界の風に曝されたのじゃ。あの小さな国が国際的に認められた国家として、また民族

として列強に伍し、百年以上もつたのだからよくやったようなものじゃ。日本も民族としても、一つの国としてもそろそろ曲がり角に来ておるのじゃなからうか」

「さよう、地球では古来多くの種が生まれ、消滅していった。日本も例外ではない。そろそろそのような過程に入ったのかも知れん」

「そういう場合、国に不吉な予兆が次々に起こるものじゃが」

「もうすでに出ておるわ。一国が減びるとき、腐敗はトップから始まり、だんだんに庶民レベルに達する。この国には天下泰平、四海波立たずという基本的価値観があつての、この国の政治家たちはただただ平穩無事であればよいと願うのじゃ。この思考形態は彼らに深く染み付いていてな、その願望の余りの強さゆえに、変化、危機が訪れるたびに彼らはまずその変化を『そのようなことはない』または『あつてもたいたことではない』となぜか腰を上げず、あらゆる事実、現象に目をつぶる」

「さよう『危機はない、すぐによくなる、問題ない』と言ひ張るから必要な手段を採らないし、必要と思つても

採れない」

「そりゃそうじゃ。問題がない処へ何かすることは出来んからな」

「そうじゃろう。だから危機はますます拡大する。大は国の政策から小は大臣の素行まですべてそうじゃ。例えば、ある問題が起こったとする。総理の会見の第一声は決まったように『問題はない』だ。危機意識なぞ何もない。それを追及され、その弁明のためにとんでもないことを言わざるを得なくなる」。

「しかもこれがマスコミで国民全体に知れわたる。国民の目の前で繰り返し正義が踏みにじられ、道徳が無視され、常識が通用しなくなるのじゃ。とくにTVの影響は大きい。平気な顔で、理屈にならない屁理屈をこねる奴の鉄面皮を見ていると本当に張り倒したくなる。これでは庶民の誰しもが、『国の指導者たちだってあんなだから、我々だって嘘をついていいのだ。道徳なんてクソ食らえ。国家、社会なんて知ったことか、自分のしたいことをしていいのだ』と思うようになったとしても文句は言えん」

「そう考えれば、今までの社会通念からは到底考えられないような、人の食、住の安全を脅かす偽装を行なう人間が出てきたとしても仕方ないわな」

「自分たちがむしろしゃしたという理由で簡単に人を殺し出した若者たちも、たぶん彼らの中では『自分のしたいことをする』のが最優先で、路上の石を蹴って鬱憤を晴らすのも、物を壊して憂さを晴らすのも、人を殺して溜飲を下げるのも同じレベルのことになったのかもしれない。前は人の命は絶対的な価値を持っていた。それが今は自分の欲望と較べる相対的なものになってしまった。リーダーの品性は国民の道徳観も変える。恐ろしいことじゃ」

「そのような人間が出てくるのはその民族、国家、社会が劣化してきた証拠じゃよ。ま、日本もそう長くは持たんじやろな」

「そうね、私もそろそろリストラか。このごろフリーターの口も少なくなっただけね・・・」

日本担当の女神さまは寂しそうにその場を立たれました。

ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞

西川 知世

月に一度、句友に会うために、渋谷からバスに乗る。ほんの二十分ほどの時間だが、街の表情の変化は素敵だ。

渋谷の坂は四季折々のシヨウウインドウに飾られ、都会の華やきに心が浮き立つ。車窓を眺めていると、放送センター、現代の最先端を働く人々が闊歩する。その角をまがれば、後は銀杏並木が続き、代々木公園の緑を経て、代々木青少年センターである。季節の移り変わりはダイナミック。そして、ペン俳句の句会場へ…。

おほらかに余生生きむと初日記

石川 素屯

八十路越し迷ひは失せず鯛雲

十三夜静寂を破る米軍機

六義園櫺一葉の初もみぢ

歳月を経たる冬帽手放せず

四月三日は千鳥が淵桜吟行。関谷裕彦さんのご手配によるものであった。いつも句会で、にこやかに学識豊かに解説してくださる方を失った。寂しいかぎりである。新メンバーが二人増えたことは嬉しいことであった。今年一年のペン俳句の成果をまとめさせていただく。

西川 知世

やはらかき掌の人なりき風花す

二ヶ月の南十字を指し逝けり

川上へ町の細りし夏燕

山昏れ初む芒の風を懷に

山の雫集め野葡萄太りけり

ますます大人の句風に磨きがかかってきた。そして「十三夜」の句では新聞記者の視点を垣間見せる。晩秋の十三夜の月を祭るのは、深まる秋の寂しさには欠けた月がふさわしいから。冷え込む夜気の静けさと米軍機の爆音、現代の目にはみえないが確かな不安が句の底辺にある。

黄沙飛び関八州を覆ひけり

大泉 子泉

透明の水より咲けりヒヤシンス
鈴蘭の一輪緑濃き中に

種子百個朝顔百の芽を出せり
グランドの草引き終はり秋壮ん

みほとりを俳句にすることをいつも心がけて、「俳句は日記」を実践して句作りに励んでおられる。「ヒヤシンス」の句には花を咲かせる水が透明であると発見した作者の驚きがある。今年は黄沙が降る日も量も多かった。「黄沙飛び」の句は関八州を覆うほどの今年の黄沙を詠む。

新人りの辞令は重し花万朶

上田 信隆

ゆるやかな坂上がりきり夏の寺
日傘さす妻若きこと知らさるる
白き椅子ボードレールに秋の詩
母去りて炬燵の上の聖書かな

四月の桜吟行が句会デビュー。めきめき上達されている。楽しそうである。「ゆるやかな」の句、参道には男坂、女坂があつたりする。それでいえば、これは女坂。緑濃く、蟬が鳴き、上がりきった坂の上の寺は見晴らしもよいことだろう。入道雲も空に湧いているかもしれない。

年若き者より乾して屠蘇の盃

亀井 弘次

水温む鯉の動きの軽やかに
蒼き空木の芽を仰ぐ散歩道
草抜けば道を失なふ蟻の列
海臨む窓一杯に鯛雲

正月の句は新年を迎えるめでたさを詠むものと教えられた。「年若き」の句にはそのめでたさがある。作者もかつては最初に盃を受ける年若きものであつたろう。しかし、今は若者に先に乾すことを促すのである。代々の栄えがそこにあり、年長者としての温かい視線がある。

新しき年の初めの缶麦酒

春の潮巨船の腹を遊び

ゆつたりと只ゆつたりと春の潮

鎌倉や塚に残れる春の雪

二十八年の夢の跡なり実朝忌

関谷 裕彦

鎌倉がお好きなようであった。歴史がことのほか好きであった。「実朝忌」の句は、私の理解をこえて、たくさんの史実が「二十八年」に詰まっている。今一度、お声を聞きたいと思う。「春の潮」の二句は大景を詠みとめ、鷹揚なお人柄をしのばせる句に仕上がっている。合掌。

中村 雅道

降るほどに雪の起伏の失せゆけり
騎馬像は明治の元勲花の中

海開き櫓を高くうち祓ひ

激つ瀬や紅葉頭上に燃え立ちぬ

手の届くものに囲まる炬燵かな

「騎馬像」の句は、桜吟行での句。雄雄しい像が千鳥が淵の満開の桜の中に立っていた。俳句では雄雄しい、立派とかの説明は不要。中七の「明治の元勲」で十分に伝わる。それが、俳句という世界最短の詩の魅力である。吟行、句会と今年も会をよくまとめてくださった。

水原 亜矢子

人恋ふは藍の濃き日や濃紫陽花
水暑し緋鯉は呪文吐き出せり

たたづめば風聞く夏の夕野原

約束の人来ぬ背に鯛雲

波高し巡る岬の冬帽子

六月の句会から参加された。俳句歴はながく、一門を持たれている。会に厚みを増してくださっている。心強い。「人恋ふは」の句、紫陽花の濃い藍色にことさら人を恋うと詠う。この句を口ずさむとき、読み手には紫陽花の藍色が目につかぶ、それぞれの思い出とともに。

(プロマネ 西川 知世・中村将陸)

「二〇〇八年」ペン川柳「勉強会」

川柳勉強会 世話人 平尾富男

平成十六年六月に新橋の割烹「森田」の座敷を借りて初めた月例ペン川柳勉強会も、平成二十年の十二月で五十五回を数え、四年半を超える長期継続の分科会に成長しました。

四十回を迎えた昨年十九年九月からは、毎月の会場を企業OBには懐かしい銀座の、足を伸ばして美味しい酒肴を楽しめる黒薩摩総本店に移しました。女将の心温まる笑顔のもてなしが、メンバーの忘れかけた「青春」の血を騒がせて創作意欲に火をともしてくれます。

一昨年出版した『不良老人たちの溜息』に続く出版の夢も消えてはいません。いつの日か新しい企画で実現させることを目標にしています。

今年から毎月の作品を公開ホームページに掲載することになり、メンバーの意気込みも増しました。更には、会員専用のページに、勉強会で批評・添削された内容が

最終・改良作品に加えて、記録掲載されるようになり、今後の研鑽に寄与できるようになりました。

しかしながら、昨年、一昨年に続き、今年もメンバーのお一人を失いました。勉強会立ち上げのときから洒脱な心意気と豊富な古典文学の知識でご活躍をされた関谷裕彦さんが二月に急逝されたことは残念でなりません。ここに関谷さんを偲び、故人亡くなる直前（一月「お題Ⅱ上がる」）に詠まれた句を掲載してご冥福を祈ります。

「あげまんと聞いて近づきツキ離れ」

「手離した金は上がって株下がり」

新しい有力メンバーも参加されました。来年も一層の精進を心掛けながら楽しく遊びたいと思っています。

以下は、今年一年メンバー十二名が詠んだ自薦の優秀
(！) 三句です。(順不同) (一部は世話人の選句)

不言

- ① 気丈にも笑つて別れ肩震え (肩)
- ② 押してダメ引いてダメなら泣いてみな (押す)
- ③ 天窓の月明かりさえ恥ずかしく (窓)

酔雅

- ① 落とし穴そうとは知らず蜜を吸う (穴)
- ② さよならをこぼむ小さな泣き黒子 (泣く)
- ③ 携帯が小さくふるえ胸騒ぐ (胸)

酔深

- ① 胸のうち明かす部長の酔い加減 (胸)
- ② そのヒゲが痛嬉しいと旅の朝 (ひげ)
- ③ 冷え性の身を恋に焼くケアホーム (焼く)

周帆

- ① 定年し胸撫で下ろす不況風 (胸)
- ② 押し弱く今の女房に我慢する (押す)
- ③ 次は勝(く)る大穴狙って三十年 (穴)

昂

- ① ピンコロリ願うも先に延ばしたい (年頭吟)
- ② 大穴の社長の噂が会社変え (穴)
- ② 窓口で怒鳴った後にミス気付く (窓)

西貢

- ① 答弁はしどろもどろの付け焼刃 (焼く)
- ② この浮世まだ未練ありひげを剃る (ひげ)
- ③ 肩の荷が下りる間も無く後期入り (肩)

安兵衛

- ① 門から出窓から入る独身寮 (窓)
- ② 株上がれ油下がれは神頼み (上がる)
- ③ 馬鹿ねえとちらり見る眼に胸が言い (胸)

しん

- ① 視点上げ品格磨くOBペン (上げる)
- ② バツイチを笑みで補い魚焼く (焼く)
- ③ 還暦の余韻も過ぎて泣き笑 (泣く)

損得

- ① 株騒ぎ胸がすっきり貧乏人 (胸)
- ② 押しが効く頼りにしてるぜメタボ腹 (押す)
- ③ お前とは泣かせ泣かされ今となる (泣く)

零門

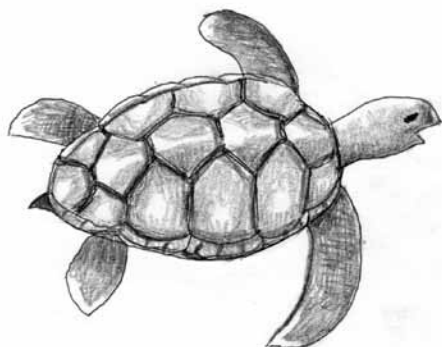
- ① 地図読めぬ妻につきたい猫のひげ (ひげ)
- ② 窓越しの隣家の馳走手が出そう (窓)
- ③ 賞味期限ゴミと値上げを増やすだけ (上げる)

だし

- ① 人生の幕引き前に一仕事 (引く)
- ② 泣き寝入りごはんですよにがばと起き (泣く)
- ③ そらないでその一言に無精ひげ (ひげ)

繭球

- ① 会社妻引いたおみくじ丸はずれ (引く)
- ② 引き際が業績よりも評価され (引く)
- ③ 開いてるよ社会の窓を目で知らせ (窓)



英語を読もう会

毎月第二火曜日を開催日として、十人近くの集まりをしております。当月の担当は予めテキストを配っておき、当日は中心となつて、講読を進めていきます。堅苦しいことは何もありませんが、それでも時には「これは仮定法過去だから——」などということにもなります。

題材は何でも良いのですが、やはり外国の新聞からとられたトピックスが多くなつてます。今年の場合、「ブット女史の暗殺」、「ロシア大統領の選挙」、「北京オリンピック」、「英首相ブラウンの石油危機に関する新聞投稿」、「ロシアのグルジア進軍」があり、いずれも大変面白い内容でした。ほとんど英語の新聞・雑誌などは読まない私には、小さいながらも世界へ開いた窓です。その他、肩のこらない読み物として、「アフガニスタンの盛大な結婚式とその後の借金」、「ポール・ニューマン逝く」の二つも中々のものでした。コン

ピューターの操作に相当問題のある私は、所謂コピーが出来ないので、仕方なく古い本などから、苦勞してタイプをしてから、これをメールしております。今年は、どうせ古いならと、開き直つて、「アダム・スミスの国富論」を無粋にも使ってみました。結構、議論の種にはなり、まあまあでした。その後に、今度は大泉さんが、「ケインズの流動性選好」を取り上げて、大いに盛り上がったようです。（幹事なのにこの時、欠席しました。似非経済学士の化けの皮がはがれると不味いと思つたわけではないのですが）

この「英語を読もう会」の後には、「サロン21」があり、これに大いに助けられて、今の参加数を保つていますが、いまし参加者が増えると、当番も年に一回ぐらいになります。いちど覗いてください。

（プロマネ 佐久間 直正）

ナムコトラベル

ナムコトラベル社の「旅のくちコミサイト」へは、
○六年十一月から○七年一月までの間に会員の旅行記
二十九編が掲載され、このプロジェクトは予定通り終了
しました。

その後のナムコ社への協力は、同社の企業合併、組織
や事業内容の見直しなどがあつたため中断してしました
が、○八年八月に同社のホームページが一新され、新
しく「はみだしレポート」という投稿欄が設けられまし
た。

旅先などでみつけた珍しいもの、面白いもの、変なもの
など普通の写真やレポートとは一味違ういわばはみ出し
た事物、風景、現象などをコメント付き写真でレポー
トする欄です。

企業OBベンクラブは、このサイトへ協力することとし、
二百編投稿することとしました。八月以来会員から
海外や国内でみつけた傑作が投稿され、○九年一月末現

在、百三十八編が掲載されています。
閲覧数の多い野瀬隆平さんの作品です。

丘一面を埋め尽くす建物



世界遺産になっているアマルフィの海岸。その中でも
ポジターノが最も美しいと思う。斜面一面に色とりどりの
ホテルや別荘が競うように建てられている。イタリア
のもう一つの似たような世界遺産、チンクエテレよりす
ごい景観だ。

(プロマネ 大月 和彦・松谷 隆)

掌編小説勉強会のこの一年

「少し長いものを書く勉強しよう」という発案ではじまった「掌編小説勉強会」の活動は、二年目に入つていよいよ軌道に乗り、内容も充実してきました。

勉強会では、隔月一遍、作品を提出して合評会にかけ、その結果を織り込んだ改訂版を会員用のホームページに掲載します。枚数は当初原稿用紙十から二十枚としましたが、それでは収まらないという声が多く、上限を三十枚にアップしました。

この一年を顧みて、特筆すべきトピックスは、女性会員の入会です。七名の男性メンバーに、経験豊富な女性の書き手が加わることにより、異質の作品や異性の視点からの批評に接しられて、一層活性化されました。

さらに、三名の評論専科の方が合評会に出席して下さるようになりました。書き手同士のみの合評会では、評論の矛先が鈍ることもあるので、こうした方からの忌憚らないコメントは貴重です。

参加者の増加と作品のボリュームアップに対応するため、この五月から合評会の会場を変更、時間も充分取って徹底的な評議を行うようにしました。あわせ、有用な情報交換を行うなど勉強会の充実を図っています。

作品の内容は、世界を舞台に物語を展開する国際派、日本の経済復興を担った人々を描く国内派などの企業OBらしい話ばかりではなく、先の大戦を様々な人の立場で綴った戦記物、戦中・戦後の体験を基に仕立てたセミノンフィクション、それに社会派、家族物、もちろん定番の恋愛小説まで実に多彩です。

勉強会の成果である作品は、この一年で四十編、通算七十数編におよび、大半のメンバーは十篇以上の作品をものにしていきます。この中には、ある文学賞の一次選考を通過した作品もあり、これからが楽しみです。

この会は、個性的なメンバー揃いで今でも刺激的な勉強会ですが、さらに各人の間に激しい化学反応を起こさせて潜在力を活性化し、より高いレベルの創作に結実させたいと考えています。

(プロマネ 濱田 優・西川 武彦)

何でも書こう会

毎月一回、その日が来るのを楽しみにしている。ペンクラブの分科会活動の一つである「何でも書こう会」が行われる日である。

ご存知の通り、十年以上も前から先輩たちが続けてきた活動である。単に文章の技を磨くだけのものではない。参加されている人には説明は不要だが、一度も顔を出されたことのない方々に、勉強会の雰囲気や楽しさをお伝えしよう。そう思っ書き始めたところで、すでに立派な文章が書かれていることに気がついた。

* * * *

「知るは喜びなり」という言葉がある。これに擬せば「書くは慰めなり」、「表わすは楽しみなり」といえるだろう。更に自分の書いたものを批評してもらい、それによって自分が何かを得、そのつど向上する。しかもその過程が楽しいとなれば何をか言わんやだ。

(中略)

一人が読み終わると直ぐその作品の批評が始まる。たいてい作品の内容から入り、ひととき「そんなこともあったのですか」、「あの頃はそんなものでしたよ」などと記事に関連した雑談に話が弾む。そのうちに「文章のことなのですが」と本題に入る。

世間では、お互いに、「結構ですなあ」と誉め合い、あとは適当にお茶を濁すような会や、ボス的な有力会員に牛耳られて物を言うのものはばかれるという会もあるが、わがOBペンクラブ「何でも書こう会」はそんなこととは無縁だ。批評もかなり徹底したものになる。

(中略)

ここで特徴的なのは、この批評が実に和気藹々のうちに行われることだ。参加者がみな酸いも甘いも噛み分けた知的レベルの高い人たちばかりだし、お互いにかつて日本の高度経済成長を達成させた企業戦士という連帯感もあって、鋭い批評にも怒ってしまう人など一人もいない。どんな批判もその作品をより良い文にするための建設的、好意的なものと受けとめるから、気まずい雰囲気になるなどということはない。

* * *

これは、かつて「何でも書こう会」のプロマネも務められた新山さんが書かれた文章である。この会の性格や雰囲気を的確に表していると思ったので、あえて引用させていた。だいた。

一九九五年の十一月から始まったこの会は、もう十三年も続いていることになる。初回から参加され現在も出ておられるのは、中川路さんだけである。彼の話によると、当初は活発な議論がアフターファイブだけでなく、深夜に及ぶことも再々あったとのこと。そんなお話を聞くと、今は少々おとなしすぎるのではないかという気がする。

二〇〇六年四月から、発表された作品を、メンバーから出された意見をもとに各自が推敲しなおして、ペンクラブのホーム・ページに「800字文学館」として非公開で掲載し始めた。その後、二〇〇七年六月からはサイトが公開され、会員でなくても誰でも読むことが出来るようになっていく。

毎月の勉強会でおよそ十七、八編の作品が発表される

ので、一年間で二〇〇編もの作品が蓄積されることになる。すべての作品が「800字文学館」に投稿されているわけではないが、二〇〇八年十二月末現在で、三二二編の作品が掲載されている。

この会は、自分が見聞したこと、考えたことなどを開示する場である。ある意味では自己をさらけ出すことでもある。他のメンバーはそれを理解し、自分の考えとは違っていてもそれをお互いに認め合う。そこで仲間としての理解が深まり、単なる勉強会ではできない強い絆が生まれ、メンバー同士をつなぎ合わせる。会が終わったあとにワインを飲みながら本音で話し合うことも、更に絆を強固なものにする。そんな魅力が、長く続いている理由ではないかと思っている。

まだ、「何でも書こう会」を覗いたことのない会員の方々、是非ともお気軽においで下さい。落ち着いた部屋に、ゆったりとした席をご用意してお待ちしています。勿論、発表作品がなく、他人の作品にコメントをつけるだけの方も歓迎です。(プロマネ 野瀬 隆平)

サロン21

八年ほど前、前会長の北田さんに依頼され、この勉強会のマネジャー役を引き受けました。会の運営方法や目的については特に引き継ぎなどはなく、時事問題、特に国際問題を中心に毎回テーマを決め、参考資料としてマネジャーが自作のレジュメを参加者に提供し、自由に意見を出し合う形で運営しています。運営上心がけてきたことをいくつか挙げておきます。

この世界には絶対的に正しい真理とか、意見とか、考えなどは存在しないので、自分はこれが正しいと信じ、それを主張するのは自由ですが、それを他人が受け入れるかどうかは別問題です。他人の違った見解にも耳を傾け、お互い見解が異なる場合はその理由を考えてみるくらい余裕を持つことが必要です。自分と異なる意見を他人が述べたのに対し、それは間違っているなどと安易に反論すべきではありません。そして一番重要なことは

自分の意見を持つことです。

現代は情報氾濫の時代です。情報量を増やすことは簡単で、なにも専門家でなくてもできることです。しかし情報量の多さそのものはさして価値がありません。大切なことは起こっている事態の意味を把握することで、それは個人が自ら行う以外ないのです。有名評論家や事情通がもっともらしいことを言っても、しよせんそれは彼の意見であって、参考にはなっても、事態の真相や真理を語っているとは限りません。

海外のこれこれの雑誌や新聞にはこんな記事が出ていたが、日本の新聞雑誌では報道されなかった、だから海外のマスメディアに接していないと真実から隔離されるのではないかといった話をよく耳にします。外国の新聞や雑誌に目を通すことは言葉の勉強にもなって結構なことです。しかし、日本の一流新聞や雑誌はそれなりの歴史と経験を持ち、海外の出版物にひけを取っているとは思いません。日本人が日本にいて世界のことを理解する

に必要な情報は十分報道されていると思います。アフリカの英国系銅鉱山で起こった殺人事件は、英国では関心のあることでしょうが、銅相場に反映されない限り、日本には関係のない事件です。情報の洪水の中から日本に必要なものを選別して報道するのが現代マスコミの使命です。あれこれの新聞や雑誌の見出しばかりに気を取られるのではなく、特定の新聞や雑誌をじっくり読むことです。連載小説を読むような面白さがある筈です。

数年前、会津磐梯山に登りました。頂上から展望した初秋の会津平野は銀色に輝く猪苗代湖を中心に、黄金色の絨毯を敷き詰めたようで、「会津磐梯山は宝の山」とはまさに至言であると思いました。そしてこの豊かな郷土から輩出した会津藩士たちは、多くの藩が「勝てば官軍負ければ賊軍」とばかりに薩長にすり寄っていた中で、最後まで幕府への忠誠を誓って戦い、惨めな結果に終わった維新の悲劇を思い出さずには居られませんでした。薩長中心の維新こそ日本の近代化をもたらした偉業とばかり、当時の関係者は元勳英雄と称えられ、金と

地位と栄誉を得、名門と称されて今日に至っているのですが、会津平野を眺めながら維新には何か胡散臭いものを感じざるを得ず、それが発端となって二〇〇八年度は「日本の近現代史」を集中テーマにし、幕末維新から日中戦争までの、主として政治経済史を中心に勉強しました。毎回のレジュメはホームページの分科会欄に掲載されていますからご一読ください。

人間社会の出来事は所詮、個人や集団のいろいろな欲望が、あたかも絵の具を混ぜたように、驚くほど多様な色となって表れるのに似ていますが、関係者ないしはその子孫はとかくそれらを美化しがります。残された歴史記述の中から何が本当かを推論する必要があります。それを他人の意見ではなく、自分の歴史観で考えることが大切で、歴史の面白さは推理小説の面白さに似ています。そして歴史世界に分け入ることは、現在の社会や己自身を知る手掛かりにもなります。

(プロマネ 金京 法一)

ベストライフオンライン

ヘルスネットワーク社はベストライフオンラインという名称のメールマガジンを運営している。事業は、インターネットを利用した各種の情報提供サービス、電子出版物の企画制作、ウェブ、携帯向け企画・製作・運営である。一九九八年創業で会員約三万人を数える。健康、医療、団塊、シニア対象、日野原重明先生、ロッチ・オンラインショッピングをキーワードに幅広い事業を展開している。

我々企業OBペンクラブとは、定期的に会合を持っている。ヘルスネットワーク社のエキュゼクティブディレクター樋口さんが必ず出席される。業界の動向、特にメルマガ業界がスポンサー企業の市場動向にいかに関心があるか、また市場獲得に熾烈な競争を繰り広げているかを、具体的な事例を挙げて解説される。今後大きなマーケットが期待されるのは団塊の世代である。多額の退職

金など、可処分所得を持ち、子弟の教育を終わり、資産を保有する年代をターゲットにしている。我がクラブはそれより約十年早く高齢年金世代に入った会員の経験、智慧を、ヘルスネットワーク社の顧客開拓に役立てたいとの方針である。

具体的には、商品のマーケティング戦略のブレインストーミングへの参加、映画配給会社の事前試写会への参加とPR、資産運用のモデルとしての参加などである。

また大人の生活支援オンラインマガジン「ベストライフ・オンライン」の社会・経済・海外の欄を担当し、毎月二編を投稿している。毎月二編最近三年で延べ三十六人が計七十二編執筆した。その内容は、年金関係で「年金生活のノウハウ」「退職金の運用」「年金生活のいろいろ」、社会時評関係で「国会傍聴」「ワーキングプア」「政治資金」などである。会員諸兄の広い視野、深い洞察、高い見識に溢れた情報発信が投稿されている。メルマガのURLは次のとおり。

<http://www.bestlife-ne.jp/ob/index.html>

今年のベストライフ掲載者氏名と掲載文（敬称略）

一月	都甲 昌利	国会傍聴の記	九月	松谷 隆	孫に教えられたニュー・ライフ
	上原 利夫	健全な年金生活のノウハウ		大泉 潤	年金生活の秘訣
二月	金京 法一	株価と日本企業	十月	岩崎 洋一郎	ライフケア・マンションと私
	中村 将陸	年金生活を楽しむ	十一月	野瀬 隆平	充実した年金生活のために
				上田 信隆	負の遺産を孫子の代まで残すな
三月	山縣 正晴	サブプライムと日本売り、その対策	十二月	大月 和彦	医師養成策の朝礼幕改
	吉田 邦彦	やっかいな鯨問題		山崎 礼子	おれって誰？
				渡里 清	年金騒動
四月	大庭 定男	家内に届いた年金特別便			
	浜田 道雄	物価高、生活不安そして揮発油税			
五月	古川 さちお	年金制度に無知な年金生活者			
六月	田谷 英浩	住民投票に向けて			
	佐久間 直正	下戸のつぶやき			
七月	大平 忠	「財政赤字」から逃げてはいけない			
	穴戸 三春	祖国を出たがるロシア人			
	福島 弘毅	生活に変化をつける			
八月	平尾 富男	若者よ、ロシア語を学べ			
	濱田 優	主夫入門記			

（プロマネ 大泉 潤）

追悼

関谷裕彦さん



平成20年2月16日逝去
75歳
平成3年当クラブ入会

昭和江戸談話の宝庫を偲ぶ

中川路 明

平成四年六月長い技術屋を廃業、私はペンクラブに入会した。縁遠かった未知の分野、人文畑の言葉探しの文章作成に惹かれる。クラブに私より一年早く入会した江戸博学の御仁がいた。関谷さんだった。「私の育った関西は京言葉から、船場、河内などたくさん

の言葉があります。関東で古くから今に残る江戸言葉を紹介する本を教えて下さい」という私の頼みに関谷さんは気軽に応じ、早速翌週A4三枚の自作の資料を下さった。関谷さんの豊富な知識、汲めども尽きない記憶力には、うらやましさを超えて驚嘆した。十六年間共にしたクラブライフで、温容と親切に甘え、数え切れない多くの指導を頂戴した。

彼は小石川生まれ、深川育ちの生粋の江戸っ子で、読書家の父親の演藝畫報に導かれ、小学四年生のときすでに劇評を書くいっぱしの芝居通だった。「お好きな俳優は」と伺うと、二十人を超える名優を挙げ、それぞれの得意とする演技、台詞を披露してくれた。古

い江戸の町、坂、橋の名前とその由緒にも詳しく、いまや心ない行政でどんどんその名が消えていくことを残念がられていた。

江戸時代から現在までの歌舞伎に由来する地名の町を訪ね、そこに纏わるエピソードや舞台を紹介するエッセイを、ベストライフ社のメルマガ『エバークリーン』に掲載された。現在もクラブのホームページを飾る『お江戸東京歌舞伎談義』はその白眉である。『四ッ谷怪談と四ッ谷左門町』、『皿屋敷と番町』などと十話の短編集である。まだたくさん未発表稿があり、惜しいから発表して欲しいとお願ひした。が、「私は他人に読んでもらえるような文章は書けません。自分が書きたいと思っ

たときにペンを執ります」と遠慮を続けられた。

戦後は観劇の機会が減り、脚本書き、日本舞踊、さらに英語演劇と活動分野を広げた。ペン川柳でも常連メンバーとして活躍、歌舞伎に因んで詠まれた名句。

海老様は芸の肥やしに

精を出し（井蛙）

兵隊ごっこに軍国少年時代を過ごした私たちは、海軍の主力艦や陸海空軍機の名前やその装備を全部知っており、いいお相手だった。スポーツ好きで、相撲では玉錦、双葉山、武蔵山、男女川の四横綱時代、野球では甲子園の中等野球。娯楽の少なかった当時、放送が始まるとラジオの前から動かなかった。半世紀を経ても物知り

は衰えず、互いに打てば響く会話を楽しんだ。

何でも書こう会に、私は人情芸者愛八の純愛映画『長崎ぶらぶら節』の鑑賞記を書いた。ワシントンの軍縮条約で、五・五・三の戦艦比率が決まり、巨大戦艦「土佐」は廃艦の憂き目を見る。進水式を挙げたばかりで儀装もなく、長崎から丸裸の姿のまま呉に曳航されて行く「土佐」を偲んで、岬に登り切々と歌う愛八の哀しい声が胸を打ったと記した。数日後彼から長崎湾を出て行く「土佐」の写真のコピーを貰った。戦時中に極秘資料の写真をどのように入手されたのかと驚いた。さすが軍事史学会員、戦略研究学会員だった関谷博物館の逸品である。

海を愛する関谷さんは四十年近く海運会社 Royal Nedlloyd に勤め、ドイツに四年、南ア、ヨハネスブルグに三年駐在活躍された。南ア駐在員のジャカランダクラブ、日本海事新聞に歌舞伎、映画など幅広くエッセイを投稿された。社会活動の輪も広がった。日本国籍男子のなお増加するエイズ罹患率を憂え、日本生活問題研究所事務局長として警鐘を鳴らし続け、京北学園理事として現代マナーの低下を嘆き、「井蛙道人・江戸っ子憤慨録」を学内報に連載されていた。

今年一月の何でも書こう会に、私は新年に因み「お初」の題で出稿し、曾根崎の森の道行の台詞、「この世の名残、夜の名残、死に

行く身をたとふれば、仇しが原の道の霜、一足ごとに消えて行く、夢の夢こそあわれなれ……」と近松の名口調に書き及んだ。同じ月の会に、関谷さんが遺稿となつた「新春歌舞伎余話あれこれ」を書かれ、冒頭に彼が父上に教わつた「曾根崎心中」の歌として同文が引用されており、全くの偶然の合致に驚いた。

久し振りにお会いした二月十五日の月例会の休憩で、病欠していた私の作品をご存じない関谷さんにこのことをお話ししたところ驚かれた。その日私はまだ二次会に出られないと告げると、「あなたがお酒を飲めるようになったら是非一献交わしましょう」と別れた。そして翌日悲報を耳にしようと

は。あまりにもあつけないお別れに、何を悔やんでも後の祭り。ただただ感謝。

合掌



企業OBペンクラブの本年の歩み

平成二十年(二〇〇八年) Ⅱ

年 表 (二〇〇八年)

(会員への敬称略)

一月例会(十七日)

- ・新入会員 Ⅱ 釘澤淑郎
- ・退会会員 Ⅱ 中洲靖雄
- ・ゲスト講演 Ⅱ 岡田裕氏 (アルゴピクチャーズ株式会社代表取締役社長)

『映画あれこれ』

- ・新年パーティ Ⅱ 会員参加 二十四名
- 招待参加ゲスト Ⅱ 十九名 (合計四十三名)

二月例会(十五日)

- ・新入会員 Ⅱ 西川知世、福島英毅
 - ・退会会員 Ⅱ 榎本喜三郎、立石雄士、
- 関谷裕彦(物故 合掌!)

三月例会(十九日)

- ・会員講演 Ⅱ 濱田優氏
- 『バイオプラスチック(BP)の動向』
- ・『悠遊』第十五号の完成・配布

『タイへのご招待』

―異文化を学んで日本を知る―

- ・特別講演会 Ⅱ 清水良典氏 (愛知淑徳大学教授)
- 『生涯 書くということ』
- ・お花見 Ⅱ 代々木公園 (二十二日) (雨天で中止)

四月例会(十九日)

- ・新入会員 Ⅱ 山崎礼子

・『悠遊』合評会

五月例会（十七日）

・新入会員Ⅱ水原亜矢子

・ゲスト講演Ⅱソムリエ富永純子講師

「JALアカデミー銀座教室」に於いて

「知って楽しむワインの基礎講座」と試飲会

六月例会（十九日）

・新入会員Ⅱ倉藤金助

・ゲスト講演Ⅱ長田久雄氏（桜美林大学院教授）

『日本における老年学の意義と動向』

七月例会（二十二日）

・退会会員Ⅱ今川確郎

・会員講演Ⅱ稲宮健一

『宇宙の夢―夢の時代、戦争、冷戦時代の競争』

・ホームページⅡ不具合発生で一時的に一部の運用中止

八月例会（夏休み）

・特別懇親会Ⅱ本年度入会女性会員と有志

九月例会（十九日）

・会員講演Ⅱ田谷英浩

『企業広報裏話』

十月例会（二十日）

・ゲスト講演Ⅱ野田英二郎氏（元インド大使）

『インドの国柄とその対外関係、日印関係』

十一月例会（二十日）

・ゲスト講演ⅡD・E・アクシヨノフ

『戦前から今日に至るまで六十五年間日本を見続け

た外国人医師』

十二月例会（十八日）

・ゲスト講演Ⅱ日米学生会議

（恒例の現役大学生による活動報告）

年 史 (二〇〇八年)

一、役員人事

次の通りの理事・監事が選任され、来年度二〇〇九年末改選までの二年間を担当することとなった。

会 長 (出版担当理事)	西川 武彦 (再選)
副会長 (運営委員長)	松谷 隆 (再選)
副会長 (事務局長)	平尾 富男 (再選)
理 事	都甲 昌利 (再選)
理 事 (会計担当理事)	大泉 潤 (再選)
理 事	大平 忠 (新任)
理 事 (会計)	清水 勝 (新任)
監 事	山縣 正靖 (再選)

二、二〇〇八年度の方針

①ペン活動の重要な情報発信・作品発表の場として、ホームページの更なる改善と会員の積極的な投稿活動を目指す。

②「掌編小説」「川柳」等々の分科会活動の成果として、ホームページ内に蓄積された作品の出版(デジタル出版を含め)を目指す。並行して、「七十歳の視点」等の新たな出版企画を意欲あるプロマネの選任によって推進する。

③年齢、性別にとらわれず、遠隔地居住者も視野に入れた会員拡充活動を展開する。

三、会員数(六十二名)

二〇〇七年末の会員数は五十九名。本年度中に八名の新入会員があつた一方で、物故者一名を含む五名の退会者が出た。従つて二〇〇八年末の会員数は六十二名となった。

・退会会員Ⅱ 中洲靖雄、榎本喜三郎、立石雄士、

関谷裕彦(物故 合掌!)、今川確郎

・新入会員Ⅱ 釘沢淑郎、西川知世、福島英毅、細谷博、宍戸三春、山崎礼子、水原亜矢子、倉藤金助

四、月例会会場の安定確保と活動拠点化

・二〇〇六年度一月から、代々木の「国立オリンピック記念青少年総合センター」が月例会・各種分科会活動の拠点として定着している。

五、出版・オンライン投稿プロジェクト

(一) 「悠遊」第十五号が、二人の編集委員の努力により、二〇〇八年二月に発行された。委員の地道な貢献と会員の協力により、予想以上の出来栄となり、第十六号発行に向けての準備も続けられている。(「悠遊」編集委員Ⅱ大平忠、浜田道雄)

(二) 電子雑誌「ベストライフオンライン」には前年に続き「政治・経済・社会の目」および「年金」のコラムに継続掲載され、好評を博している。新入会員の積極的投稿も実現し、コラムの充実が維持発展されている。(プロマネⅡ大泉潤)

新たに、B/L経由で「映画試写会」への参画を開始し、独自の映画評論・エッセイのコラ

ムを、ホームページに用意することが決まった。

(担当Ⅱ大泉、田谷、他)

(三) 電子雑誌「ナムコトラベル」の新しい企画「はみ出しレポ」に参画し、投稿活動が継続中。

(プロマネⅡ松谷隆、大月和彦)

(四) 川柳勉強会も今年末で四年半を迎え、勉強会(句会)も五十五回を重ねる成果を踏まえ、一昨年に続く出版を目指したが、企画は途中で挫折。奮起一転、来年度以降にもその可能性を模索中。

(世話人Ⅱ平尾富男)

(五) 昨年経験した電子出版に引き続き、新たな出版を模索中。(プロマネⅡ松谷隆)

(六) 「何でも書こう会」から生まれた「800字文学館」の公開ページ掲載により、ホームページに対する一般読者の閲覧数も増え、将来の出版に向けた体制作りが整った。(プロマネⅡ野瀬隆平)

(七) 昨年度より発足した「掌編小説勉強会」の成果も七十余作品となり、メンバーの中から各種文学賞への応募・挑戦も始まっている。将来的な文芸

出版に対する希望と意欲に燃えている。

(プロマネ＝濱田優・西川武彦)

六、ミーティング・勉強会

(一) 「英語を読もう会」

発足以来八年目を迎えた長期継続の分科会活動は、時事問題のみならず、小説、論文を含む英語の文章の講読を通じ、読解力向上と広い知識の向上を楽しんでいる。

日程は「サロン21」と同日の開催となり、相乗効果として両分科会に併せて参加する会員も増えている。(プロマネ＝佐久間直正)

(二) 「何でも書こう会」

800字の文字制限で、エッセイ・論説・超短編小説等を音読発表し、出席者全員で自由闊達に批評し合う楽しい文章力向上の分科会は、新入会員の参加により、楽しい雰囲気の中で発展中。

ここでの批評・修正提案を得て更に作品を推敲したもの、有志が公開ホームページ「800字

文学館」へ掲載している。将来的には、作品集の出版も視野に入れて発展中。(プロマネ＝野瀬隆平)

(三) 「サロン21」

二〇〇八年度は、年間を通して「日本近現代史」をテーマとし、幕末維新から、旧憲法制定・議会開催、日清・日露戦争、第一次世界大戦、世界不況を経て、満州事変・シナ事変勃発までの約一〇〇年間の日本の歩みを勉強した。

小説やテレビドラマでは多く取り上げられながら、戦後の学校現場では避けられてきたテーマであり、歴史認識としての定説が必ずしもできていない日本史のひとコマである。この短い期間に日本は近代化に成功しながら、やがて自我自尊の国となり、世界の孤児となって没落の憂き目に遭った。現代の日本を知る手がかりがこの時期の歴史に秘められている。(プロマネ＝金京法二)

(四) 「IT勉強会」

会員のパソコン理解力の向上に伴って、勉強会

は現在中止しているが、ホームページ利用の方法を中心に必要に応じ開催することとなった。

(プロマネ＝松谷隆、平尾富男)

(五) 「ペン俳句会」

西川知世さんも今年から正式に会員となり、「ペン俳句会」の指導者として益々板についてきた。クラブのホームページで公開されている毎月の勉強会の成果「ペン歳時記」も、平成十六年一月以来続行中で多くの読者を獲得している。

また、若い世代が新たに入会し、句会は以前に増して活気に満ちてきた。来年はさらに多くのペン俳句人が増える年となるものと期待している。

(世話人＝中村將陸)

(六) 「川柳勉強会」

二〇〇四年六月以来、二〇〇八年末で第五十五回目を迎える長期継続勉強会となった。出席者全員による和気藹々とした雰囲気の中で選句・句評を行い、企業OBらしい川柳を模索・研鑽している。勉強会会場の黒薩摩総本店銀座で、新たな出

版企画への情熱も失わずに楽しんでいる。(世話人＝平尾富男)

(七) 「掌編小説勉強会」

昨年立ち上げた勉強会は、既に男女八人のメンバーによる総計七十数作品の力作掌編小説が会員向けホームページに掲載されるという快挙となった。(プロマネ＝濱田優、西川武彦)

七、まとめ

二〇〇八年度は、四人の女性会員も含む優秀な新入会員も加わり、新しい活動に向けて躍進が期待出来る。一方で、年齢による退会会員の続出の可能性を考慮すると、更なる女性会員の増強と団塊世代の会員の勧誘が必須である状況は変らない。

今後とも、時代の流れに後れを取ることなく、ホームページへの投稿を含む「書き・発表」することをクラブ活動の中心に見据えて「企業OBペンクラブ」の改革と前進を、会員全員の参加

によって実現したい。その為にも、来年二〇〇九年末に改選される新理事・役員体制に引き継ぐべく、意欲ある会員の増強により、積極的な「ベン」活動に向かって努力したい。

（文責・事務局長）



執 筆 者 名 簿 (五十音順)

氏 名 (カッコ内は本名)		出 身 会 社
阿部 洋己	あべ ひろき	キリンビール キリンビバレッジ
安藤 晃二	あんどう てるつぐ	三菱商事
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞社
稲宮 健一	いなみや けんいち	三菱電機
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン
上田 信隆	うえだ のぶたか	東芝情報システム
上原 利夫	うえはら としお	住友商事
鵜飼 直哉	うかい なおや	富士通
遠藤 俊也	えんどう としや	東京銀行 丸紅
大泉 潤	おおいずみ じゅん	三菱化学
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄
大月 和彦	おおつき かずひこ	労働省
大西 宏	おおにし ひろし	松下電器
大平 忠	おおひら ただし	三菱化学
大野 晃	おおの ただし	三井物産
大庭 定男	おおば さだお	三井物産、野村総研
亀井 弘次	かめい ひろじ	キリンビール
木下 洋介	きのした ようすけ	文化放送
金京 法一	きんきょう ほういち	三菱商事、三菱総研
釘澤 淑郎	くぎさわ よしろう	三菱化学
倉藤 金助	くらふじ きんすけ	倉藤会計事務所
児玉 忠雄	こだま ただお	三菱銀行
佐久間直正	さくま なおまさ	日本郵船
三 春	みはる	住友商事
清水 勝	しみず まさる	明治安田生命 (安田生命)
莊司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨重工業
杉浦 右蔵	すぎうら ゆうぞう	NTT、三菱電線工業
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅、松竹
田谷 英浩	たや てるひろ	神鋼電機
垂水 健一	たるみ けんいち	中日新聞 (東京新聞)
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省、日英協会

氏 名 (カッコ内は本名)	出 身 会 社
都甲 昌利 鳥海 博 中川路 明 中村 爽 中村 将陸 新山章一郎 西川 武彦 西川 知世 野瀬 隆平 橋本 政彦 浜田 道雄 濱田 優 平尾 富男 福島 弘毅 古川 幸雄(幸雄) 細谷 博 松谷 隆 水原亜矢子 三宅 劭 森田 茂 山縣 正靖 山崎 礼子 吉寄 清巳 吉田 邦彦 渡里 清	日本航空 山一証券 ダイセル化学工業 日本工営 富士通 在日米海軍基地、統合人事部 日本航空 三菱倉庫 石川島播磨重工業 日商岩井 労働省 三菱化学 キャノン テルモ、ライカ 安宅産業、石川島播磨重工業 日立製作所、日立メデイコ 富士通 東急電鉄 信越化学 出光興産 三菱銀行 関西ペイント 安田生命 山一証券

本号で一番嬉しいのは投稿数が前号を上回り五十五名に達したことである。編集者冥利に尽きるといつてよい。

しかし、長年健筆を誇ってこられた関谷さんのお名前が無くなったことは無性に寂しい。他にも体調を崩されて欠場された方もおられ、一日も早く回復されて、来号には再登場されることを心からお祈りしたい。

今回は、私がときならぬ入院をしたり、パソコンが寿命となって新機との入れ替え作業に手間取ったりで、専らインフルエンザ快癒間もなくの浜田さんにご苦勞をかけてしまった。強力な頼り甲斐ある相棒に感謝いたします。

(大平)

十六号発行にあたっては、たいへん多くの方が協力して下さいました。早い時期から原稿を送って下さった方が多かったが、編集方針から何人かの方には原稿の縮小など、手直しをお願いせざるを得なかった。皆さん、お忙しいにもかかわらず快く受けて下さったが、せっかくの作品にこのようなお願いをすることは、編集担当としては大変心苦しく、また申し訳ないことだった。編集後記の場を借りて、心よりお詫び申し上げます。

(浜田)

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第十六号

二〇〇九年二月十八日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ会長

西川 武彦

印刷所 株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋二一ー一

TEL 〇三三三二二五一八〇

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 平尾 富男

横浜市青葉区田奈町三三ー二 (〒二二七ー〇〇六四)

Eメール: hira0321@04.iiscom.net

クラブURL: <http://www.obpen.com>

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店(409)

企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝

(普通) 1086096